
昏い道連れ

洸海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昏い道連れ

【Nコード】

N4558Y

【作者名】

洸海

【あらすじ】

妖退治を生業とする流れ者の雷火は、雨宿りに選んだ木陰で一人の少年と出会う。神官戦士になるために必要な「しるし」探しの途中だという彼と、ひとまず共に行くことにする雷火。だが少年の背後には、ひっそりとして来る不吉な昏い影があった。和風異世界ファンタジー。サイトにはダウンロード版のみ有。残酷描写はたまに少しあるだけで、タグを付けるか付けまいか悩むレベルです。

一 雨宿り（1）（前書き）

上代と室町だか江戸だかをこっちゃにしたような、なんちゃってジヤパニーズファンタジー設定です。神道用語や祝詞も多く出てきますが、現実の定義や用法とは別物としてご覧下さい。

一 雨宿り（１）

—

あんた、雷は好きかい？

俺は大好きだね。自分の名前に雷の文字が入ってるからつてもあるが、真っ黒な雲の中にひらめく稲妻の光は、他のどんなものより格好いいじゃねえか。犬や狐や、小胆な奴らが、こぞつて穴蔵に頭をつつこんで震えている遙か上で、雲を引き裂き、空を駆け抜ける。俺もあんな風に生きたいもんだ。

もつとも、そんな事が言えるのも、そいつが雨を連れて来ない場合だけだ。なぜかって、俺は宿なしだから。

たまたま屋根の下にいる時はいいぜ、自分は濡れずに見物してられるからな。だが、こんな風に野原の真ん中でいきなりドザーッと来られた日には、まったく！

「くそつたれ！」

文句のひとつも言いたくなるつてもんだ。空きつ腹に雨がしみるぜ、ちくしうめ。

右にも左にも、人家はまったく見当たらなかった。うち捨てられて荒れ放題の畑、ガマだの葦だのがぼうぼうに茂った湿地。その間を走るこの小道の先には、前の宿でおかみが言ったのが正しければ、そろそろ豊平とよひらの村が見えて来るはずだ。そしてそこには、妖あやし退治で日銭を稼ぐ俺みたいな流れ者に、仕事や情報を恵んでくれる周旋屋がある。

……はず、なんだがな。くそ、雨で行く手が見えやしねえ。ああ、腹へった。

手の甲で何度も目を拭ったが、後から後から滝のように雨水がしったり落ちて、何もかもがぼんやりとにじんでいた。

だから、道端に木立が見えた時も、俺はそこに誰か——あるいは

『何か』——がいるとは思わず、やれ助かったと木陰に駆け込んだだけだった。

「ああくそ、ひでえ目にあつたぜ」

ぷう、と息をつく、水しぶきが散った。いやもう、頭のとっぺんから爪先まで、ずぶ濡れもいとこだ。どつからどこまでが自分の体で、着物で、草鞋わらじなんだか、わかりやしねえ。目ん玉まで流れちまってやしねえだろうな。

あれこれ悪態をつきながら、なおも降り続く雨を恨めしく見上げた時だった。

フツ、と後ろで何かが息を吐いた。その熱が体に届く前に、俺はぱつと振り返り、腰に差した刀を抜いた。

待ってましたとばかり、雪のような白い輝きがこぼれる。俺の商売道具にして唯一の相棒、妖退治のために神殿で清められた銘刀、月華。どんな妖だろうと、こいつの前には……

「って、なんだオイ」

構えた刀を下ろし、俺は拍子抜けした声をもらした。薄暗がりの中にいたのは、紛らわしくも真つ黒の犬ところだったのだ。子犬と言うにはでかいが、まだ成犬おとなじゃない。クウンと甘えるように鼻を鳴らし、無邪気な黒い目でじつとこつちを見上げてやがる。

「びつくりさせんじゃねえよ、わんころが。腹がへってんのか？」

悪いな、俺もだ。おまえにやる物がありや、自分で食ってるよ」

やれやれ。俺はため息をついて月華を鞘に収めた。わんころはそれをじつと見つめ、それからおもむろに近寄ると、ふんふんと俺の手を嗅いだ。

「だから、何も持ってねえつつってんだろ。シッシッ」

別に犬は嫌いじゃねえが、こうもまとわりつかれちゃ、落ち着かねえ。追い払おうとしたのに、わんころはしつこく俺の臭いを嗅ぎ、前足でちよいと袂を引っ掻きやがった。

「ええい、食つちまうぞコラ！」

業を煮やして俺がわめくのと、

「クロガネ、戻ってこい」

子供の声が言うのが、同時だった。俺は犬を驚かそうとして両手を振り上げたまま、ぽかんとなって声のした方を振り向いた。

木立の奥の暗がり、ぼうつと白いものが浮かぶ。さては今度こそ妖か、と俺は警戒したが、じきに正体がわかった。白犬を連れた、白い着物の子供だ。見たところ十二歳かそこらだが、こんな所で何してやがるんだ？

黒犬は尻尾をくるりと巻き上げて、嬉しそうにそっちへ駆け戻って行った。小僧は黒犬の頭をちょつとなでてから、顔を上げてまっすぐに俺を見た。

「脅かしてごめんよ、おじさん。こいつ人懐っこくて、構ってくれそうな人を見付けたらすぐに飛んでっちゃうんだ」

「誰がおじさんだ、お兄さんと言え」

餓鬼から見りやおっさんでも、俺はまだ三十路のかなり手前だ。

見知らぬ餓鬼から小父さんおじなんぞと呼ばれるほど、老けちゃいねえ。俺が唸ると、小僧は驚いたように目を丸くした。それからすぐ、面白そうに笑い出す。

「ごめん、お兄さん。俺あんまり、大人のひとの歳って分かんなくてさ。第一この天気でこの暗がりでその格好じゃ、おじさんでもおじいさんでも、区別なんてつかないよ」

笑われて俺は自分のなりを見下ろし、苦笑してしまった。確かに、薄暗い木陰にずぶ濡れの男がぬーっと立ってたんじゃ、人か化け物かも分からねえな。

「まあな。で、おまえさんはどこの誰だい。その装束ってことは、神殿の小僧か」

俺が何げなく問うと、小僧はふつと表情を消した。どうやら身の上について、あんまり詮索されたかねえらしい。短い沈黙の後、小僧は作ったような明るい口調で答えた。

「元は深谷の神殿にいたんだ。でも、一人前になるには、外へも出なきゃいけないって言われてさ。探し物の途中なんだ。そうそう、

おじさんを驚かせたこいつは黒鉄、こっちの白いのは雪白。俺は真理だよ」

「ご大層な名前だな」

俺は呆れて二匹の犬を眺めた。わんころなんざ、シロクロでいいじゃねえか。気取りやがつて、さすが神殿育ちはお犬様も違うつてことかねえ。小僧に至つては真理サマと来る。ぺっぺっ。それはともかく、名乗られちゃこっちも黙つてゐるわけにやいかねえ。

「俺はライカ、雷の火だ。流れ者でね」

「うん、賞金稼ぎだね。さっきの刀でわかった」

けるりと言われ、俺は顔をこわばらせた。無理に笑みを作ると、口が半分がひきつる。

「おい小僧、長生きしたきゃ、その呼び方はするんじゃない」

「どうして？ 流れ者とか根無し草とか言うより、正しい呼び方だと思っけど」

きょんとした小僧の面を張り飛ばさなかったのは、ひとえに腹が減りすぎて怒りも長続きしなかったからだ。

「正しくても、俺たちはそう呼ばれるのが嫌いなんだよ。向かつ腹が立つ。特に神殿の奴に言われるとな。神官どもは、自分たちが妖退治するのは金のためじゃなく、里の人間を守るためだ、なんぞとぬかしやがる」

「だって本当のことだよ」

「大人が話してる間は黙つてろ。で、奴らがいちいちかまけてられねえ雑魚には、雀の涙ほどの賞金をかけて、俺たちみたいな腕っ節だけの荒くれ者が、日銭を稼げるようにしてやつてゐる、ってわけだ。飯の種をくれてやつてんだ、ありがたく思え、ってな」

大体があのだ連中は、神官以外の奴が妖と関ると、途端にクソでも見るような目つきをしゃがる。月華みたいな刀は妖を斬つて穢れが溜まるから、時々神殿へ持つて行つて清める必要があるんだが、そんな時でも、絶対に正面からは入らせちゃくれねえのだ。

「ふうん。俺が聞いた話とはずいぶん違うね」

小僧は単純に不思議そうな顔をしてつぶやいた。俺はなんだか疲れてしまって、近くの木にもたれると、ずるずる座り込んだ。

一 雨宿り(2)

「何を聞いたんだか知らねえが、世の中は良い子ちゃんの耳に入る気持ちのいい言葉ほどには、きれいでも楽しくもねえって事さ」

ため息をつく、腹の中に残っていた最後の空気までなくなつたような気がした。俺は小僧を見上げ、「おい、なんか食うもん持つてねえか」と投げやりに訊いた。

「ごめん。俺も昨日から何も食べてないんだ」

がつくり。俺は頭を膝の間に落とした。隣に小僧が来て、すとんと腰を下ろす。ちえっ、本当にこの二匹の犬を食ってやれたらいいんだがなあ。

と、小僧は何やらごそごそやって、胴乱どうらんから小さな物を取り出した。

「これぐらいならあるけど」

この際、口に入るならなんでもいい。俺はぱつと小僧の手に飛びついた。そしてふたたびがつくりする。木の皮じゃねえか。

「おなかは膨れないけど、少しは気が紛れるよ」

ほら、と小僧が言うので、何もないよりはマシかとその木っ端を受け取ってくわえた。しがんでいると、甘いような苦いような、妙な味が染み出てくる。確かに腹の足しにはならねえが、なんとなく飢えがおさまったような気がした。不思議なもんだ。

俺が骨をしゃぶる犬みたいにいじましく木の皮をかじっていると、横で小僧が勝手にしゃべりだした。

「俺がいた深谷の神殿ではね、賞金稼ぎには……あ、ごめん。流れ者には感謝しろって教えられたんだ」

「へーえ、そりやまた奇特なこった」

「神官の中でも法部に属する戦士たちは、いつも何人かで組んで妖退治をしているから、一人で勝手にあちこちに行くことは出来ないんだって。一匹二匹の小さな妖が悪さをしたからって、ちよつと行

って退治する、ってことが出来ないんだよ。そこで、おじ……お兄さんたちの出番だってわけ」

小僧はそこまで言って、俺が聞いているかどうか確かめるように、こつちの顔を覗き込んだ。ちえっ、まったく、なんて目をしてやがるんだか。純真無垢ってのはこういうのを言うのかね。

「知ってる？ 賞金稼ぎの中には、元神官戦士って人も結構いるんだよ」

「そいつぁ初耳だな」

俺は思わず本気で驚いてしまった。小僧は得たりとばかり、にっこりする。

「きつとおじ……お兄さんみたいに神官を嫌う人が多いから、言わないんじゃないかな」

厭味な小僧だな、いちいち言い直すんじゃないやねえよ、ちくしょう。

俺は苦い顔で睨んでやったが、薄暗がりだから見えなかったらしい。小僧は気にせず話を続けた。

「でも俺たちはそういう人の話をよく聞くよ。人を守りたくて神官になったのに、まるで自由がきかないから、しまいに誰かを助けるために飛び出して行っちゃうんだってさ」

「それが本当なら、神官も捨てたもんじゃねえがな。しかし俺が見てきた限りじゃ、神官なんざ、どいつもこいつもくそつたれだ」

俺は言い捨てて、雨足の弱まってきた空を見上げた。さつきより明るくなってきたようだ。これなら、もうじき出発できるだろう。今日中には豊平に着きたいからな。

小僧は、俺があんまり感動しなかったせいかな、ちよいとがっかりした様子で黙り込んだ。これだから餓鬼は嫌いなんだ、なんで俺がこんな気分にならなきゃなんねえんだよ？ 俺は弱い者いじめした悪党か？ 本当のことを言っただけだってのに！ ああもう。

しょうがねえ。俺はため息をついて、小僧の話に調子を合わせてやった。

「まあな、おまえがいたような田舎の神殿じゃ、話は違うのかも知

れねえな。俺はだいたい、豊かな村や大きな町を回って、せこい妖
ばっかり退治してるからよ。そういう所の神殿はどこーんとでかく
て立派だから、神官の連中もお高くとまってやがるんだ」

「そうかもね」

小僧は言って、神妙な顔つきでうなずいた。やれやれ。

「おつ……雨がやんだみたいだな。んじやな」

俺は立ち上がると、口にくわえていた木の皮をちよいとつまんで、
「これ、ありがとよ」

礼を言ってからその辺にポイと捨てた。俺が歩きだすより早く、
小僧が慌てて立ち上がり、二匹の犬とそろって俺を見上げた。おい、
まさか。

「もう行くの？」

……待て。ちょっと待て、待てったら！ そんな目で俺を見るな
！ しかも三人がかりとは卑怯だぞ！

「勘弁してくれ」

俺はうめいて顔を覆った。冗談じゃねえ、てめえの飯もままなら
ねえつてのに、いきなり一人と二匹の食いぶちまで面倒見られるか
ってんだ。

苦悩する俺を見て、小僧はおかしそうな笑い声を立てた。

「待ってよ、俺まだ何も言っていないよ」

「言ったも同然だろうが、くそ、わんころまで一緒になって見つめ
やがって！」

「あはは、おじさん、犬好きなんだ」

「おじさんじゃねえつつつてんだろ！」

凄んで見せたが、効果はなかった。ごめんごめん、なんて言いな
がら、小僧はけたけた笑ってやがる。

「はあ……まったく。あの子、俺はこれから豊平に行つて、周旋屋
で仕事もらつて、それを片付けなきゃ飯一杯にもありつけねえんだ
ぞ。ついて来たつて、いい事なんざなんつにもねえんだぞ」

「心配しなくても、俺だつて妖退治に手を貸せるよ。こつ見えても

一応、神官としての修行は積んでるからね。簡単な法術は使えるし、剣も持つてる。雪白と黒鉄も戦えるよ」

「どうだかな」

俺は胡散臭い気分で二匹の犬を見やった。黒助の方は相変わらず機嫌良さそうに、尻尾を小さく揺らしながら無邪気に俺を見つめている。白い方は逆に、俺を値踏みするような目付きをしゃがった。何様のつもりだ、このわんころが。

「どっちにしるおまえらの行き先も豊平だつてんなら、しょうがねえ、ご一緒するさ。けど、いいのか？ 何か探し物してるんだろ」念のため小僧に確かめると、なぜだか小僧は急に曖昧な顔になってうなずいた。

「うん、いいんだ。どこにあるのか、はっきり分かってるわけじゃないから」

「……へえ？」

いったい何を探してるってんだ？ ちょいと気にはなるが、どうせそう長く一緒にいるわけでもねえだろうし、俺の知ったこっちゃねえな。

「じゃ、日が暮れちまわねえ内に行くか！」

景気づけに威勢よく上げた声に調子を合わせ、疲れた足を励まして歩きだす。

少し進んでから、俺はふと何かが気にかかり、ちらつと後ろを振り返った。小僧とわんころはしっかりついて来ている。どうやら、空腹のあまり木陰でまぼろしを見た、という都合のいい話にはなつてくれねえらしい。

（しかも……なんか余計なもんまでいやがるぞ）

俺は何も見なかったふりで、また前を向いた。だが間違えようもなく、俺たちのずっと後ろに、そこだけまだ雨が止んでいないかのような暗がり、うつそりと佇んでいた。

振り向かなくても分かる。そいつは、俺たちを黙って見送り……それからゆっくり、後を追って動き出すのだ。

妖とは少し気配が違う。今のところ悪さをする様子もない。下手につついて招き寄せるより、放っておきや自然に離れてくれるだろう。たぶん。

（でなけりゃ、こいつの出番ってただけだ）

俺は左手で月華の鞘を握り、そうならないことを祈った。この刀であいつが斬れるかどうか、ちよいと自信がなかったからだ。

二 豊平村

二

豊平村はその名の通り、豊かな平地だ。田圃には稲が青々と茂り、構えのでかい家が続いている。村の中心部に近づくにつれて、街道沿いにちまいました家が増えてきた。里の者や旅人を相手にした、色々な店の並びだ。

俺の後ろを歩きながら、小僧は物珍しげに、やたらきよるきよるしている。まあ、あちこちに走ってったり店先で騒いだりしねえだけ良しとするか……。里に入る前にあの影も薄くなつて消えちまつたようだし、贅沢言つてちやきりがねえ。

道に面した店はどれも、構えはそれなりだが、商いは田舎の里らしく地味なもんばかりだ。鑄掛屋だの荒物屋だの、茶店だの。もちろん旅籠もあるが、今の俺たちや文無しだ。ちえっ、早いとこ周旋屋を見付けねえとな。

「にぎやかな町だね」

ふいに小僧が言った。俺は振り返り、呆れ顔をする。

「深谷つてのはどんなド田舎だ？ 確かにここはそれなりの村じゃあるが、町なんて言えるもんじゃねえぞ。町つてのはな、もつと色んな店がうわーっと並んで、人通りもこんなもんじゃねえ。飯屋に煮売屋、小間物屋。職人だつて建具師に大工に庭師に細工師とわんさか住んでるもんだ」

「ふうん。想像つかないや。深谷はね、百姓と炭焼きと猟師ぐらいしかいなくて、神殿にも明師様と書士さんがいるだけだったんだ」
「ミヨウシ？ ああ、祭礼を司る神官だな。それと記録係のオマケつきか」

神殿てのは、神様を祀ってるだけじゃなく、里の住民の記録をつけてもいる。生まれた、死んだ、結婚した。そのいちいちに神殿が

絡むんだから、当然だつて言やあ当然だ。で、もちろんそういう事がある度に金がかかる。神官サマが帳簿までつけてたんじゃ、肝心の祭礼がおろそかになるってんで、その仕事専門の下っ端がいるわけ。

「そんなド田舎じゃ、神官一人でも事足りるだろうに。金が余ってるんなら、俺によこせってんだ」

「けっ、と俺が毒づくくと、小僧はこっちを見上げて、大人じみた苦笑を浮かべやがった。」

「明師様はもうだいぶ、お年だったからね。書き物をするには目が不自由だったんだよ」

「おまえにやらせりゃ手習いにもなって、一石二鳥じゃねえか。おっ、周旋屋の看板だ。やっと見付けたぞ。ちよっとでも前払いしてくれりゃいいんだがな」

「ごめんよ、と声をかけながら暖簾をくぐる。中には人つ子一人いなかった。ここが平和な里だつて証拠だな。こりゃ、仕事があるかどうか怪しいぞ。」

「誰かいねえのかい」

声を張り上げると、奥から「はいはい、ただ今」と男が一人、慌ててやって来た。血色のいいぽっちゃりした丸顔の中年だ。何かなし気に食わねえが、周旋屋の親父がどうでも仕事は仕事、銭は銭。

「よう。どうやらここは平和な里らしいが、流れ者もおこぼれにあずからせちゃくれねえか。できれば手っ取り早く済ませられるのがいいんだがね」

「それでしたら……」

親父は言いかけ、ぎよっと目を剥いた。なんなんだ？

俺は背後を振り返って、ああ、と納得した。餓鬼に犬ころまで連れた賞金稼ぎなんざ、そうそうお目にかかるもんじゃねえよな。

「後ろの奴らは気にすんなよ。そこらで行き会ってたまたま一緒になっただけだ」

「はあ……でも、神官様で？」

「まさか。こいつは白装束を着ちやいるが、まだ神官じゃねえ。一人前になるために修行してるところなんだとよ」

「それはまた、こんなに幼いのに感心なことだ」

親父は愛想笑いを浮かべ、揉み手でもしそうな様子で小僧の顔色をうかがう。やっぱり気に食わねえ。

「そいつのこたあどうでもいい。こちとら空きっ腹抱えて待つてんだよ、さっさと仕事をよこしやがれ」

苛々して物言いが剣呑になる。くそ、腹が減りすぎて親父の機嫌を取る余裕もありやしねえ。もちもちしたその頬つぺた、むしりつつて食ってやろうか。

俺の心中が分かったのか、親父は慌ててこちらに向き直ると、いそいそと帳面をめくりだした。

「はいはい、失礼致しました。何分この豊平は御霊も妖もとんと出ない所ですからね、神殿の方にもここ数年はまったくお願いすることもないほどでして……でもまあ、お困りのようだから、これなんていかがです」

親父は帳面を広げ、俺の方に向けて差し出した。俺はざっと目を通し、妙な顔になる。

「ふーん？ 要するに、この巫師^{ふし}を追い出してくれってことかい」

「ええ、そうです。村外れに住み着いておりましてね、何やら怪しい影やら奇妙な生き物が、その家の近くをうろついているのが薄気味悪くて。とは言っても今のところは格別悪さをするでもないんで、神殿にお願いするほどのことでもありませんし。第一、神官様においで頂くとなったら、謝礼もかなりのものですから、とてもとても「なんで自分たちで追い出さねえんだい。里の衆が皆して鍬持って脅しをかけりや、一発で出て行きそうな気がするがね」

「無茶おつしやらんで下さいよ。あたしらは妖のこと^{みたま}も御霊のことも、何も知らんですよ。下手をして怒らせたらどうなるか！ だから皆で金を出し合って、賞金稼ぎに頼むことにしたんですよ」

親父は大袈裟なほどおびえた顔をして、身震いした。やれやれ、

白けちまう。

「まあな、流れ者だったら祟られようが呪い殺されようが、あんたらは痛くも痒くもねえからな」

「何をおっしゃいますか、そちらさんは妖退治の玄人でしょう？
年寄りの巫師ひとりぐらい、簡単なものでしょうに。ああそうだ、引き受けて頂けるのなら、いくらか前払いしますよ。腹が減っては戦は出来ぬ。そうでしょう？」

痛いところを突いてきやがる。俺は苦笑いするしかなかった。村外れにおとなしく住まってる年寄りを追い出すなんぞ、あんまり気持ちのいい仕事じゃねえが、仕方ねえ。こちらら腹と背中がくつきそうなんだ。

「ああ、確かにな。ほかには何もねえんだろ？　引き受けるさ」

てなわけで、俺と小僧は無事、かなり遅い昼飯にありついた。

一膳飯屋はもう店仕舞いをしかけていたが、こういう時は子供と犬ころって取り合わせは激烈によく効く。給仕の女が、俺のことを人買いでも見るように睨みやがったのは、ちと引っ掛かるが、ともかくまあ飯が食えりや何だっていいさ。

「お、来た来た。二日ぶりのまともな飯だ、ありがてえ」

湯氣を立てている飯に両手を合わせてから、まずは一口。

「……………」

おかしいな、こんだけ腹が減ってりや大概のもんは美味いはずなんだが。まずくはねえんだが、何かこう、足りねえって言うか、妙な味だな。茄子の煮物の方は……うん、美味い。はて、どういことった？

複雑な顔でもぐもぐ口を動かしつつ、思わずちらっと店の奥を見る。たまたま目が合った給仕の女が、俺の顔を見て眉を逆立てやがった。うへえ、くわばらくわばら。

慌てて飯に向き直って一心に食い、あらかた片付いた頃になって小僧が口をきいた。

「雷火さん」

名前で呼びかけられ、およ、と俺は目をしばたいた。何度もおじさんと言ってはお兄さんと言い直すのが、いよいよ面倒になったってわけか。

「なんだ？」

「俺たちが追い出すっていう、フシって……何？」

おずおずと訊かれ、俺は目を丸くした。

「知らねえのか？　おいおい、冗談だろ。深谷ってのがいかにド田舎でも、一人ぐらいいなかったのか？」

「いなかったよ。神殿でも教わらなかったし」

「はあ……こりやたまげた。まあ、そんな所じゃ巫師がどうのと教えてみようがねえよな。そうだな、どう言やぁいいか……」

俺は、足元で残り物をがつついていている二匹の犬にちよつと目をやっってから、もつたいぶって説明してやった。

「巫師ってのはな、神官とは違うやり方で、妖や御霊を呼び寄せたり操ったりする連中さ。それで人に呪いをかけたり、人の秘密を暴いたり、縁結びや縁切りをしたりするんだ」

「悪い人たちなんだね？」

小僧が眉をひそめたので、俺はますます先輩面をしてそっくり返った。

「まあ大半はそうだな。話の通じねえ恐ろしいジジババばかりだが、皆が皆そうってわけじゃねえ。病や怪我や災難をふっかけることも出来るが、逆のこと、つまり治す方も出来るんだ。ただ神官と違って連中は自分勝手にやってるから、そこんところが厄介なのさ。病を治して貰いに行ったのに、怒らせたら逆にもっと悪くされるかも知れねえ。道ですれ違ったのに挨拶しなかったら、次の朝には大事な牛が死んでるかも知れねえ」

そこまで言って、茶をすすする。小僧は難しそうな顔で考え込んでいた。

「やっぱり悪い人みたいに聞こえるけど」

「悪いこともするが、貧乏人にとつちや重宝でもあるのさ。さっきの親父も言ってたろ、神官は金がかかる、って。巫師の方がたいていは安上がりなんだ。それに、隣のいけすかねえじじいをぎっくり腰にしてくれとか、村一番の別嬪さんを嫁にしたいとか、そういう頼み事は神官には出来ねえしな」

俺はちよつと意地の悪い気分になつて、にやにやしなから言つた。はてさて、神殿育ちの純真な小僧がどんな反応をするものやら。

ところが小僧が言つたことときたら、俺の予想とはてんで違つていた。

「でもこの村では、気味が悪いから追い出そうつて言つんだね。しかも自分たちでするんじゃないに、よそ者にやらせようとしてる。なんだか嫌な感じだなあ」

おおよ。こりや驚いたね。俺はとつさに何と言つたら良いものか分からず、馬鹿みたいにぽかんと口を開けて絶句した。真理の名前は伊達じゃねえってことらしい。

俺がまじまじと見ているのに気付き、小僧は顔を上げて「なに」と不審げに眉を寄せた。ちょいとばかり照れもまじっていたかも知れない。

「いやあ、おまえさん、世間知らずかと思いきや、なかなか言つじやねえか」

「えっ……俺、何か変なこと言つた？」

途端に小僧は赤くなる。俺はにやつとして身を屈め、小僧に耳打ちした。

「いや、この仕事が気に食わねえのは俺も同じさ。でもそれは、村中じゃ黙つてな」

それから俺はまた体を起こし、やれやれとこれ見よがしに伸びをしてから、楊枝で歯をせせつた。小僧は複雑な顔で俺を眺めていたが、やがてその目を楊枝入れに移し、おもむろに一本抜いて俺の真似を始めやがった。

「おいおい、やめとけよ。神官になろうつてえ奴が下衆な癖をつけ

「ちや困るぜ」

「そうなの？」

きょんととして問い返し、小僧は楊枝を前歯で挟んでぶらぶらさせる。何やってんだ、こいつは。俺は苦笑してその楊枝を取り上げ、空になった茶碗に放りこんだ。

「それより、おまえのことを聞かせろよ。何か探してるってったよな。何なんだ？」

俺の質問に、すぐには返事がなかった。小僧は目を伏せて、未練がましく楊枝を見ているふりをしたが、しばらくしてようやくぽつりと答えた。

「しるし」

「あ？」

「しるしを探してるんだ。一人前になる前に、誰もが自分だけの『しるし』を見付けなきゃいけないんだって。それが何なのかは人によつて様々だけど、見れば必ず、それが自分の『しるし』だと分かる。だから、どこにあるどんな物かは、誰にも教えることは出来ないんだってさ」

「……何だそりゃ。んじゃ何か、『これだ！』って閃くまで、いつまでもどこまでも探し続けなきゃならねえってことか？ だったらそこらで適当なもの見繕って帰ったって、バレねえんじゃねえのかい」

神官のやることあよく分からん。呆れた俺に、小僧は真剣な顔で首を振った。

「そういう問題じゃないんだ。法術や剣術を修めても、『しるし』を見付けなきゃ、自分を守ってくれる一番大事な力が得られないんだって」

「へーえ。普通はどういうものなんだ？」

「よく知らないんだ。深谷には戦士がいなかったから」

「明師さんは、妖退治はしねえのか」

「儀式で祓えるものなら退治するよ。でも武器や法術で戦うのは、

法部の人。法師とか戦士とかね。俺はまだ侍士^{じし}だけど。『しるし』はね、時々来て下さった羽山の法師様の話だと、鴉や犬みたいな動物だったり、草木や川だったりするんだって。太陽や月をしるしに持つ人は、ものすごく強いらしいよ」

話が戦士のことになった途端、嬉しそうによくまあしゃべること。それだけ懂れてるってことなんだろうなあ。その笑顔があんまり無邪気なもんで、俺は、胸に浮かんだ疑問はどこぞへ蹴っ飛ばして、別の事を口にした。

「おまえのも、何か格好いい『しるし』だといいな。何たって名前が真理なんだ、それに見合うのでなきゃな」

「俺は別に、蟻とか石でもいいんだけどね」

照れたように言いながらも、真理は期待に目を輝かせている。だから俺は言い出せなかった。

おまえみたいな小せえ子供が、もう一人前になるための『しるし』探しに出されるもんなのか、とか。

誰も深谷の名前を聞いたことがねえような遠い土地まで来なきゃ、『しるし』ってのは見付からねえもんなのか、とか。

——そういうことは、訊いちゃいけねえ気がした。

三 初仕事（１）

三

腹ごしらえを済ませて一休みした後、俺と小僧は連れ立って村外れへ向かった。もちろん、白黒のわんころどもも一緒だ。

巫師の住み着いたあばら家つてのは、田圃の間を走る小川に沿って、ずっと川上へ行ったところにあるって話だったが、途中やたらと二匹の犬があちこち嗅ぎ回るんで、はかどらねえったらありやしねえ。日が暮れる前にやつつけちまいてえのに、人間様の都合なんざお構いなした。

田圃にはちょうど水が張ってある時期で、稲の青々とした葉が風にそよいでいる。世話が行き届いていると見えて、何だか偽物臭えぐらいにきれいだ。川つぺりにはぼつぽつと若木が植えられていたりして、趣もある。しかし、あいにくこちら風流とは縁遠い流れ者だ。わんころに付き合って、田圃を見ながら歌を詠むってわけにもいかなえ。

「おい真理、この白黒兄弟、もちつときちんとしつけとけよ。道草ばつか食いやがって」

「何かが気になるんだよ」

答えた小僧も落ち着かない様子で、辺りを窺っている。

「何かつて、何が」

「分からない。でも、この村は変だつて気がする」

「おまえ、ほかの村を見たことあるのか？」

思わずそう言った俺に、小僧はいつちよまえにムツとした顔を向けた。

「そういう意味じゃなくて」

「ああ、分かった、分かっている。悪かった」

俺は慌てて手を挙げ、小僧を遮った。やれやれ、冗談が通じねえ

なあ。俺は足を止めてため息をつき、草むらでふんふんやつてるわんころどもを見やった。

「確かにね、この村はどことなく妙な空気が流れてる。それは俺も同感だよ。このぐらいの村になりや、人里に群がる小物の妖がちらほらしてるもんだ。神殿がすぐ近くにある場合は別だが、この神殿はどうやらちよいと遠いようだし、そこらに何か飛んでたつておかしかねえ。だがさっぱり見当たらねえとなると、村全体によつぽど強力なまじないでもかけてあるのか、その村外れの巫師がこの辺の妖を一匹残らず呼び集めてるのか……」

曖昧に言葉を濁した俺に代わって、小僧が偉そうに締めくくった。
「何にしる油断は禁物、だね」

生意気な。そりゃ俺の台詞だったの。とは思えど、それを口に出しちゃ大人気ねえ。

「そーゆーこつた」

それだけ言つて、ぺしんと軽く小僧の頭をはたいてやった。

「おら行くぞわんころども。さつさと片付けて財布にも餌をやらねえと、また野宿になつちまうぞ。おまえらは地べたで良くてもな、人間様はたまにや布団で寝たいんだ」

白黒二匹を急ぎ立てながら、さらに小川沿いの道を進む。田圃が途切れて人影もなくなった辺りで、ようやく目指す小屋が見付かった。どうやら水車小屋だったらしいが、ぶつ壊れちまつてるのは遠目にも分かった。茅葺き屋根にペンペン草が生えてらあ。

「ふーむ……見たとこ、特に変なもんはいねえな」

ちよいと手前で立ち止まり、とつくり小屋を眺めてみる。妖の姿はちらとも見えねえし、御霊の影もねえ。周旋屋の親父が言つた様子とは、ちと違うんじゃないか？

「しかし何だね、嫌な感じがしやるよ」

無意識に手がうなじをさすっていた。妖にしる御霊にしる、性質の悪いのがいやがる時は、ここら辺がムズムズする。今もそうだ。横を見ると、小僧は打って変わって真剣な顔つきになっていた。

二匹の犬はそれぞれ小屋を睨み、喉の奥で小さく唸っている。どうやら、こいつらにも分かるらしい。

「とりあえず、俺が様子を見るからな。おまえらは下がってろよ」
餓鬼とわんころに先陣を切らせるわけにやいかねえ。俺は用心しいしい小屋に近付き、まだ明るいのにきっちり閉ざされた戸を叩いた。

「おい、誰がいるか」

バンバン。てのひらで二回。返事はない。

「いるんだろ。巫師のじいさんよ」

ドンドンドン。拳で三回、叩き終わるや否や、ゴトリと戸が開いた。隙間から覗いたご面相に、俺はぎよっとなって後ずさる。シミと皺だらけの、病葉^{わくらば}みてえな皮が骸骨にへばりついた、なんとも化け物じみた顔だ。目ん玉は白く濁っていたが、それでも俺が見えるのか、ぎよろりとこつちを睨んでやがる。戸を開けた手はまるつきり枯れ枝みてえだ。

「よう。村の周旋屋でちよいと頼まれてな」

なんとか俺がそう言った途端、犬どもがワンワン吠えだした。くそ、うるせえぞ！ 気が散るじゃねえか。

じじいは瞬きもせず俺を見つめたまま、ゆっくり首を傾げた。そのままぼろつと首がもげちまいそうだ。うへえ。俺はゆがめた顔をごまかそうと咳払いして、言っても無駄だと予感しながら言葉を続けた。

「あんたが何をしたか知らねえが、村の連中はあんたがいるだけで不気味なんだよ。ここからあんたを追いついてくれって頼まれたんだ」

「わしゃあ……出て、行かん……ぞあ」

囁れた声が、じじいの喉から隙間風よろしく漏れてくる。今にも死にそうな声のくせに、目だけはぎらぎらして、おつかねえっとなぜ。

「そうは言ってもな、こんなとこに住んでたって、あんた何にもい

い事はねえだろう。村人に嫌われてるんじゃない、客も来ねえんだし……って、ああもう、ワンワンうるせえな！」

俺が後ろをちらつと見て舌打ちしたと同時に、じじいがにたあつと笑った。

「村の衆はあ、親切じゃで、な」

「何？ まさか」

やべえ！ 背筋に冷たいものが走り、俺は反射的に大きく飛びすさった。

入れ替わりに白と黒の影がさつと前へ飛び出し、じじいに躍りかかる。その瞬間、じじいの体が音を立てて破裂した。

「うわッ！」

固いものに突き飛ばされ、俺はぶざまにひっくり返った。ギャンッ、とわんころの悲鳴が聞こえる。ちくしょう、何がどうなってんだ！？

頭を振って起き上がろうとしたが、俺の体はでけえ木の根っこにがつちり押さえ込まれていた。なんなんだ、くそ！ 月華を抜こうにも手が動かさねえ。じたばたしていると、根っこに見えたものが、ナメクジみたいにぐにやりと動いた。

「いつてえ！ くそおッ、離しやがれ化け物め、この……うげ！」

暴れると、根っこもどきがますます強く締め付けてきやがった。

無数の細い管が伸びて俺の体にはりつき、次々にブスリと突き刺さる。俺を針山にする気かよ！

その瞬間、俺の目の前にぬつと何かが現れた。

と思つたら黒鉄だ。化け物の根っこに食らいつき、牙を突き立てる。途端に化け物は、釣り上げられた魚よろしくビチビチ跳ねて、俺を離れた。しめた！

隙を逃さず素早く立ち上がり、月華を抜く。巨大な根っこは犬を振り落とそうと暴れまくっていたが、黒鉄の奴はがつちり食らいついたままだ。いいぞ、やるじゃねえか。

「今度はこっちの番だ、よくもやりやあがつたな！」

俺は月華を振りかぶり、のたうつ木の根に斬りつけた。感触は確かに生木だったが、傷口からは赤黒い血が噴き出し、根っこは大慌てでズルズル下がって行く。黒鉄がようやく奴を離し、俺のところに駆けてきた。

「助かったぜ、ありがとよ」

まずはわんころに礼を言ってから、俺はようやく何がどうなっているのかを見た。

三 初仕事(2)

じじいがいた場所には……わけわかんねえ化け物がいやがった。

根っこだけの木、とでも言えがいいのか？ 普通なら幹になつてるはずのところには、じじいの頭がくつついていた。しかも馬鹿でけえ。目ん玉ひとつで牛の頭ぐらいあるだろう。そのまわりから、大人が二人がかりでも抱えられそうにない太い根が十本ばかり張り出して、のたりのたり気味の悪い動きをしてやがる。びっしり生えたヒゲ根がザワザワうごめくさまときたら、まるでムカデの足みてえだ。その、数百本はありそうな根の間から、時々ちらつと嫌なもんが顔を出す。しなびた鳥の死骸だとか、しゃれこうべだとか。

てことは何か、つまり俺は奴の肥やしにされかかったってわけか？ うえつ。

俺が愕然と立ち尽くしていると、小僧と雪白が駆けつけてきた。

「おう、無事だったか」

俺が言うつと、小僧はうなずいて、嫌そうな顔でじじいの成れの果てと向き合った。

「古い木の妖だね」

「ああ、そろそろタコに化けて海に行きたいらしいぜ」

ようやく奴の見た目が何に似ているか気付き、俺はそんな冗談を飛ばした。が、山奥育ちの小僧には通じなかった。

「タコって？」

「……ああいう、ぐねぐねうにうにした生き物だと思つとけ。それより、どうやって始末する？ 俺一人じゃ、あの『足』全部はさばききれねえぞ。元が木だから、放つといって逃げちまえば、そう遠くまで追っかけては来ねえだろうがなあ」

「そういうわけにはいかないよ」

即座に小僧が言い返す。まあな、と俺もうなずいた。そして二人同時に口を開く。

「金が入らねえからな」

「人を襲う妖なんだから」

見事に全然違うことを言っちゃまって、俺と小僧はしらけた顔になった。そんなこったろうとは思ってたがね。やれやれ。俺はちよつと肩を竦めてから、気を取り直して続けた。

「ま、何にしる始末はつけねえとな。俺もやられっ放しは癪だ。さてどうするかね」

「木だから火には弱いと思うんだけど、半端な炎じゃ効きそうにないしなあ。おじさん、真名まなの法術は使えない？」

「あ？ 俺は神官じゃねえぞ。法術なんざ使えるかよ」

「そうじゃなくて……いいや、説明は後で。雪白、黒鉄！」

小僧が呼ぶと、二匹の犬はさつと小僧の前に座った。小僧が左右の手をそれぞれの頭に置き、何やらぶつぶつ唱える。諸々の神たち聞し召したまえ、とかなんとか言ってるようだが、そんな小聲で神様に聞こえるもんかねえ。

俺はなんとなく胡散臭い気分で見えていたが、その目の前で、二匹の犬がぼんやり輝きだしたもんで、さすがにあぐり口を開けちまった。しかもそれだけじゃねえ、わんこころどもの姿がこつ、伸びたり膨れたりしたように見えたと思ったら！

聞いて驚け、瞬きひとつの間に、そこには白と黒の戦装束に身を包んだ若武者ふたりが立っていたのだ。いやまったく、顎が外れるかと思っただね。ぽかんとしている俺に向かって、白い方は犬の時と同じく冷たい目をくれ、黒い方はにつこり笑いかけやがった。俺は何度も瞬きして目をこすったが、どうやらまぼろしじゃあないらしい。

「この世は一体どうしちゃったんだ？ じじいは弾けるわ、犬は化けるわ。俺は夢でも見てるのか」

「これは仮の姿だよ。おじさん、準備はいいかい？ できるだけ中心に近付いてから、本体に手のひらをしっかりと押し付けて。それから、俺の言うことを繰り返すんだ」

てきばきと小僧が指図する。こんな餓鬼に命令されるのは嬉しかねえが、化け犬の飼い主じゃ逆らえねえよなあ。どっちにしろ俺はこんな大物相手に戦ったことはねえ。こいつの言う通りにするしかないさそうだ。ちえっ。

あれこれ考えて俺がむつつり黙っていると、雪白の方がじろりと睨んできやがった。ああ可愛くねえ！

「分かったよ」渋々答えて、俺は月華を構えた。「さっさとやっちまおう。俺の血がすっかり流れ出ちまわねえうちに」

そう、さっきやられた、細い針で突かれたような傷から、いつまでもしつこくじわじわと血がにじみ出てやがるのだ。このままじゃあ目が回っちまう。小僧もやっとそれに気が付いたらしく、さっと青ざめた。

「おいおい、そんな悲惨な顔するな。まだ倒れやしねえよ。んじゃ、行くか」

にやっとして見せた俺に、小僧は黙ってうなづく。その目が前を向き、妖を見据えた。

枯れ木じじいの方も、俺たちがまた近付くつもりだと察したらしい。根っこが激しく動きだし、俺たちの方へ伸びてきた。その細い先端が足に届きかけた寸前、

「行くよ！」

小僧が地を蹴った。即座に白と黒の影が従う。俺も並んで走りだしていた。

二人の若武者が太刀をふるい、襲いかかる木の根をなぎ払う。もちろん俺の月華も負けちゃいねえ。しかし太い根はちょっとやそつとじゃ切れねえし、細い根はいくら払っても次々新しいのが生えてくる。

妖の血が辺り一面に飛び散って、何とも言えない臭気を放ちだした。その中を、俺と小僧は肩を並べてとにかく突き進む。

じじいの吐き出すかび臭い息が、まともに顔に吹き付けた。うえっぶ！ それを避けて横に回ると、小僧がいきなり俺の左手をつか

み、化け物に押し付けた。樹皮を張った生肉のような感触に、俺と
したことが思わず怯みそうになる。

「おい！ くそ、無茶すんじゃないねえ！」

慌てて俺は右手を振り上げ、危ういところで数本の根をなぎ払っ
たが、小僧は見ちゃいなかった。

「背中は二人に任せて、復唱して。いい？」

ああ、そういやそうだった。視界の端でじじいの目玉がぎよろり
と動くのが気になったが、すぐに黒鉄が俺の背を守って立ち、つい
でにその鬱陶しい光景も隠してくれた。

「我が名は雷火」

小僧が唱える言葉をそのまま繰り返す。

「火は赤きほむらなり」

気のせいかな、てのひらが熱くなってきたような……

「この名において命ずる」

手だけじゃねえ、胸の奥、肺腑の中に火がついたような、

「火炎招来！」

——刹那、それが爆発した。

いや、俺の中の火だけじゃねえ。現実には、目の前が真っ赤に燃え
上がったのだ。

耳をつんざく悲鳴と熱風にふっ飛ばされ、俺は後ろへごろごろ転
がっていった。あち、あちち、あちちち！

地面に転がったままじたばたしていると、小僧が駆けつけて、俺
の体に手をかざし、何かを払いのけるような仕草をした。途端にす
うっと熱が引いていき、俺はほーっと大きな息をつく。ああくそ、
死ぬかと思っただぜ……。

大の字になって伸びちまった俺の上から、小僧がひょっこり顔を
のぞかせやがった。

「大丈夫？」

「んなわけねえだろ！ 馬鹿野郎、俺を焼き殺す気か！？」

俺は跳び起きて、噛みつくように怒鳴った。が、わめいた口を閉

じるか閉じないか、犬に戻った黒鉄の奴が飛んできて、べろべろ顔を舐めまくるもんだからたまらねえ。ああもう、格好悪くて怒るに怒れねえだろが、ちくしょうめ。

「舐めるな！ 分かった、分かったよ、大丈夫だからやめろって！」
やつとのことで黒鉄をひつpegすと、俺は袖で顔を拭いた。やれやれまったく……。

小僧がにやにやしてやがるのを睨みつけてから、俺は自分の表情をごまかそうとして、盛大な火柱を仰ぎ見た。生木だつてのによくまあ燃えるこつた。じじいはもはや悲鳴も上げず、根っここの端まですっかり炎に包まれている。水車小屋がべしやんと音を立てて、炎の海に沈んだ。

思わずじつと自分の手を見つめてみると、横から小僧が言った。
いや、小僧つてのはやめた方がいいな。化け犬の飼い主で、しかもこんな派手な火柱を立てちまう餓鬼だ。おっかねえ真理様のご高説拝聴、と言わなきゃならんか。

「ものの名前には力があるんだ。もちろん、人の名前もね。だからやり方さえ知っていれば、自分の名前からその力を引き出すことができるんだ。神官でなくてもいいんだよ」

「はー、なるほどねえ……まあしかし、てめえがこんがり焼けちまうんじゃ、使いてえとは思わねえな」

「練習すれば、もつとうまく使いこなせるようになるよ」

「まあ、気が向いたらな」

それだけ言つと、俺は考えるのも疲れて、またひっくり返つてしまった。今日は働き過ぎだ。慣れねえことするもんじゃねえや……。

四 村人と影（１）

四

火がおさまると、俺は川の上流で体を洗って、真理の持っていた血止め薬を塗ってもらった。妖はすっかり消し炭になっちまって、もうすっかりただの古い木にしか見えねえ。

最前まで燃えていた炎がちぎれて飛んでったみたいに、空はまぶしい茜色に輝いている。明日はいい天気になりそうだなあ。もつとも、俺たちが無事に明日を迎えられなきゃ、天気がどうでも関係なくなっちまうがね。

「さーで、と。ここからが面倒だぞ」

道端に座り込んだまま、俺は天を仰いだ。真理がきょとんとしてこつちを見る。お気楽な奴だぜ。

「いいか、あのじじいは何て言ってた？ 村の衆は親切だ、ってな。ひとつ所からたいして動き回れねえ妖があそこまででかくなっただってことは、誰かが餌の世話をやってたって事だ。だが村人を食ってたんなら、俺たちが出向くまでもなく、とつくに焼き打ちされてらあな」

「ちよつと待ってよ、それじゃまさか、村の人たちが俺たちを騙したって言うのかい？」

「ほかにどう説明がつく？ 流れ者なら、いなくなっても誰も気にしねえだろ」

「でも、妖が負けたらどうなるのさ？ 今まで誰も倒せなかったみたいだけど、それにしたって、逃げた人もいるはずだよ。そしたら、神殿に知らせが行くはずで」

「そいつが神殿に行き着いたら、な」

俺は真理の反論を遮り、できるだけ淡々とした口調で言った。

「言いたかねえが、連中は獲物を選んでる。俺みたいにつだつの上

がらねえ流れ者は、せいぜい小物しか相手にした事がねえからな。まず確実に食われちまうだろうさ」

「でも運よく逃げられるかも……」

「そう、俺みたいにな。で、そういう流れ者が次にどうするか。俺たちや、この後どうする？ 金が要るから仕事を請けた、そうだろう？」

そこまで言うと、やっと真理も察したようだった。愕然として口をぽかんと開け、絶句する。良い子にやちと刺激が強すぎたかね……。俺は頭を掻いた。

「分かったか？ だから、ここからが厄介だつて言つたのさ。依頼通り、怪しいじじいは追い出してやつたんだ。金を貰わずに行く法はねえ。だが連中がおとなしく代金を払ってくれるかどうかが問題だな」

「神殿に知らせに行けば？」

「信じてくれるとは思えねえな。当の妖はこれこの通りだし、この村の連中は全員で口裏を合わせてるだろうよ。おまえが神殿の者だつたらどっちを信じる？ 胡散臭くて素性の知れねえ流れ者が、妖を退治してやつたんだから金をよこせつて言つのと、その流れ者に因縁つけられた上に水車小屋を焼かれたつてえ可哀想な村人と」

「……………」

さすがにもう、真理もそれ以上は言い返さなかった。俺たちは二人して、でっけえため息をついた。

「どうして村の人は、妖なんか養つてたんだろう」

「さあな。そんなこたあどうでもいいさ。どんな理由があるにせよ、あの枯れ木じじいは焼けちまつたんだ。後のことは村の連中に考えさせるさ。俺たちはとにかく、金が貰えりゃいいんだ……よつ、と」言葉尻で勢いをつけて立ち上がる。いつまでも座り込んでても仕方がねえ。

「さて、行くか。黒鉄、雪白、おっかねえ村人からご主人様を守つてやるんだぞ」

俺が言うと、二匹のわんころはそれなりの反応を見せた。つまり、雪白は「おまえに言われる筋合いはない」とばかりの面をし、黒鉄はピンと耳を立ててワンと一声。頼もしいこった。

そんなわけで、俺たちは煤けてぼろっちくなつたまま、来た道を引き返した。

すれ違いざまに何人かが、ぎょつとしたり、慌ててどこかへ走つてつたりした。周旋屋へ知らせに行くんだろう。けつ。

道々、真理の奴はずっと黙りこくっていた。何を考えているのやら、難しい顔をして。ま、なんとなく想像はつくがね。だから俺は、周旋屋の前で真理のちっせえ鼻先に指を突き付けてやった。

「おい。話せば分かる、なんて甘いこと考えるなよ」

どうやら凶星だったらしい。真理は途端に嫌な顔をしやがった。拗ねたつて可愛かねえぞ、馬鹿。

「世の中、おまえが考えるほど簡単じゃねえんだ。どんなご立派なことを言つたつてな、生きのびなきや何の意味もねえ。大体、これ以上深入りしたつて、後々この連中の面倒見られるわけでもねえだろ。な？ おまえは黙つて、俺に任せときな」

「……わかつたよ」

「ようし、いい子だ。じゃ、おまえとわんころどもは、ここに立つて退路を確保しとけ。村の衆を近寄らせるんじゃねえぞ」

言い置いて、俺は暖簾をくぐつた。

中にはまあ、怖そうな顔の若い衆がひい、ふう、みい……六人ばかり。狭苦しい店で待ち伏せとは、ご苦労なこつた。だが、俺が月華の鯉口を切ると、どいつも怯んだ様子を見せた。

「ひと仕事片付けてきた流れ者を労ってくれる、つてえ雰囲気じゃねえな。言つとくが、いまさら俺をぶちのめしても意味がねえぜ。あの妖は盛大に燃えちまつたからな」

「何の事ですかね」

周旋屋の親父が陰気な声で言った。もちろん、とぼけているわけじゃねえ。目と目が合うと、相手は一切了承済み、つてのが分かつ

た。俺は肩を竦め、番台に近付いた。

「あんたが追い出してくれつつた巫師のじじいはな、妖が化けてたのさ。だから退治した。結果としちゃ、依頼の通りだ。あとは金さえ貰えりゃ、いつもの仕事と同じ、吹聴するほどのこともねえ」

要するに、出すもん出しやあ黙つといてやる、って事だ。お互い、そこまで口にしたりはしねえが、親父もその事は分かってる。黙って番台の下から、銭の入った巾着を取り出した。じやらりと音ばかりは大層だが、銅銭ばかりで銀は一枚もねえ。

「ちと足りねえんじゃねえかい。前払いの分を合わせても、二人分の報酬には少ないぜ」

「お客さん、欲深は運を逃すことになりますよ」

「そんなら神殿に行つて、悪運を祓ってもらうさ」

ちくちくと嫌な応酬が続く。これまで何人の流れ者が同じようにこの親父に文句をつけて、ここに控えている若い衆にのされちまつたのやら。連中が手を出さねえのは、ひとえに俺が見た目よりも腕の立つことを恐れているからだ。こっちがちよつとでも脅えたら、瞬く間に食いつかれるだろう。

しばらく睨み合つた末に、親父は渋々と銀貨を出してきた。正直なところまだ足りねえと思つたが、親父の言う通り、欲は身を滅ぼす。ここらで手を打つか……。

俺は用心しながら素早く金を取り、袂に落とした。

「じゃ、あばよ。二度と来ねえから安心しな」

捨て台詞を残してさっさとおさらばしようとしたのだが、ちつとばかり動作が早すぎたらしい。背を向けた途端、俺の焦りを見抜いた親父が声を上げた。

「やれッ！」

同時に俺は、前へ飛ぶように転がった。空振りした棒や竹竿が絡まり、派手に騒ぎ立てる。俺は振り返らず、そのまま表へ飛び出した。

だが、それより先へは行けなかった。手に手に鍬だの鎌だの持つ

た連中が、ぐるりと店を取り囲んでいたのだ。二匹のわんころが牙をむいて唸っているが、じわじわと村人の半円が縮まってくる。中には申し訳なさそうな顔をした女までいやがった。くそ、悪いと思うんなら一緒になってんじゃねえよ！

「おじさん……」

真理が青ざめた顔で振り向く。さもあらなん、妖と違ってこいつらは人間だ。簡単に吹っ飛ばしたり斬り殺したりできるもんでもない。一人二人ならちよいと怪我をさせてやりや逃げるだろうが、これだけ大勢となると、かえって逆上して手がつけられなくなっちゃう。なぶり殺しにされるなんざ、考えたくもねえや。

俺は真理と背中合わせに立ち、店から飛び出してきた血の気の多い奴を、顔面への一撃で殴り倒してやった。

四 村人と影（2）

「そいつらを村の外に出すな！」

店の奥から周旋屋の怒声が飛んだ。

「ちつ、疑り深え親父だぜ。二度と来ねえつつてんだろが！ それとも何か、これっぱかしの手切れ金も惜しいのかよ！」

「金は問題じゃあないんですよ」

親父が戸口に姿を現す。最初のいけ好かねえ丸ぼちゃ親父の印象は、いまや他人の血で肥え太った極悪人に変わっていた。まったくまさかここまでとはね。俺は月華の柄にそつと手をかけた。

「だったら何だつてんだ。言つたら、俺は金さえ貰えば、おまえらがやっていた事についてちや気にしねえ。それに、あの妖が焼けちまつた今じゃ、何を吹聴してもただの法螺にしかならねえんだ。何も問題はねえだろうが」

返事がない。俺は背筋がぞくつとした。おいおい、まさか……

「あれで終わりじゃねえつてのか？」

声がかすれた。背中越しに、真理が身をこわばらせるのが分かる。ちくしょう、こりやまずいぞ。

「あれのことを知られたら、この村は終わりだ」

人垣の中から、誰かが言った。

「可哀想だけどね、よそ者は信用できないんだよ」

「ごめんね、なんぞと言いながら、女が鎌を握り直す。勘弁してくれ。」

と、いきなり真理が声を上げた。

「いったい……どうして、どうしてそこまでして妖をかばうんですか。あの妖がそんなに大切なんですか！」

泣き出しそうな声に、村人たちが一瞬、たじろいだ。さすがに後ろめたいらしい。だがそれでも、囲みは緩まなかった。慣れてやがるんだ、こいつらは。助けてくれって声も、しゃべらないから見逃

してくれって頼みも、こいつらは聞き飽きて何も感じなくなつてやがるに違いねえ。なんて連中だ、くそっ！

「坊や、あの榛^{はん}の木はあたしらにとって、なくちゃならないものなんだよ。ここで暮らせばきっと分かるよ」

別の女が言った。途端に、馬鹿を言うな、とまわりから咎められる。なるほど、大人は殺しても胸が痛まねえが、子供だから助けてやろうってわけかい。一生この村に留まらせれば、秘密も漏れねえってか？ 図々しい。

緊張のせい、頭の回転がいつもの倍ぐらいに速くなった気がした。

あの妖はこいつら全員にとって「なくちゃならないもの」だが、いなくなつたら途端に何かが変わるってもんでもないらしい。燃えた時に何も起こらなかつたしな。

で、奴はもともと榛の木で、つまり湿地に生えるが田圃の畦にもよく植えられてたりする木だ。奴がいたのも小川の上流。そっぴりや川つぺりに若木が植えられてたよなあ。しかもこの豊平はその名の通り豊かな米蔵。とくれば……。

「はあ、なるほどね。おまえら、あの妖に何か細工させてたんだな？ 稲がよく実るように、水や土にまぜものでもさせてたんだろ」

「――！」

背後で真理が息を飲む。村人たちの顔色がさつと変わった。大当たり。

道理で白黒二匹がやたらと水辺を嗅ぎ回っていたわけだ。世話の行き届いた田圃だと思つたが、雑草も虫も、あまりにも余計なものになさすぎた。飯が変な味だったのも、穢れた水で育ったせいだな。納得している俺に、周旋屋の親父が苦々しく唸った。

「ご明察。流れ者にしては頭が切れなさるね」

「そりやどうも。褒めたついでに見逃しちゃくれねえか。それとも、こつちの切れ味も試してみたいかい」

月華を鞘の上から軽く叩く。真相を見抜かれたところへ脅しをかけられ、さすがに親父も怯んだ。が、やっぱりそれでも、覚悟は変わらねえらしい。後ずさったのもわずかに半歩、すぐに威儀を正して、腰の引けた村人たちをぐつとねめまわしやがった。

こうなったら仕方がねえ。俺はため息をつく、諦めて月華の柄を握った。気は進まねえが、何人かぶった斬つてでも逃げなきゃな。何せ今は小僧と犬を養ってんだからよ。

「おい真理……」

背中越しにひそつとささやく。囲みの薄そうな所を指して、同時に突っ込むぞ、と合図した。が、真理の奴、聞いちゃいなかった。真っ黒な目を見開いて、自分たちの影が長く伸びている通りの向こうを凝視したまま、かたまっちまってやがる。

すっかりしろ、と言いかけてその瞬間、俺も立ち竦んだ。

地面につけた両足から、ぞわぞわつ、とものすごい悪寒が体をはいあがり、頭のとっぺんまで突き抜けたのだ。髪が全部逆立つ気がした。何だよこれは！

視線を落とすと、二匹の犬が耳をぴったり寝かせ、鼻面に皺を寄せて牙をむき出していた。が、尻尾は足の上に巻き込まれ、今にもキャンキャン鳴いて逃げ出しそうだ。

村の連中は俺たちほどには敏感じゃねえらしいが、それでも何か寒気はしたらしい。顔を見合わせ、ざわつきながらてんでに背後を振り返る。

「やばい」

口が勝手につぶやいた。まずい、いけねえ、何か良くねえもんが来やがる。俺の頭にはもう、村の連中のことなんざ微塵も残っちゃいなかった。

お天道様が沈んでいくのを、縄をかけてでも引き戻したくなった。東の方から薄闇が迫ってくる。その中に出来たひときわ暗い影が、通りの向こうからやって来る。

あいつだ。

村に入る前に、道で俺たちの後をつけてきた、あの影だ。ちくしよう！

逃げなきゃならねえのは分かってるのに、足は動かねえし、声も出せねえ。

視界の隅で、村人たちが同じように石になっちまっている。やがて、一番影に近い所にいた奴が、ふらつとよろけてそのままぱつたり仰向けにひっくり返っちまった。

そしてまたひとり、膝をついて前のめりに倒れ臥す。続いて二、三人が同時に。

人が倒れるにつれて、影が濃く暗くなっていくように見える。夕焼け空までがその闇に毒されて、不気味な色に変わっていた。

「ひ……」

誰かがかすれ声をもらした。それが引き金になって、すさまじい悲鳴がいつせいに上がる。金切り声、泣き声、うろたえ怯えて助けを求める声。蜘蛛の子を散らすように、もう俺たちの事なんぞ無視して、てんでに影から遠ざかろうと逃げて行く。

俺も弾かれたように走り出していた。格好悪いが、この際そんなこた言つてられねえ。

だが十歩も行かずに慌てて止まり、振り返った。小僧も犬もついて来ねえ！

「何やってんだ馬鹿野郎！ 早く来い、逃げるんだ！」

ちくしよう、枯れ木じじいには怯まなかつたくせに、何で立ち往生しやがるんだよ。

「こつちを見ろつて！ 置いてくぞ、この愚図！」

地団駄踏んで喚く俺に一瞥もくれず、真理はやおら手をもたげ、パンと大きくひとつ柏手かしわでを打った。澄んでよく通るその音が、影のもたらす嫌な空気を、わずかに払いのけてくれた気がした。続けてもう一度。音に押されたように、影が歩みを止める。

「かけまくも畏き被処はいつていの大神等おおかみたち、よろずの枉事罪穢まがことれを……」

真理が祝詞のりことを唱えだす。悠長なこと言つてて、本当に効き目があ

るんだろうな、おい。んな事してねえで逃げた方が賢いんじゃないかね？

「はらいたまい清めたまえと……」

声が震えた。影がまた動きだしやがったのだ。そら見たことか！
もうあとほんの数歩しか離れてねえ。

「真理！ そいつは放つといて逃げろ、被おうなんざ考えるな！」
こっちが喉を嚔らして叫んでるつてのに、真理の奴は振り向きもしねえ。これだから聞き分けの悪い餓鬼は！ 白黒の二匹はもうびったり真理の足にへばりついていて、役に立ちそうにねえ。

「えいくそ、世話の焼ける！」

なんで俺がここまでしなきゃならねえんだ、我ながら自分に腹が立つ！

俺は思い切って駆け戻り、真理の腕をひつつかんだ。同時に影がぬうつと津波のように大きく立ち上がる。

「逃げろわんこども！」

無我夢中で俺は犬どもを蹴った。ギャンとも言わず、二匹は転がるように駆けて行く。影が落ちて俺たちを飲み込む寸前、何とか真理を思い切り突き飛ばしてやった。

頭の上から影が覆いかぶさる。闇に包まれたと同時に、なぜか昔の記憶がでたらめに脳裏をよぎった。弟と竹馬遊びをしたこと。おふくろの打ち掛け。親父の死にざま……

ああやれやれ、親子揃って化け物にやられて頓死かよ。みつともねえなあ。

——と、観念しかけたその時、

「やめろ！」

真理の絶叫が響くや、玻璃の碎けるような音がして、俺のまわりに数多の星が弾けた。
あまた

「うわっ！？ 何だ、こりやいったい」

驚いて目をぱちくりさせたその瞬間に、星の光はもう消えてなくなっていた。ついでに、どういうわけだか、影までも。

「……何だあ？」

往来に立ち尽くしたまま、俺はぽかーんと口を開けてしまった。

四 村人と影（3）

空はすっかり元通り、きれいな夕焼けの朱色と藤色がまじり合い、明るい星がひとつふたつ、瞬き始めていた。倒れたままの村人がいなければ、まるで何も起こらなかったかのように思えた。何なんだ、何がどうなってるんだ？

「おじさん、大丈夫？」

真理が駆けつけ、二匹の犬もいささか面目なさそうに寄って来る。「どうやら無事だよ。おまえ、あの影に何かしたのか？ いきなり消えちゃったぜ」

「俺は何もしてないよ。被詞^{はらいしことば}はちつとも効かなかったし、まさかやめろって言ったから消えた、なんてわけもないだろうし。おじさん、お守りか何か持ってるんじゃないの？」

「あいにく、そんなものが買えるほど懐に余裕はねえよ。心当たりとしたら月華ぐらいだが、今までこんな事はなかったしなあ」

俺はしげしげと月華を眺めた。たったひとつ譲り受けた、親父の形見。一応は由緒ある銘刀らしいが、そういう逸話が残されているでもねえし、神殿の連中も、何も言わなかったしなあ。俺は結局、よく分からねえ、と肩を竦めた。

「とにかく、今の内にとっと逃げようぜ。村の連中が戻ってきたら、ますますややこしいことになっちゃう」

「でも、倒れてる人たちは？」

「さあね。死んだか、気を失ってるのか知らねえが、自業自得さ。そうか、分かったぞ。あの影はきっと天罰だ。性根の腐ったこの村の連中に、天罰が下ったのさ。俺は善人だから助かったんだ、きつとそうだ」

うんうん。日頃の行いがものを言うってわけだ。

俺が納得してうなずいていると、真理が嫌な突っ込みを入れやがった。

「善い人だつて言うなら、このまま見捨てて行くのはひどいんじゃない？」

うぬ。可愛くねえな、この餓鬼や。

「あのなあ……俺たちを殺そうとした奴らだぞ。生きようが死のうが、知ったことかよ」

「駄目だよ」

真理は妙にきっぱり言つて、倒れた村人のかたわらに膝をついた。ははあ……なるほど。

「おまえのせいだから、か？」

ささやくように問いかける。村の連中がどこかで聞いてたら面倒だ。案の定、真理は振り向きもせず、小さな声で「多分」と答えた。「多分？」

「後で話すよ」

真理が言つと同時に、その足元に転がっていた村人が、うーんと唸つて目を開けた。若い男だ。怒りか恐怖で叫び出すかと思いきや、ぼうつとした様子で宙を見たまま口を半開きにしてやがる。俺はちよつとそいつを観察してから、別の奴を起こしに行った。もちろん、親切にしてやる義理なんざねえから、蹴飛ばしてやったわけだがね。倒れた連中は全員ちゃんと生きてはいたが、どいつもこいつも魂が抜けたみてえにばかんとして、何の反応も見せなかった。薄気味悪い。

「こいつら、どうなるんだ？」

「分からない。今までに影が人を襲うことなんて、なかったから」

答えた真理の声は沈痛だった。よく罪悪感なんざ抱けるもんだ。

あの影が何にしろ、俺たちはお陰で助かったようなもんだろくに。慈悲深いんだか、馬鹿なんだか。

「とにかく生きてるんらしいさ。あとはこいつらの身内がどうかするだろつよ。心配だつてんなら、どこかで神殿に寄つて事の次第を報告すりゃいいさ」

行くぞ、と真理の腕を取つて立たせる。地べたに座り込んだまま

の村人が、うつろな目でこつちを見上げて、しまりのない薄笑いを浮かべた。口元に力が入らなくて、勝手に顎が下がっただけかも知れねえが。

さすがに俺も気持ち悪くて見ていられず、無理やり真理を引きずるようにして、村から逃げ出した。袂でチャラチャラ音を立てる銭が、どうにも重かった。

「で、結局また野宿なわけか……。はあ」

街道脇のでつけえ樫の根元で、俺は焚き火を起こした。布団が恋しいぜ……。

「ごめん、おじさん」

「謝るこたあねえよ。運が悪かったのさ。それに、おまえがいなきや俺はあの妖の肥やしにされておしまいだった。だから、無理にお前のせいにようとは思わねえよ。理由を話したくなきゃ話さなくていい。俺も聞きたいわけじゃねえんだから」

乾いた枝を火に食わせ、ごろんと横になる。腹はへってるし疲れてるし、もうふて寝するしかしようがねえ。

「……あの影はね」

ぼつ、と真理が話した。俺が顔だけ振り向くと、小僧は雪白の首を掻きながら、じっと地面を見つめていた。

「深谷を出た時からついて来てるんだ。あれは……きつと、『災い』なんだと思う」

パチパチツ、と炎がはぜた。揺らぐ明かりに照らされた横顔が、急にただの無力な子供に見えて、俺はいたたまれず目をそらした。なるほどな。こんなちっせえ餓鬼が一人で修行の旅なんぞ、おかしいと思っただ。

「おまえ、押し付けられたんだな」

何があったのか知らねえが、深谷を襲った災いを、里の連中は子供一人にくつつけて追い払ったんだろ。ひでえ連中だ。

「違うよ」

答えた真理の声は、泣き出しそうだった。本気で違うと言っているのか、違うと思いたくて否定しているだけなのか、よく分からなかった。俺がじつと真理を見ていると、やがてこっちを見て、悲しそうに笑った。

「知ってたんだ」

「……そうか」

「うん」

それきり、言葉が続かない。俺は何とも言えず、ちろちろと踊る炎を見つめた。

谷の連中が何をどう言ったのか、それとも何も言わなかったのか、それは分からねえ。どっちにしろ、可愛げなくも察しの良いこいつが、進んであの影を引き受けたってことは想像がつく。

しばらく待って、真理には事情を話す気がないとはっきりすると、俺は勢いをつけて起き上がった。

「ま、済んじまった事はしょうがねえ。今さら、ああすりや良かったのどのと言ったところで、何かが変わるわけでもねえしな。であいつはまだついて来ると思うか？ 今ところは消えちまってるようだが」

「分からない。でも、あれは……弾かれたって感じで、消されたようには思えなかった。ちょっと遠くへ弾き飛ばされてるけど、また戻ってくるって気がする」

「んじゃ、被う方法は？」

俺が訊くと、真理はまた、分からない、と首を振った。

「祝詞や弦打（こつうち）がまったく効かないわけじゃないみたいだけど、被い清めるには……何かもっと別の方法が必要なんだと思う。明師様が俺に『しるし』を探しに行けって言ったのは、そういう意味なのかもしれない」

「しかしその『しるし』ってのは何なのか、手掛かりひとつねえんだろ？ そりゃ、随分と先が長そうだな」

俺はわざと素っ気なく言って、相手の反応を見た。案の定、真理

はちよいとばかり不安げな顔をしてこちらを振り返った。俺はとばかり手を振ってやる。

「まあ頑張れよ」

真理は何か言おうとして口を開きかけたが、遠慮がはたらいたのか、そのままうつむいて黙り込んだ。まったく、こいつときたら。子供らしくねえ事してつから、災いなんぞ押し付けられるんだ、馬鹿。

キュウン、と声がして目をやると、黒鉄が主人よりもよっぽど素直な目で、俺を見つめていた。俺は思わず苦笑し、真つ黒な頭を掻いて毛を逆立ててやった。それから俺は腕組みし、おもむろに切り出した。

「さて、お別れする前にひとつふたつ、片付けとかにやらねえ問題があるな」

「問題？」

真理がきょんととして聞き返す。俺は袂から銭の巾着を取り出した。

「ひとつはこいつだ。仕事を請けたのは俺だし、とどめを刺したのも俺。周旋屋に交渉してこれだけの金をもぎ取ったのも、俺」

俺、俺、と数え上げていくと、さすがに真理も面白くなさそうな顔をした。おお、正直でよろしい。その横で雪白が剣呑な目付きをしやがったので、俺は慌てて「とは言え」と言葉を続けた。

「おまえと白黒二匹がいなきや、そもそも俺は生きちゃいねえだろう。だからこいつは公平に折半といこう。それはいい。だがおまえがこの先も旅を続けるんなら、これっぽっちじゃ足りねえだろうよ。行く先々の神殿を頼るにしても、今回みたいに、次の神殿まで何日もかかる、ってなこともあるだろうし、かと言っておまえみたいな子供じゃ、周旋屋に行くわけにもいかねえしな。心優しい俺様としちゃ、胸が痛むわけだ」

大袈裟に胸を押さえた俺に、真理が胡散臭げなまなざしをくれた。「何が言いたいのか、はつきりさせてくれない？」

「まあ待てよ。問題のふたつめはだな、俺の稼ぎと将来についてだ」
「……は？」

「俺も今まで結構長いこと妖退治をしてきたが、腕前と稼ぎについて
ちや——まあ、おまえも見ての通りさ。今まではそれでも何とかな
ったがよ、いつまでもこれじゃあ困る。いずれどっかに落ち着くた
めには、ちつとは金を貯めとかねえとな。だから、もちよつと実入
りの良い仕事をするためにも、腕を上げにやなんねえだろ？ たと
えば、ナント力っておまえが言ってた法術を身につけるとかなだ」
そこまで話すと、やつと真理も結論が見えて来たらしく、だんだ
んと顔を明るくした。俺もつられてにやりとする。

「いっぺんに解決する方法がありますかね、真理様？」

「あるよ、もちろん！」真理が笑い出した。「俺がおじさんに法術
を教えるよ。仕事も手伝う。それで稼ぎは折半。どう？」

「折半、ねえ。まあ、おまえにやお供もいるこつたし、それが妥当
かね。だがおまえと一緒に行くんなら、もひとつ条件がある」

言葉尻で真顔になり、俺はズいと身を乗り出して真理を睨みつけ
た。

「何だい？」

ちよいと怯んだ様子の真理に、俺は思いつきり苦々しく言ってや
った。

「俺を『おじさん』って呼ぶな！」

——もちろん、返事はけたたましい笑い声だった。

（雷火之章・終）

一 占い師

綾女之章

—

体は湯上がりでほつかほか。獲れたての岩魚に塩をふってこんがり焼いて、ぬるめに爛したお酒と一緒にいただく。これがたまなのよねえ。色づきはじめて紅葉を見ながら、表で食べるごはんのおいしいこと。

山奥の温泉なんて湯治客ばかりじゃないの、なんて言って辛気臭い顔をする人もいるけど、少なくともここ、瀬場の里は違う。

峠越えの道が通っているから、往來の商人やら旅人やら、いろんな人がここで泊まって湯につかり、疲れを癒して行く。湯治客もいないわけじゃないけど、今こうして床几から見渡す限りでは、圧倒的にそうした『通り過ぎるだけの客』が多い。

そんな中で、あたしは珍しい長逗留の客。商売が占い師だもんで、毎日大勢が行ったり来たりするこの里はうってつけ、ってわけ。

占い師にもいろんなのがいるけど、あたしは人相や手相を見ることにしている。それだと道具がいらないからね。

え？　つまりインチキかって？　無粋なことお言いでないよ。こう見えてもあたしには、ちゃんと霊力つてものがあるんだ。でもね、霊力があるからって何でも見えるわけじゃない。そこところが分からないお客が多いのさ。

まあ実際は、何を訊きに來たのかを最初に言い当ててやれば、それだけで大半は満足してくれるんだけどね。分かって貰えるのが嬉しいと見えて、悩み事をしゃべるだけしゃべって、すっきりして帰っちゃうのさ。ありがたいことだよ。おかげで今日も、夕餉に徳利を一本つけられるってわけさね。

あたしは上機嫌で盃を取り、眉をひそめた。空になつてゐるじゃないか。またあいつだね、やれやれ。心の中で毒づきながら、徳利から酒を注ぐ。肩の上で小さな影がサツと動き、背後に隠れた。すばしい奴。

気が付くと、だいぶん辺りは暗くなつていた。秋の日は釣瓶落、とはよく言つたもんだ。風もちよいと冷たくなつてきたね。あたしは肩をすぼめ、お膳を持って店の中に入った。それを待つていたように、女中が床几を片付けた。せつかちだねえ、嫌だよまったく。店の中にはまだ大勢の客がいて、わいわい賑やかに夕餉を楽しんでいた。あたしは適当に空いた席に座り、骨だけになった岩魚を未練がましくつつきまわす。

と、不意に男の声が耳に飛び込んできた。

「馬鹿、残すなもつたいねえ。ここが美味いんじゃないか」

べつだん大声つてわけでもなかったのに、なんでそれが気になつたんだか。あたしは不思議な気分でそちらを見やり、目をぱちくりさせた。

「でも、苦いんだよ。雪白にやつたら駄目なの？」

「それがもつたいねえつつてんだ。よこせ、俺が食う」

「ちよつと、おじさん！……あーあ」

皿を挟んでやいのやいのと言いつてゐるのは、若い男と、それよりもつと若い坊やの二人連れだった。何なんだろうねえ。おじと甥にしちゃあ、血のつながりがあるとは見えないよ。坊やの方は十四、五歳。目元涼しく賢そうな顔立ちで、あと五年もすればなかなかの美男子になりそうだ。男の方は……まあ、だから、それには似てないってことで。

でもまあ、仲が良さそうだから人買いでもないだろうし。あの二人が何でも、あたしが知つたことじゃないさね。ただなんとなく、坊やの方が暗い影を背負つてるように見えるのが、気がかりと言えは気がかりだけど。

耳元で小さな声がささやいた。

「あの男、賞金稼ぎだ」

おやおや。あたしは声に出さずに心の中で返事をしてやる。

(狩られるかも、って心配かい?)

「我に賞金はかかっておらぬ。ゆえに奴は我を狩らぬ」

ふうん。妖退治が生き甲斐って男でもないわけか。銭が貰えないような小物、相手にしてたらキリがないものねえ。存外、頭がはたらくのかもね。

そんな事を考えながらしげしげと男を眺めていると、肩からさつと奴が降りる気配がした。あたしはとっさに盃を取り上げ、酒を喉に流し込む。

(ちよいと、もう飲むんじゃないよ。この酒はあたしのなんだからね)

まったく、飲ん兵衛の妖は嫌になるよ。毎度、徳利の半分はとられちまうんだから。

小さな軽い気配が腕でためらった後、しぶしぶ肩に戻って来た。

「酒も過ごせば毒じゃ。我と分け合ってちょうど良い」

思わずあたしは失笑してしまった。身の丈が一割もない相手と、酒を折半では割に合わないじゃないか。

一人で笑ってしまったのをごまかすように、あたしはうつむいて新しい酒を注いだ。けれど、ちよつとばかり間が悪かったようだ。すぐ隣の席から、男がひとり、ふらつと立ち上がってこちらにやって来た。

「おう姐さん。今、俺を見て笑いやがったな」

毛むくじらのごつい手が机をバンと叩き、酒臭い息が降って来る。やれやれ。

「何だいあんた」

あたしは顔を上げ、酔っ払いに向かって首を傾げて見せた。

「あたしはどこも見ちゃいなかったよ。思い出し笑いさね、気にしなさんな」

「ごまかすんじゃない！俺の方をじっと見てやがったくせに！」

「馬鹿お言いでないよ、誰が好きこのんで酔いどれ狸の顔なんざ見つめるもんかね」

呆れてうつかり口を滑らせ、おっと、と唇に手を当てる。客の間に笑いがこぼれ、酔っ払いはますます顔を赤くした。

「このアマ、誰が……！」

男が拳を振り上げる。あたしの耳元で、小さな声がささやいた。「避けて良いぞ」

同時に、振り上げた手を別の誰かがつかんだ。おや、あの賞金稼ぎじゃないか。

「まあまあ。酒が入ると、わけもなく笑い出す奴もいるさ。その辺にしときなよ」

な、と笑顔で言いながら、賞金稼ぎは酔っ払いの手首を締め付けている。カチリと音がしたのは、刀の鯉口らしい。酔っ払いは怯んで後じさり、口の中でろれつの回らない文句をつぶやいた。その隙に、連れの男が酔っ払いの背中を抱きかかえる。

「すみません、こいつちよつと酒癖が悪くて。失礼、どうも」

他の客にもぺこぺこ頭を下げて、男は酔っ払いを引きずるようにして、店を出て行った。何だかねえ、酒癖が悪いのなら飲ませなきゃいいのにさ。ああいう酔っ払いは無粋で嫌いだよ。

あたしは首を振り、くさくさする気分を払った。それから賞金稼ぎを見上げ、につこりと愛想良く礼を言った。

「ありがとうございます、助かったよ」

「なに、大したことじゃねえよ」

言いながら、賞金稼ぎはあたしの向かいにどっかり座った。おやおや、何だい。

「あんたが見てたのは俺だろ？」

にやにやししながら賞金稼ぎが言ったもんで、あたしはふきだしてしまった。

「違うよ、馬鹿だね。あたしが見てたのは、あんたの連れの坊やさ。どつという関係だか知らないけど、放ったらかしてないで戻っておや

りよ」

あたしが坊やの方を見ると、相手もこっちの様子をじっと見守っていたらしく、まともに目が合った。途端に坊やはびっくりしたようにびよこんと背筋をのばし、恥ずかしそうに顔を赤らめる。うぶなこと、可愛いねえ。

あたしがひらひら手を振ってあげると、坊やは困った風情で、それでもぺこりと小さく頭を下げた。

「行儀が良いね、あんたのしつけじゃあなさそうだけど？」

くすくす笑って賞金稼ぎを見る。相手は苦笑いを浮かべ——それから、あたしの肩の辺りをひたと見据えてささやいた。

「さすがにお見通ししてわけかい。面白いのを連れてるだけはあるな」

「あのねえ、いくらサトリでも、人が考えていない事まで読み取れるわけじゃあないよ」

あたしもうんと小声でささやき返す。そう、あたしの肩にまとわりついて、さつきから飲み食いにおしゃべりしてくれる妖は、サトリというのだ。見た目はうんと小さな猿に似ているけれど、人の心を読む妖で、あたしの商売仲間。というより、なくてはならない片腕ってところかね。

賞金稼ぎが意外そうな顔をしたので、あたしは言っちゃった。

「たとえば、あんたの名前とか」

「雷火じゃと」サトリがささやいた。

サトリの声が聞こえるらしく、賞金稼ぎの雷火は眉を寄せた。何が言いたいのかはサトリでなくても分かったから、あたしは笑って説明してやった。

「今のはね、あたしが名前と言った時に、あんたが心の中で自分の名を思い浮かべたから、分かったんだよ。ああそうそう、あたしは綾女^{アヤメ}。占い師だからさ、こいつの事は内証にしとくれよ」

もちろん、客の中にもたまには、サトリの姿を見たり声を聞いたりするのがある。でも、そういう客は先にサトリの方が勘づいて隠

れてしまうから、滅多にばれることはない。

雷火は何とも言えない顔であたしを眺め、ちよつと頭を掻いた。
「ま、あんたが何を商売に使おうと勝手さ。そいつは悪さもしねえようだし。ただ、口止め料代わりに、ちつとあの小僧を見てやつちやくれねえか。あんたの占いが丸っきりのイカサマじゃなけりや、の話だが」

「探し物をしとるらしい。隠し事もな」

サトリがこしょこしょ言った。雷火は苦笑して、「話が早くて助かるね」と厭味っぽく唸る。あたしはわざと皮肉が通じないふりをしてやった。

「そうだよ、あたしは察しのいい女だからね。だけど物分かりは悪いんだ。坊やが何を隠してるにしろ、連れのあんたに言わない事を他人のあたしが勝手に聞き出すのは、筋が通らないってもんじゃないのかい」

坊やの背負ってる暗いものが見えるだけに、ずかずか土足で踏み込んだじゃあいけない、ってのはよく分かるのさ。サトリは何だって読み取ってそのまんま口に出すけれど、あたしは妖じゃない。

「何もあいつの口を割らせようってんじゃねえよ」

雷火が急いで言うと同時に、サトリもつぶやいた。

「『しるし』の手掛かりを占って欲しいんじゃないと。坊主の名前は真理。神官になるつもりらしいぞ。綾女、見るな見るな。我らの敵など増えぬが良い、坊主など命果てるまでさすらうが良いわ」

シシシシ、と耳障りな笑い声が続く。あたしは肩を揉むふりで、サトリを握り潰してやるうとした。もちろんサトリはその手を寸前でかわして、背中側へ逃げてしまったけれど。いまいましたらありやしない。向かいで雷火も、あたしの肩を睨みつけていた。

「ちよいとあんた、そんな怖い顔をするんじゃないよ。こいつは口は悪いけど、実際に何か悪さをするわけじゃないんだから。いちいち怒ってたら、気がおかしくなっちゃうよ」

「慣れてるんだな」

「長い付き合いだからね」

あたしは軽い口調でそう言って、いつの間にか空になった徳利を逆さに振った。

「とにかく、何か込み入った事情もあるようだし、明日になってから出直しといで。今日はもう店じまいだよ」

しまう店なんかないくせに、とても言いたそうな男に手を振り、あたしは席を立った。心配そうにこつちを見ていた坊やの頭をちょいとなでて、勘定をすませて外に出る。

うつ、寒！

夜気が襟元に入り込み、あたしは身震いした。ほとんどの店はもう戸を閉^たてて、通りに落ちる明かりはちらほらとまばらになっている。早いところ宿に戻って、布団に入ってしまったおう。首を竦めて往來を小走りに急ぎながら、ふと、背筋がぞくつとして振り返った。

……なんか、いるみたいだね。

闇夜に消える通りの向こう、町の外に、目には見えないけれど何かが佇んでいるのが感じられるよ。うつそりとした影。

「入って来るんじゃないよ」

あたしは小声で言い、念を込めて宙に印を切った。効いたのかどうか、よくわからない。何せ今は、酔っ払うほどじゃないとは言え、酒が入ってるしねえ。

まあ、朝になったらお天道様が追い払ってくれるだろ。

あたしは自分にそう言い聞かせて、道を急いだ。

二 過去と未来（1）

二

翌日の昼頃になって、あたしの店に坊やと雷火が連れ立ってやって来た。白黒二匹のお供もいる。そこらの犬とはちよつと違つみただね。

お天道様の下で見ると、坊やの着物はすっかり鼠色になつちまつてるものの、元はどうやら神官の白装束らしいと分かつた。長らく丈も直してないと見えて、つんつるてんだ。予想以上に面倒な事情がありそうだねえ。

「これがあんたの店つてわけかい」

雷火がにやにやしながら言つた。失敬な男だね、まったく。まあ、通りの端に腰掛けと卓を出しただけで、屋根も壁もないときちや、店とは言えないだろうけどさ。

「あたしにとつちや、大事な店だよ。ひやかしに来たんなら帰りな」
「おいおい、怒るなよ。悪かつたつて。ほれ真理、座つて見て貰え。そうそう、いくら別嬪さんが相手でも、妙なことは考えねえ方がいいぞ。サトリが憑いてるからな」

雷火にからかわれて、坊やはさつと赤くなつたけれど、即座に手厳しく言い返した。

「おじさんこそ、気を付けなよね」

「おやおや、一本取られたね、雷火」

思わずあたしが笑うと、雷火は苦笑いして「くそ餓鬼が」とかなんとかぼやきながら頭を振つた。あたしは肩の辺りで手を振つて、サトリを背中の方へ追いやつた。

「まあ安心おしよ。昨日ちよいと聞いた限りじゃ、どうやらサトリの出番つてわけでもなさそうだしね」

「相棒なしでも占えるのか？」と、これは雷火。

「重ね重ね失敬だね、あんたって奴は。あたしにはちゃんと霊力があるんだよ。でなきゃどうやってこいつを捕まえたと思うんだい」
あたしは小声ながらも剣呑な口調で言い返してやった。間に挟まれた坊やが居心地悪そうだもんで、ちよつと穏やかな調子に戻して言葉を続ける。

「ただね、この力だけじゃ占い師としてやって行くには不足なのさ。客は『分からない』なんて言葉を聞きたくて来るわけじゃないんだから」

「分からない、って事もあるんですか」

おずおずと坊やが尋ねた。この行儀の良さを、お連れさんもちよつとは見習って欲しいもんだねえ。

「未来も過去も、他人の気持ちも、何もかも見通せるような人間はいやしないよ。さてそれで、何を見て欲しいのか、改めて聞かせてもらおうかい。ここじゃ話しくいんだったら、どこか場所を変えてもいいよ」

坊やはちよつとためらい、振り向きはせずに後ろの雷火の様子を窺ってから、小さくうなずいた。ははあ、なるほどね。

あたしは通りを見渡して客になりそうな顔がないのを確かめると、立ち上がった。

「それじゃ、あんたたちの宿に行こうか。雷火、あんたはお供の二匹と散歩でもしておいでよ」

「おいおい」

慌てて雷火が抗議しかけたけれど、途端に黒犬の方が嬉しそうにワンと一声吠えて、足元をぐるぐる回りだした。おやまあ、元気なこと。早く行こうとばかり、雷火の足に頭突きしてせっついてるよ。
「待てよ、おい、俺はわんこどもの世話係じゃねえぞ」

「心配しなさんな、坊やを取って食いやしないよ。なるだけ正確に見るには、そばにほかの人間がいない方がいいのさ。そうさね、半刻もあれば足りるだろうよ」

あたしが言うと、雷火は不満げながらも、黒犬に押し出されるよ

うにして歩きだした。それまでお座りしていた白犬も、すつくと立ち上がる。

「雪白、頼むよ」

坊やが呼びかけると、白犬は先刻承知と言いたげな目をくれて、しつかりした足取りで雷火と黒犬を追って行った。

「いい名前だね」

あたしが言うのと、坊やは嬉しそうにっこりした。

「うん。雪白と、黒鉄っていうんだ」

「坊やがつけたのかい？」

店を片付けながら訊いたもんで、その質問に坊やがどんな顔をしたのか、背を向けていて分からなかった。返事のかわりに気詰まりな沈黙があつて、あたしが振り返ると同時に、坊やはごまかすように答えた。

「俺には思いつけそうにないです」

「そうかい」

あたしも、ぽんと軽く応じておいた。

旅籠はたこに案内する道すがら、坊やは妙に陽気だった。雷火と出会った時のことや、ここに来るまでに片付けた仕事のこと、やらかしたへまなんかを、楽しそうによくしゃべった。きつと、この後で自分の過去、あるいは未来と向き合うのを、怖がつてるんだろう。

客の中にも時々いるんだよねえ。良くないことになりそうだとか、この商売はうまく行かないだろうとか、不安でいっぱいの客。大丈夫ですよ、って言ってもらいたくて来たくせに、やっぱり駄目だと言われるのが怖くて、肝心の占って欲しいことを言わずに、余計なことばかりしゃべりまくる。

案の定、坊やも、旅籠に着いた途端にぴたりと無口になった。

四畳半の狭い部屋で向かい合つて座ると、まるで座敷牢みたいな重苦しい空気が満ちてくる。あたしはやれやれと苦笑した。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ」

「怖がつてない」

即座に激しい声が返る。自分の口調に驚いたように、坊やは身じろぎした。それから、恥ずかしそうにうつむいてつぶやく。

「すみません」

「謝らなくてもいいよ。多かれ少なかれ、先を知るのは怖いものさね」

「だから、怖がってなんか……」

「いない？　だとしたら坊やはお馬鹿さんだよ。あんたは明日死ぬ、って言われるかもしれないのに、怖くないのかい？　明日や明後日ではなくても、病に倒れるとか、追いつきに殺されるとか、大事な人を失うとか……　そんな未来が見えるかもしれない。どんなに今が幸せでも、人生ってのはいつどこで落とし穴を用意してるかわからないものさね。それを怖がらないお馬鹿さんが、思わぬ穴に足を取られて、ひどい目に遭うのさ」

あたしが諭すと、坊やは少し落ち着いた表情になったものの、今度は別の不安に眉を寄せて言った。

「まるで、この世には災難しかないみたいに言うんですね」

思わずあたしは笑い声を立てた。

「極端だねえ。もちろん、いいことだってあるに決まってるじゃないか。禍福は糾える縄のごとし、ってね。つらくて苦しいことが、後で良い結果につながるかもしれないし、思わぬ幸運に小躍りしてたら、そのせいで不幸を招くかもしれない。世の中そんなに単純じやあないよ。さ、今は坊やの探し物のことを聞かなくちゃね」

あたしが促すと、坊やはこくんとうなずいて、真面目な口調で話した。

神官戦士になるための『しるし』のこと。自分はそれを見付けなければならぬのだけど、その手掛かりがまるきりないこと。『影』に憑かれているらしいこと、『しるし』というのはそれを抜く方法のことかもしれない、ということ。

「ふーん……ほかの神殿には行かなかったのかい？　その影とやらを抜くために、さ」

「影は神殿に近寄れないみたいです。だから、俺が神殿に入れば一度は離れるんですけど……神気の及ばない所まで出たら、またついて来る。いくら神殿にいる間に楔みそぎをして清めても、駄目なんです」

「奇妙だねえ。単なる『穢れ』ってわけでもなさそうだね」

「そもそも、どうしてこの坊やにくっついてるんだろ？ 坊や自身が穢れたのなら、神殿で清めてもらえばそれで済むはずだよ。はて。」

「つい考え込んだあたしに、坊やがおずおずと言った。」

「あの、俺が影のこと話したの、おじさんには内緒にして下さい」

「うん？ あのトンチキ、話すなって言ったのかい」

「あたしが問い返すと、サトリが憤慨したようにシュツと鳴いた。」

「占い師ごときに余計なことは話すな、じゃと。サトリに知られるのも厄介だ、しるしの手掛かりだけ訊いておけ、とな。知れば我が彼奴をゆるするじやろうと」

「言いそうなことだよ」

「やれやれ。あたしは苦笑して、雷火の顔を思い浮かべた。金にがめついつて印象じゃあないけど、賞金稼ぎで暮らしているだけあって、何かと用心深そうなものね。いい気分はしないけど、腹を立てるほどのことでもない。サトリなんかと付き合ってるおかげで、あたしも心が広がったもんだよ。」

「そんならあいつが戻って来ないうちに、見てしまおうかね。さ、両手を出し」

「あたしはきちんと座り直し、ためらいがちに差し出された坊やの手を取った。」

「うまく見えるかどうかは、分からないよ。いいね」

「それだけ言っと、あたしは目を閉じた。ゆっくりと息をはずめ、心の中に星の光を思い描く。自分がすっかり光に変わったように感じたら、そのまま、光を重なり合ってたのひらにゆっくり集めていく。体のほかの所はなくなったように。」

それからそつと、少しずつ、水門を開く。星の光がてのひらを通
つて、向こう側へと流れて行く――

二 過去と未来（2）（前書き）

注意：自然災害の描写があります。

二 過去と未来（2）

……山が見えた。

険しい山に挟まれた深い谷に、まばらに建つ家。小さな田畑。質素な身なりの人々。

古い小さな神殿。優しいまなざしの老神官。生まれたばかりの子犬たち。

（ここが坊やの故郷なんだね）

そう思った瞬間、不意に様子が変わった。

降りしきる雨。山がうめき、木々もろとも地滑りを起こして崩れ落ちる。大きな黒い岩が泥に飲みこまれる。濁って荒れ狂う川。橋が流される。

神官が祭壇の前で祈っている。泣き叫ぶ人々、怒り、絶望。

人柱を。鎮めるために。うちの子は駄目だ。うちの子だって。

こちらを指さす手、手、手。

その子は身寄りが無い。神に仕える身。うってつけ。

叫ぶ口、すぎる目、訴える声、声、声。

皆のために。その命を。

ぐるり、暗闇が回る。

老神官のつらそうな顔。見上げる二匹の犬。

行きなさい。

神官が手をもたげ、どこかを指さす。

ぐるり。日が昇る。

手はまだ指さしている。

行きなさい。

北へ――

ぱしん。光が弾け、闇が幕を引いた。

あたしは坊やの両手をしっかりと握ったまま、額が畳につきそうな

ほど前に屈んでいた。やれやれ、毎度のこととはいえ、あんまり格好良くはないねえ。

ふう、と息をついて顔を上げる。と、坊やはすっかり青ざめていた。

「坊やにも何か見えたかい？」

「……深谷の里が。明師様も」

かすれ声でつぶやくように答え、坊やは手をふりほどいた。その手を両膝の上で握り拳にして、きゅつと唇を噛む。見習いとはいえ神官だものね、坊やにも見えて当然か。

あたしは背筋をしゃんと伸ばし、坊やを見つめた。この子ときたら本当に、何て重いものを背負っているんだろう。

「『影』の正体は分かっているんだね」

「本当のところは知りません」坊やは首を振った。「たぶんあれが『災い』で、俺が深谷から離れている限り、皆は無事なんだと思うんですけど。はつきり教えられたわけじゃ、ありませんから」

「あんたを送り出した神官様は、なんて言っていたんだい」

「……皆を許してやりなさい、って」

答えた声が震え、ぽとりと涙の滴が畳に落ちた。

「ほかに方法がなくてすまない、でもおまえならきつと『しるし』を見付けられる、って。だけど」

言いかけてしゃくりあげ、言葉を飲み込む。参ったねえ、泣かれちゃかなわないよ。

あたしは手を伸ばすと、坊やの肩をそつと叩いた。

「そんなら、きっとその通りなんだよ。故郷が懐かしいとか、恋しいとかで泣きたいのなら、好きなだけ泣くがいいさね。でも、騙されたとか嘘をつかれたとか、恨んで泣いてるのなら、そんなのはおよし。神官様はあんたを救おうとしてた。それはあたしにもはつきり分かったんだから」

坊やは無言のまま何度もうなずいて、手の甲でごしごし目をこすった。嗚咽がおさまるまで少ししかかったけれど、それでもなんとか

顔を上げた時には、きりつとした顔になっていた。潔いこと、本当に将来が楽しみだよ。

「綾女さんが見たこと、おじさんには絶対に言わないで下さい」

「言わないよ。でも、あいつはあんたの事情を知ってるんじゃないのかい？」

「なんとなく察してはいるみたいです。でも、ちゃんと話した事はなくて。もし聞かせたら、怒り狂って深谷の皆を吊るし上げに行きかねないから」

そう言つて坊やは苦笑した。あたしは目を丸くして、驚いたふりをする。

「そんなに義侠心あふれる性質だとは思えないけどねえ。面倒見は良さそうだけどさ」

「口ではいいかげんなこと言ったりするけど、おじさんはすごくいい人だよ」

おやまあ。ですますも忘れて断言したね、この子は。

「本当にそうならいいけどね。さてと、落ち着いたところで、話を戻そうかい？」

おどけて軽い口調を作りながらも、用心深く話の舵を取る。坊やは一瞬怯んだものの、息をひとつ吸つてうなずいた。

「あんたが人柱にされそうになったのは、地滑りや洪水を鎮めるためだね」

「はい。長雨で山が崩れて、里の境を守っていた石が倒れてしまったから、そこから禍つ神が^{まが}入ってきたんだ、って皆が言いだしただです」

自分に向かって話すように、坊やは淡々と言葉をつないだ。

「雨がいつまでも止まなくて、川があふれて橋は流されるし、畑のものは腐っていくし。明師様がいくら祈つても駄目だった。それで寄り合いが開かれた時に、守り石のかわりに人柱を立てよう、ってことに決まって。……俺が選ばれたのは当然だと思う」

身寄りが無いから、か。自分たちは痛い思いをせずに、物事を良

くしようだなんて、勝手なものさね。あたしは話を邪魔しないように黙ったまま、憤りのため息をついた。

「でも、明師様は俺を埋めようとはしなかった。そのかわり、『しるし』を探しに行くように言われたんだ。雪白と黒鉄も一緒に。俺がいなくなったら、代わりにあの二匹が埋められそうだったからじゃないかな。神殿の犬だもんね」

そこで坊やはちよつと皮肉っぱい笑みをこぼし、顔を上げた。

「寄り合いの結果は聞いてたから、そんなこと出来るわけないって思ったんだけど、明師様が何回か里の皆を集めて話をされた後は、誰も何も言わなくなった。それどころか、里を発つ朝には皆が見送ってくれたけど……皆の顔を見たら、追い出されるんだ、つてすぐ分かったよ。一里も行かずに影が後ろに現れた時も、俺は驚かなかった」

言い終えて、坊やは深く息を吸った。目はまた涙で潤んでいたけれど、もう泣きはせず、そつぽを向いて堪えている。あたしはちよつと間を置いてから、問いかけた。

「嫌だ、つて言わなかったのかい」

坊やは黙ってうつむいた。そうだねえ、言えるわけないか。まわりの村人は敵だらけ、唯一味方の神官様に迷惑はかけられない。

あたしは坊やの横顔をとっくり見つめて思った。もし人柱にされていたら、この子は最後まで黙って土を被せられただろう。震えながら泣きはしても、齒を食いしばって、助けて、なんて叫びはしないだろう。困った子だよ。

ふう、とため息をついて、あたしはなるたけ穏やかに言った。

「言っておけば良かったね。たとえ無駄だとしてもさ」

坊やは振り向かない。その肩に暗い影が見える気がした。

「しまいこんだ言葉は毒になるんだよ。心の中にいつまでも留まって、内側からじわじわと蝕む毒さね。あたしも、いくつか抱えてる」
「……綾女さんも？」

お、やっそこつちを見たね。

「そうさ。早くに親を亡くしてね。親戚が養ってくれてたんだけど、あの人たちも貧しかったもんで、あたしだけ人買いに売られたんだ。そのかわり、弟と妹は絶対にちゃんと育てるって約束させたけど、引き離されるのは辛かったねえ」

「……俺も」

小さな小さな声で、坊やがつぶやく。

「出て行きたくなんか、なかった」

「うん」

あたしもささやきで答えて、坊やの頭をそつとなでた。坊やはじつとしていたけれど、じきに恥ずかしくなってきたらしい。見る間に頬が桜色になって、うつむいてしまった。あはは、可愛い可愛い。おっと、笑っちゃ悪いね。あたしは手をひっこめて、顔をごまかすために咳払いした。

「それで？ 深谷を出たあと、北には何があったんだい？」

二 過去と未来（3）

「北？」

いきなり話を変えられて、坊やはきよとなった。

「そう、東西南北の北。神官様が、北に行きなさいっておっしゃったろ？」

あたしの言葉に、坊やは戸惑った様子で首を振った。

「行き先は何も聞いてないよ。だって深谷の北には険しい山があって、越えられるような道もないし、里から出るには南の方へ向かう一本道しかなかったから」

「はあ、なるほど。あたしは一人で納得してうなずいた。どうやらあたしの霊力も、少しはあてになるみたいだね。」

「そうかい、坊やには見えなかったんだね。あたしには、北を指さす手のはつきり見えたし、行けっていう声も聞こえた。どうやらそれが、あんたの『しるし』を示す手掛かりらしいね」

途端に坊やの顔が、ぱあつと希望に輝いた。うん、いい顔だ。

あたしもつられて笑顔になったところで、サトリが不機嫌なぼやきをもらした。

「いらん奴が戻って来おったわ」

誰が、と問うより早く、騒々しい足音が耳に届いた。ああ、あの男かい。

何の前置きもなく襖が開く。

「おや、犬の散歩は……」

終わったのかい、とからかいたあたしは、最後まで言えずに絶句した。雷火ときたら、髪はぼさぼさ、体中に砂をつけて、着物に片袖が取れている始末。

「おじさん、どうしたの」

「いったい何をやらかしたんだい」

坊やとあたしは同時に言っ、慌てて立ち上がった。雷火は「何

でもねえよ」と不機嫌に唸ったけれど、サトリがシシシと笑って秘密を暴露してしまった。

「谷の方に近づき過ぎたんじゃ。犬と遊んでるうちに足を滑らせて、危つく崖っぷちから転げ落ちそうになったとさ」

なんとまあ。あたしは坊やと顔を見合わせ、弾けるように笑い出してしまった。

「なんだい、心配するんじゃないよ」

「うるせえ。あんな所でいきなり崖になってるなんて、誰が考えるかよ。こら真理、おまえまでげらげら笑うんじゃない！ だいたい、誰のために俺がわんこ子どもを連れてったと思ってるんだ」

「ごめん、ごめん。でも、おじさんも結構楽しんできたみたいだね」
笑いながら坊やが言ったもので、雷火は真っ赤になってしまった。サトリが「犬好き」と小声で何度も繰り返す。あたしたちがあんまり笑ったもので、雷火はぶりぶり怒って背を向けた。

「あれ、どこへ行くんだい。そんなに照れなくてもいいじゃないか」
「針と糸を借りて来るんだよ」

ふてくされた口調で言っつて、雷火は取れた袖を振り回した。なるほどね。それでふと思ひ出し、あたしは坊やの着物をちらっと見てから言った。

「そうだね、直してあげようか。ついでだから、裁縫箱ごと一式借りといでよ」

「余計なお世話だ、自分で出来らあ。占いは終わったんだろ、さっさと帰れよ」

しっしっ、と野良猫を追うように手を払う。本っ当に、なんだつてこう失敬なのかね、この男ときたら！

「あのねえ、あんたの袖なんかどうでもいいけど、坊やの裾と袖丈を直してあげようつて言ってるのさ。つんつるてんじゃないか」

言われてやっとながが付いたように、雷火が坊やを振り返った。

「自分の面倒は見られても、坊やにまでは気が回ってないようだね。ほら、さっさと行っといで」

「いつから俺はおまえの使い走りになつたんだよ」

ぶつくさ文句をたれながらも、雷火は決まり悪げにそそくさと出て行く。今まで気にかけていなかったことを、他人のあたしに指摘されたのが恥ずかしかったんだろう。やれやれ、まっとうに恥じる気持ちがあるのなら、もうちょつと態度を改めりやいいのにねえ。

ともあれ、そんなわけしばらく後には、坊やは宿のかいまきにくるまり、あたしと雷火はせつせと手を動かしていた。自分で出来る、と言っただけあつて、雷火の手つきは慣れたものだ。糸の端に玉結びを作つてないことに、いつ気付くかは知らないけどね。

「北に行けつつても、それだけじゃあな」

雷火は考えながらちくちくと針を動かしている。そっちを見ると笑いだしそうだから、あたしは自分の手元に集中しているふりで答えた。

「どこに行つて何をすればいいのか、事細かに教えてくれるようじや、『しるし』探しの意味はないってことじゃないかい。何にしろ、ここから北に向かうなら、峠を越える一本道しかないね」

「俺が転がり落ちた道か」

雷火は面白くなさそうに言つて、シュツと布をしごいた。当然、糸はするりと全部抜けてしまう。坊やがふきだし、あたしはうつむいたまま笑いを噛み殺した。雷火はうんざり顔で糸と袖を眺め、ため息をついた。

「おまえらな……気付いてたんなら教えろ！ まったく」

「おや失敬、『余計なお世話』かと思つたのさ」

あたしが意地悪く言つたので、雷火は唸りながら玉結びを作つた。「そうそう、あんたが転げ落ちた山道の先には、吊り橋があるんだけどね。そこを渡るには金がいるよ」

「ああ？ 通行料を払えつてのかよ。誰がそんな迷惑なことしてやるんだ」

「この瀬場の名主さね。橋を直したり手入れしたりするのに使う金だ、って言つてるけど、実際どうなんだか。まあ人の行き来は多い

から、あまり高くはないけどさ」

あたしは言って、糸の端を切ってから顔を上げた。雷火は苦々しげに、坊やは困った様子で、顔を見合わせている。サトリがシシシと笑い、文無し、と小声でささやいた。まったく、口の悪い妖だよ。あたしは二人に向かって慰める口調で言った。

「どうしても嫌だつてんなら、道がないでもないよ。瀬場の名前通り、この近くで谷を渡れる浅瀬があるのさ。ただし、険しい崖を降りて、川を渡つたらまた、向こう岸の山をえっちらおっちら登らなきゃならないけどね」

「なんだ、道があるなら早く言えよ」

あからさまに雷火がホツとする。あたしは呆れてしまった。

「そんなに懐が寒いのかい？」

「うるせえな」雷火がつっけんどんに応じると、

「うん、まあね」坊やがうなずくのが同時だった。

雷火は坊やを睨みつけたけれど、坊やの方は首を竦めてその視線をやりすごした。

「隠したってサトリがいるんだから、ばれるよ。そうでしょ、綾女さん」

「うちのサトリは性悪だからね。人が知られたくないことは喜んで教えてくれるよ。けどあんたたち、そんなに困ってるなら周旋屋に行けばいいじゃないか。まるつきり仕事がないわけじゃないだろう？」

「あいにく、それがねえんだよ」

雷火は言って、口をへの字に曲げた。

「着いてすぐに小物の妖を退治して、ちよつとは金が入ったがよ。あとはさっぱりだ。こちらら大所帯なんで、仕事かねえところには長居も出来ねえのさ」

ああ、そうか。この里もあたしが居座ってる内に、妖の数が減ってきたからねえ。

「それで、あたしの見料も払ってもらえないわけだね」

やれやれ。口止め料代わり、とは承知していたけれど、それでも気を変えて手間賃ぐらいはくれやしないかと思っただけ。子供と犬二匹を連れてる奴から、むしり取るわけにはいかないし、それに……まあ、仕事がないのはあたしのせいでもあるわけだし。

「ごめんなさい」

坊やがしおらしく謝ったもんで、あたしは急いで気前よく笑って見せた。

「気にすることないよ。たまにはこんな事もあるさね。それじゃあ、発つ時はあたしが渡し場まで案内してあげるよ。また転げ落ちられちゃ、大変だからさ」

そう、そして、早いとこよそに行って貰わなくちゃね。余計な事まで知らない内に。

三 渡河血路（1）

三

翌日、あたしは店を出さずに峠へ向かうことになった。

「目印か何かさえ教えてくれりゃ、わざわざ案内してくれなくてもいいんだぜ」

雷火が胡散臭そうな口調で言った。遠慮している風に装って、本心じゃどうせ、たかられるんじゃないかと警戒してるんだろ。サトリじゃなくても見え見えだよ。

「うるさいね。あんたが崖から転げ落ちようと、道に迷おうと、知ったこっちゃないよ。あたしは坊やが心配でついに行くのさ」

「おーおー、真理、おまえ随分と気に入られたな。気をつけるよ。よそ見してる隙に、取って食われるかも知れねえぞ。ひよいぱくつてな」

「なんだい雷火、あんた自分が可愛くないからって、ひがんでるのかい」

「馬鹿野郎、誰がひがむか！」

相変わらずの言い合いも、三日目となると坊やも慣れたようで、笑いながら聞き流している。お天気もいいし、風は爽やか。こんな小春日和は散歩も悪くないね。

集落が途切れて、道が山へ上りはじめる。しばらく進んでから、本道を外れて木立の中を下って行く細い枝道に入った。

「なんだ、俺が落ちかけたところじゃねえか。くそ、脇道になってたなんて、見えなかったぞ。草刈りぐらいしとけてんだ」

雷火が悪態をついた。なるほど確かに、知らなければ道があるとは見えないかもね。

「下まで落ちなくて良かったねえ。気を付けなよ、ここからは道を踏み外したら谷底へ真っ逆さまだからね」

脅しておいて、あたしは先へ進んだ。

「茶店のおばあさんに聞いたんだけど、こっちの方が古い道なんだってさ。でも橋が出来てから、あっちの方が道もいいし便利なんで、誰も通らなくなって、荒れてるんだよ」

急な斜面にはりつくようにして続く細い道は、人ひとり通るのがやっとだ。おまけにとこころ崩れているし、でこぼこしていて、やたら危なっかしい。

どうにか下まで降りると、あたしはホッと息をついた。ふう、やれやれ。

崖の下から大きな丸石だらけの河原が広がり、その間を、勢いよく飛沫をあげて小さな流れが幾すじも走っている。幅の広い本流が岩を洗い、ちよつと先で滝になっていた。そこいらで兩岸の崖がまた狭まって、小さな流れは全部ひとつにまとまっている。

上流の方も似たような景色だった。ごつごつした大きな岩の間を、ほとんど垂直に川が駆け降りてくる。崖と崖が内緒話でもするみたいに身を寄せ合っているところに、細い橋が架かっているのが見えた。あの吊り橋がなければ、谷を渡れるのはここだけだ。

「さて、ここいらでいいかね。川を渡ったら、あそこから登るんだよ。ちよいと見えにくいかもしれないけど、なあに、じきにまた本道と行き会うだろうさ」

あたしは向こう岸の上り口を指して言った。

「ありがとうございます」

深々と頭を下げたのは、もちろん坊やの方だった。

「本当にいろいろ、お世話になりました。それなのに……」

「いいって、いいって」

あたしは照れ臭くなって、急いで手を振った。

「お礼なんていいよ。お節介があたしの性分なんだからさ」

あんたは昔、故郷に置いてこなきゃならなかった小さな弟に、ちよつと面差しが似てるんだよ——なんて、恥ずかしくて言えやしない。

「気にしないで、さ、お行きよ」

あたしがそう言った直後、サトリが肩で猫のようにフーツと唸った。同時に、二匹の犬も低くウウツと唸りだす。

その意味はひとつ。『敵』だ。

あたしたちは揃って河原に向き直った。

最初は誰もいないように見えたけれど、じきに、サトリと犬が嗅ぎ付けた敵が現れた。向こう岸の木立が揺れ、素早い身のこなしで、汚いなりの男たちが十数人ばかり、川岸に降りてきたのだ。

「ちっ、なんだ、人間かよ」

雷火が嫌そうに舌打ちした。妖の方が良かった、って意味だろう。気持ちは分らないでもない。相手が悪党でも、人を殺めるのは気分が悪いものだし、第一、こいつらを退治して金がもらえるわけじゃないものね。

連中は、ひげも髪も伸び放題のぼさぼさで、これ見よがしに武器を手にしていた。どうせ誰かからの分捕り品だろうけど、刀だったり、槍だったり、いろいろだ。

「こやつら、ただの追い剥ぎではないぞ」

サトリがささやいた。なんだって、とあたしは心の中で問い返す。近くにいた坊やも、眉をひそめてこつちを見つめた。

その間にならず者の一人が、流れのすぐそばまで進み出てきた。

「よう、姐さんたち、上に立派な吊り橋があるのに、ここを渡ろうってのかい？ 物好きじゃねえか。橋を渡れない理由でもあんのかい」

「あたしは見送りだよ。その兄さんが、吊り橋は怖くて足が竦むって言うんでね、道を教えてやったのさ」

あたしが大声で言い返すと、向こう岸で嘲り笑いが上がった。ちらつと雷火の方を見ると、案の定、ものすごく嫌そうな顔であたしを睨んで、口だけ小さく動かし何やら罵ってくれた。

「覚えてろ、じゃと」

サトリが小馬鹿にした口調でささやく。あたしは声に出さずに問

いかけた。

（それより、ただの追い剥ぎじゃない、ってどういうことだい）

「奴ら、名主に雇われとる。橋を使わずに瀬を渡ろうとする者を襲うのが役目じゃ。こっちは山賊が出るから通らぬが良い、と噂を立てるためじゃろうな。見返りに獲物を融通してもらつとるようじやぞ。おぬしらは『知らせにないが、いい獲物』じゃと」

「獲物だつて？」

あたしは思わず唸った。やつらにとつての獲物、つまり旅人や行商人かい。とりわけ、いなくなつても誰も気に留めそうにない、うんと遠くから来た者や、決まつた商売相手が行き先で待っているわけではない者。

「名主がそういう通行人を、奴らに教えてるってことだね」

「さよう。通行料を取るのは、通行人の数や素性を調べるためでもあるんじゃないか」

「汚い商売してくれるじゃないか」

あたしは舌打ちして、ならず者たちをねめつけた。そういう連中が第一に狙うのがどういう立場の人間か、あたしはよく知っている。身寄りのない、女子供だ。けだものめ！

サトリの話を聞いていた坊やも、険しい目でならず者たちを睨んでいる。

「参ったね、見逃してくれねえかな」

わざとらしく哀れっぽい声を出したのは、雷火だった。

「俺ア高いところは苦手なんだよ。どうにも膝が抜けちまつてね。

けど、北へ行くにはこの峠を越すしかねえんだろ？ 頼むよ」

なあ、と馴れ馴れしく頼む。坊やはそんな雷火の態度が気に入らないらしく、怖い顔でむつつり黙っていた。そうさね、あたしもこんな連中は骨まですり潰してやりたいよ。だけど今は駄目だ……今は、まだ。

ならず者たちはげらげら笑って、ゆつくり川を渡りだした。あたしたちは、それに押されるようにじりつと後ずさる。とうとう、察

しの悪いあたしたちに業を煮やして、サトリが大声を上げた。

「こやつらは、お楽しみに飢えとる。話は通じぬぞ！」

サトリの言葉はならず者たちには理解できなかったようだけど、それでも、何か変な動物の鳴き声を聞いたと思っただけ。ぎよつとしたように何人かが足を止め、きよるきよるした。その隙に雷火と坊やが、刀の鞘を払う。あたしは身を翻して逃げ出した。

わっ、と声上がる。ならず者どもがいつせいに走りだし、雷火と坊やに襲いかかった。もちろん、あたしを追って来る奴もいる。

「ああもう、面倒だね！」

小声で毒づいて、あたしは懷を探った。細くて華奢な守り刀が手に触れる。せめて、坊やの目に触れないところまで逃げないと。

「右に屈め！」

サトリの声と同時に、あたしは体を折り曲げた。直後、ビュンと風を切って矢が飛んで行く。ちよつと、弓矢まで持つてゐるのかい？ しかもいい腕前じゃないか、ええ腹の立つ！ 急がなきゃ！ と、焦ったのがまずかった。

「あつ！」

踏んづけた丸石がごろんと回り、足が滑った。しまった！

とつさに手と膝をついて、まともに倒れるのは堪えたけれど……ああ駄目だ、足首を捻うちまったよ。顔を上げると、ほんの五、六歩のところまで、下卑た笑いを浮かべた男が迫っていた。視界の隅で、坊やがこつちを振り向いて青ざめるのが見えた。

「雪白、黒鉄！ 綾女さんを守れ！」

坊やが叫ぶ。けれど、二匹の犬にとつちや、坊やの方が大事なご主人様だ。どつちみち二匹とも、あたしにかまけていられる余裕はなさそうだし、こうなったらもう仕方ない。

「おいで、闇鷲^{アンシ}！」

あたしは空に向かって呼ばわると同時に、守り刀を抜いて、親指に小さな傷をつけた。

切り口から血がプツツと膨れて、小さな玉をつくる。

男が耳まで裂けそうなほどニタツと笑って、あたしに手を伸ばした――そこへ、フツと大きな影が差した。

「えっ？ あ、うわああッ！」

羽ばたきの音と共に、漆黒の鳥が舞い降りる。夜を抱いたような翼は、大人が両腕を広げたよりもまだ大きい。鋭い爪とクチバシが、瞬く間に男を血まみれにしていく。

男は必死に腕をかざして頭をかばい、悲鳴の合間に助けてくれと叫びながら、やみくもに刀を振り回す。けれどももちろん、あたしの闇鷲には傷ひとつつけない。

すさまじい悲鳴に、ならず者たちも、雷火と坊やも、何事かと驚きの目を向けた。男はヒイヒイ叫びながら、クチバシに追い立てられて滝の方へとよるめく。

「駄目だ、そっちは危ねえ！」

ならず者の仲間が叫んだ時には、闇鷲の力強い一蹴りが、男を滝へ追い落としていた。

三 渡河血路(2)

「……化け物だ」

誰かがかすれ声をもらした。あたしは座り込んだまま振り返り、すつと手を上げた。そして、次の標的を定めるように、人差し指をのばしてならず者たちを順に示し……

「うわああー！」

おや、もう逃げ出しちまったよ。なんだい、意気地なしどもばかりだね。

フンと鼻を鳴らしたあたしのそばに、闇鷲がバサリと降りてきた。姿は鶴に似ているけれど、鴉のように全身真っ黒。そして目は炎のように輝いている。いつ見てもほればれするねえ。あたしは先刻つけた親指の傷を闇鷲のクチバシに押し当て、血をなすりつけてやった。闇鷲は人の生き血をすすする妖じゃあないけど、たまにこうしてやると喜ぶのさ。あたしとの絆も強くなるしね。

「びつくりさせるじゃねえか。いったい何を飼ってやがるんだ、ええ？」

雷火が呆れたように言つて、こっちにやって来た。皮肉っぽい顔を作ろうとしてはいるけど、賛嘆の色が隠せていない。ふふふ。

「綾女さん、それ……まさか、陰摩羅鬼オンモラキですか？」

坊やおおずおおずとやってきて、遠慮がちに闇鷲を見た。炎の瞳に見つめ返されて縮こまるさまは、叱られるのを怖がる子供みたいだ。ま、無理もないけど。

「オン……何？」 雷火が変な顔をした。

「オンモラキ。神殿に住んでる霊鳥で、怠け者を見つけると出てくるんだってさ。本当にいるなんて思わなかった」

「見習いに言うことをきかせるための、ただの脅し文句だと思ってたかい？」

あたしがくすくす笑ってからかうと、坊やは赤面した。

「実を言うとあたしも、これが本当に陰摩羅鬼かどうかは、知らないんだけどね。お師匠さんから受け継いだのさ。心配しなくても、人は食べないよ。ほかの小さな妖を食べてるみたいだね。腹を空かせる様子がないと思ってたけど、さっきの連中やら名主やらが強欲だから、いくらでも雑魚が引き寄せられてきたんだろうさ」

話を聞いていた雷火が、見る見る嫌そうな顔になった。失敬だね、あからさまだつたらありやしない。

「ってことはおまえ、巫師だったのか」

「だったら何だってのさ。おかげで助かったろ？　礼ぐらい言ったらどうなんだい」

「ああ、そうかい、ありがとよ。だがそいつが妖を食っちゃまうから、俺たち流れ者の仕事がなくなったんじゃねえか。銭がありやあ、わざわざこんな瀬を渡ろうなんてケチくさいこと考えるかよ。まったくとんだ災難だ」

ぶつくさばやきながら、雷火は刀を鞘におさめた。と、坊やが面食らった様子で、あたしと雷火をかわるがわる見て言った。

「巫師って……でもおじさん、巫師の大半は話の通じないジジババばかり、って言わなかった？」

「ちよつと、雷火、あんたね」

「騙されるなよ真理、こいつだって中身は鬼ババじゃねえか」

「なんだってえ！？」

カツとなつてあたしが怒鳴ると、闇鷲がバサバサ羽ばたいて雷火をつつきだした。

「ほら見るー！　うわ、いてて、やめろ、やめろつたら！　分かった、悪かった、俺が悪うございました、お優しい綾女様！」

呆気にとられていた坊やが、しまいにふきだし、朗らかな声で笑いだした。それに免じて、あたしは闇鷲を呼び戻す。雷火は小さな引つ掻き傷だらけになった腕をフーフー吹いて、恨めしげにあたしを睨んだ。フン、人を鬼ババ呼ばわりするからさ。

「まあこのぐらいにしとこうじゃないか。お互い、面倒に巻き込ま

れちまったわけだしね。あたしは親切のつもりであんたたちを案内したけど、結果はこのざま。巫師だってばれたんじゃ、あたしももう瀬場にはいられない。無害な占い師ならともかく、お化け鳥を操る鬼ババアときちゃあね」

あたしは皮肉っぽく言つて、乱れた髪をかきあげた。そして、坊やの方を見て続ける。

「けどまずいことに、足をくじいちまったんだよねえ。一人じゃ歩けないし、あの連中が仕返しに来ないとも限らないし、頼りになる道連れがほしいんだけど」

「おいおい……」

雷火がうんざりしたうめきを漏らしたのとは対照的に、坊やはパツと嬉しそうに顔を輝かせた。

「もちろん、俺たちが一緒に行くよ！ あ、いや、行きます。お供します、かな？」

何度も言い直すのがおかしくて、あたしは思わずふきだしてしまつた。

「いいよ、もう、そんなに気を遣わなくても。さて、そうと決まったら、まずは里に戻らなくちゃね。あたしの荷物は宿に預けたままだから…… まさか闇鷲に取りに行かせるわけにもいかないし」

財布は身につけているけれど、荷物の中には鏡やら櫛やら、替えの足袋やら何やら、大事なものがいっぱいある。とは言え、あたしのこの足で里に戻るとなると、それより早く、あの連中が名主に事の次第を知らせてしまうかもしれない。弱ったね。

「その足じゃ無理だろ。俺がひとつ走り行つてきてやるよ」

おや。雷火ときたら、あたしの考えを読んだみたいなことを言うじゃないか。

あたしが目をぱちくりさせていると、坊やが「待って」と雷火を引き留めた。

「それより、雪白と黒鉄に取って来させたらどうか？ その間に俺たちは、綾女さんを支えて向こう岸まで渡っていたらいいわけだ

し」

「お、そいつは名案だ」

雷火があっさりうなずいたもので、あたしは慌てて口を挟んだ。
「ちよいとお待ちよ。いくらその二匹が賢くても、宿屋で荷物を渡してくれって言うのは無理だろ。それに、犬の背中にくくりつけられる重さじゃないよ」

二匹ともがつしりしちやいるけど、犬つてのは背中に物を載せるようにはできてないんだからさ。櫓そり 何かで引かせる分には役立つけど、それじゃあ時間がかかるし、第一そんな道具はない。

そう思ったのだけど、坊やと雷火は揃ってあたしを振り返り、得意げににんまりした。気色悪いね、いったい何なんだい。

「まあ、見ててよ」

言つと坊やが二匹の頭に手を置いて、小さな声で祝詞をとえ始めた。何をするつもりなんだか……

「えっ？ なに、まさか」

無意識に声がこぼれた。ちよいと、そんな事があるものかね？

ああ、この目がおかしくなったんでなければいいんだけど。

あたしは何度も瞬きして、つくづくと目の前のものを見つめた。
ほんの今し方まで犬だったのに、そこにいるのは間違はなく、二人の……若者、だった。身につけている着物は色こそ白と黒の違いがあるけれど、どちらも神官戦士の装束だ。

「驚いたねえ。夢でも見てるみたいだよ」

あたしはぼかんとして、雪白と黒鉄をつくづく眺めた。その間に雷火が矢立たと紙を用意して、あたしに差し出した。

「一筆書いてくれ。わんころどもは、人の姿は取れるが、言葉はまだ話せねえらしいんだ。まあ、話せたとしても、宿の者に信用してもらわにやならんわけだし」

「ああ、そうだね」

まだぼうつとしたまま、あたしは筆を取った。ええと。この書き付けを持参した者にあたしの荷物を預けて下さい……と、こんな感

じかねえ。

白と黒の若者は、書き付けと一緒に坊やからいくつか注意を受けると、つむじ風のように走り去った。いやこれが、もののたとえじやなくて、本当に風みたいなんだから恐れ入るよ。あつと言う間に見えなくなっちまった。

「さて、それじゃ俺たちは川を渡るとするか。立てるか？」

雷火が差し出した手につかまって、あたしはなんとか立ち上がった。またぞろ丸石で足を捻っちゃたまらないから、一步一步、用心深くじりじりと進んでいく。倒れそうになっただらいつでも支えられるように、坊やがすぐ後ろからついてきた。なんだかいきなり年寄りになった気分だよ。

川を渡る時はさすがに足場が悪くて、一度、がくんと体勢を崩して石から落ちかけてしまった。とつさに雷火が支えてくれたのはいんだけど、そのために雷火は両足とも水に浸かってしまった。

「すまないね」

あたしが詫びると、雷火は流れに両足を浸したまま、苦笑して応じた。

「どうせさっきの立ち回りで、水たまりに突っ込んでしまったんだ。川にはまっただけ濡れのおまえさんを引き上げることに比べりゃ、こっちの方がマシってもんさ」

口調はやたらと偉そうで腹が立つけれど、なんだかんだ言って、結局雷火はざぶざぶ濡まで濡らしながら、あたしを無事に渡らせてくれた。あんまり認めてやりたかないけど、坊やが言った通り、この男は結構いい奴なのかもね。

「まあなんとか渡れたな。しかし、ここからの方が難儀だぞ」

急斜面を見上げて雷火が、げえ、という顔をする。坊やもそっくりの仕草で首をのけぞらせ、苦虫を噛み潰した。思わずあたしは「およしよ」と声をかける。

「そんな顔しちゃ、男前が台なしじゃないか。むさくるしいおっさんの真似なんか、するもんじゃないよ」

「なんだと！？ 置いてくぞ、この鬼ババア」

即座に雷火が吠える。うるさいねえ、前言撤回。やっぱりろくなしだよ。あたしはフンとそっぽを向いた。

「いいよ、一人で先に行けばどうだい。あたしは坊やと、あの白黒のわんころたちに助けて貰うからさ」

「本っ当に可愛げのねえ女だな。だから巫師って奴は嫌いなんだ。くそっ」

吐き捨てるように言って、雷火はそこらの小石を拾うなり、えいやと遠くへ投げた。巫師に何か恨みでもあるのかねえ。

「そう言えば」坊やが雰囲気を変えるように口を挟んだ。「綾女さん、占い師と巫師はどう違うんですか？ 占い師なら里にいられるのに、巫師は駄目なんですか」

「そりゃ、一言でいうなら霊力の差だね。だから出来る事も段違いなのさ。占い師は何かを見ることは出来ても、変えることは出来ない。けれど、あたしたち巫師は違うよ」

あたしは胸を張り、誇らしげに笑った。そう、これはあたしが自力で勝ち取った技だものね。神殿にも頼らずに、さ。

「より強い妖を従えて、様々なことを、望むように変えていける。何もかもってわけにはいかないけどね。でも、少なくともあたしは、飢えることも、誰かに虐げられることも、なくなった。だからこそ他の連中にはやっかまれたり、怖がられたりするんだけどさ」

ちらつと雷火の顔色を見て、あたしは一応、言葉を付け足しておいた。

「そうさね、確かに性根の曲がった巫師もいるよ。好き勝手するのに慣れちまって、他人のことなんざ考えられなくなっちゃった奴らさ。おかげでこっちはいいい迷惑だよ」

フン、と雷火が鼻を鳴らした。なにさ、こっちが折れてやったつてのに、随分な態度じゃないか。

あたしがムツとなっていると、雷火は物も言わずにくるりと背を向け、その場にしゃがんだ。……何のつもりだい？

「ほら、そろそろ行くぞ」

ぶつきらばうに、それだけ言う。ええっと、なんだい、つまり、
「おぶされ、つてのかい？」

「ほかにこの崖を上がる方法があるか？」

うわ、嫌そうな声。もうちよつとなんとかならないものかね、本当にこの男ときたら！

とは言え、確かにこの急斜面を、片足でよちよち登るのは……無理だろうねえ。上から引つ張ってもらって、下から坊やに押し上げてもらえば、なんとかなるだろうけど。でもそれじゃあ、あたしが足を滑らせた途端、三人とも団子になって転げ落ちてしまう。

「ないようだね」

あたしはため息をついて、洪々雷火の背におぶさった。おや……存外、広い背中だこと。ふうん。まあとにかく、次にこいつが言いそうなことは、大体予想がつくけどね。

「いよッ、と……おっと。くそ、重てえな、懷に石臼でも入れてんのかよ」

ほらきた。あたしは鼻を鳴らただけで、答えなかった。サトリがあたしの肩でくるくる回って、キシキシ、といやらしく笑う。余計なことを言い出されちゃ、たまらないよ。

「お黙り」

「黙れ」

はからずも、あたしと雷火は同時に唸った。サトリは二人分の声に押し潰されたみたいに、キュツと鳴いて身を縮め、こそこそと背中中に隠れる。

後ろから坊やが、なんだか複雑な顔でついてくるのが分かった。

四 後ろ足で砂を（１）

四

崖道を登りながら、雷火が唐突に訊ねた。

「おまえ、どこで巫師の技を習ったんだ？」

「聞いてどうするのさ」

「別に。黙って登つてると、気が滅入るからよ。おまえは暇だろ、何か話せよ」

それが人にものを頼む態度かい？ まったく、呆れるね。とはいえ、ちらつと後ろを見るなり、興味津々の坊やと目が合っちまったんじゃ、仕方ない。あたしはぼつぼつと、細かい事は省いて、身の上話をして聞かせた。

「あたしは人買いに連れられて、都まで行ったんだけどね。幸い、女郎屋なんかじゃなくて、大きなお屋敷の下働きに買い取られたのさ。どこだったっけねえ……弓削の中將とか言ったと思うけど」

と、いきなり雷火がつんのめった。あたしは危うく落ちかけ、慌てて肩にしがみつく。

「ちよいと、気をつけとくれよ。心の臓が止まるかと思ったじゃないか」

「ああ、悪イ悪イ」

おや？ なんだい、素直に謝るなんて、おかしいね。

妙な気分がしたけれど、それきり雷火が黙っているの、あたしは話を続けた。

「最初は犬ころよりひどい扱いだったけど、じきに、お師匠さんがあたしを見に来た。そのお屋敷には、なんと専属の巫師までが住んでいたんだよ。あたしが人に見えないものを見るもので、気味悪がった女中が噂をしたんだろうね。それを聞いたお師匠さんが、あたしを弟子にするって決めたのさ。それから、お師匠さんの手伝い

やら雑用やらをしながら、様々なことを学んだよ。

でもねえ。巫師の仕事ってのは、田舎で村人相手に病を治したりしてるうちはいいけど、お偉いさんが絡むと危なくっていけないね。お師匠さんは、屋敷の主の『敵』とやらを大勢呪い殺したり、病や怪我を見舞ったりしていたけれど、しまいにととうと、相手方の巫師に負けちまったんだ。

そのせいで、お屋敷はさんざん。お師匠さんはその場で血を吐いてこときれちまうし、主は気が触れてわめきながら刀を振り回すし、奥方は倒れるし、蔵から火は出るし。

……で、そのどさくさ紛れに、あたしも屋敷を逃げ出したってわけ」

あたしが締めくくると、雷火はぼつりと「あっけねえな」とつぶやいた。確かにそう聞こえたのだけど、

「何だつて？」

とあたしが聞き返すと、ぶつきらばうな声が返ってきた。

「おっかねえな、ってったんだよ」

なんだか様子がおかしいねえ。でもまあ……根掘り葉掘り訊くこともないだろ。

「まあね。あんな世界とは二度とかかりあいになりたくないよ」

あたしは軽い口調で答えてから、ちらりと後ろを見た。坊やはうつむいたまま、黙って足を動かし続けている。何を考えてか、随分と深刻な表情だ。

「悪いのは誰だろう」

耳元でサトリがささやいた。坊やに聞かれないように、うんと小さな声で。

「巫師がいるから？ 違う、巫師に人を呪わせる主が悪い。でも、巫師がそんな仕事を引き受けなければ……」

おやおや、難しいこと考えてるんだねえ。あたしは小さなため息をついた。

「ねえ、坊や」

あたしが声をかけると、坊やはびっくりした様子で顔を上げた。その目がサトリを見付け、はっと険しくなる。

「どっちが悪い、なんて、単純に白黒つけられるもんじゃないんだよ。あの二匹の犬と違ってね、人間は灰色のことが多いのさ」

「じゃあ、さっきのならず者たちも、灰色なんですか」

「それはどうかねえ」あたしは苦笑するしかなかった。「かなり真っ黒だろうと思うよ。けどもしかしたら、あんな連中も、たまにはふと、情けを見せるかも知れない。もっともあたしは、だからって容赦してやるつもりなんざないけどね」

「……難しいですね」

「そうだね。でも、だからこそ、どんな人間でも救われる道が残されてるんだろうさ」

なんとなくそんな事を言ったあたしに、雷火が鼻を鳴らした。坊やは黙って、地面に目を戻す。またサトリが耳元にやってきたけれど、あたしも今度は、その声を聞こうとしなかった。

ようよう崖を登りきったところで、あたしたちは腰を下ろして一休みした。雷火はもちろんだけど、二人分の荷物を背負った坊やの方も、へとへとになってしまったからだ。

「二人とも、大儀であつたな」

あたしはわざと、お姫様みたいに偉そうな口調で言った。坊やが肩を大きく上下させながら、なんとか笑顔を見せる。一方雷火はぎろりとあたしを睨んだけれど、ぜえはあ息をするのに忙しくて、悪態をつく余裕もないようだ。あたしは苦笑して言い直した。

「本当にご苦労だったね。おかげで助かったよ。わんころたちが戻ってくるまで、ゆっくり休んでるといいさ」

どう致しまして、というつもりか、雷火は黙っておさなりに手を振った。

しばらくかかって息を整えると、ふいに雷火が言い出した。

「なあ、ちよいと考えたんだがよ」

何か、とあたしと坊やが振り向く。雷火は順にあたしたちの顔を

見て、にやつとした。

「行き掛けの駄賃にあの吊り橋を落としてやる、つてのはどうだい。ためこんだ金がありや、すぐに直せるはずだよな？」

「おや、あんたにしちゃ、良い事を思いつくじゃないか」

思わずあたしは笑顔になった。そうさね、わざわざ名主の所まで行って吊るし上げてやろうとまでは思わないけど、何かちよつとは煮え湯を飲ませてやらなきゃ気が済まない。橋を落としてやれば、名主も慌てるだろうさ。

通行人から巻き上げた金で贅沢してるんだとしたら、手元にや何も残っちゃいないだろうし、だからつて橋を架け直さなきゃ、皆に、あの金はどうした、つて迫られる。橋を架けるだけの金があつて、ばれないようにすぐに直したとしても、名主の懷に痛手を与えてやれるんなら、まあいいさね。

「でもそれじゃ、あの橋を使つて行き来する人たちに迷惑がかかるよ」

坊やがあんまり乗り気じゃない様子で言った。いい子なんだけど、ちよつとばかり融通がきかないね。付き合いの長い雷火はその辺も心得たもので、すぐさま反論した。

「だったら、何にも知らないまま名主の好き放題にむしり取られっぱなしの方が、迷惑じゃねえつてのか？　橋がなきゃ、瀬を渡りゃいい。なに、不自由なのちよつとの間さ」

「……そうか。言われてみれば確かにそうだね。じゃあ、橋を落とすのはおじさんにやつてもらおうかな」

「アレで、か？」

「うん、アレで」

なんだい、二人してアレソレつて。あたしは一人わけがわからずに、眉を寄せた。

「生意気な賞金稼ぎじゃ」「サトリが小声でばやく。」「真名の法術が使えるらしいぞ」

はぁん、なるほどね。てことはさしずめ、アレですか。

納得したあたしの前で、雷火が よつ、と声をかけて立ち上がった。

「んじゃま、ちよつくら行つてくらあ」

「一人で大丈夫かい？」

あたしは思わず心配になつて訊いた。雷火は一瞬だけ驚いた顔をして、それから皮肉つぽくにやりとする。

「片足くじいた姐さんがついて来るよりや、一人の方が安心つてもんだ。真理、そいつと荷物の番、しつかり頼むぜ。すぐ戻るから待つてろよ」

言うだけ言つて、雷火はさつと走りだした。あたしはお荷物だつてことかい。ふん。

「坊や、よくあんな口の悪い奴に我慢してるねえ。あんたまで、あいつの真似をしちゃあいけないよ」

あたしが文句を言つと、坊やはくすくす笑つて「はい」と素直に答えた。

待つている間、あたしはそつと足を曲げたり伸ばしたりしてみたけれど、やっぱりすぐには治りそうにない。悔しいけれど、この足じゃあ確かにお荷物だね。雷火が面倒を引き起こさずにいてくれりや、いいんだけど……

……遅いねえ。ここから橋まで、そんなに遠いとは思えないんだけど。

ふと道の上を振り向いたあたしに、坊やもぽつりと「遅いですね」とつぶやいた。

耳を澄ませても、鳥の声のほかは何の物音も聞こえない。橋が落ちる音も、人の声も。胸騒ぎがするよ。

と、下の方でかすかにバシャバシャと水音が聞こえた。おや、もしかして。

あたしと坊やが揃つて小道を見下ろしたと同時に、黒と白の二人が駆け登ってきた。

「良かった、戻ってきたね」

坊やがホツとした様子で言い、待ちかねたように立ち上がる。

「ちよいとお待ちよ、坊や、まさか」

「ごめんね、綾女さん。でもおじさんがこんなに手間取るとは思えないし、心配なんだ。雪白、黒鉄、おまえたちはここで綾女さんを守って、待ってるんだぞ。いいな」

命令されて、雪白が不服そうに顔をしかめ、ついて行きたそうに数歩進み出る。けれど坊やは断固として首を振った。

「駄目だ。いくら綾女さんが強い巫師でも、あのならず者たちに見付かったら無事ではすまないよ。第一、おまえたちまでついて来たら、目立ってしまつてかえって良くないかも知れないだろ。分かったらここにいろんだ」

雪白がため息をついた。丸つきり人間みたいだねえ。渋々、出した足をひっこめて、あたしのすぐそばに立つ。黒鉄の方は最初から聞き分けよく、あたしの荷物を雷火たちと一緒に置いて、そのそばに立っていた。

「気をつけて行くんだよ」

あたしの言葉を聞くか聞かないか、坊やはもう走りだしていた。その姿が木立の向こうに消えてから、あたしは守り刀を取り出した。左親指の、乾いた傷のすぐ下に刃を押し当てて血をにじませる。

「闇鷲」

呼ぶとすぐに、近くの木陰の闇が凝った。

「目を借しておくれ。行つて、あの二人を助けるんだよ」

言いながら、あたしは目を閉じてまぶたに薄く血をつける。闇鷲が飛び立つと、その目が見ているものが、まぶたの内側に映った。

四 後ろ足で砂を（２）

目のくらみそうな高みから、峠を見下ろす。木立の間にくねくねと走る道を追うと、じきに、坊やの小さな背中が見えた。首を伸ばすと、先にある橋の様子も分かった。

ひととき丈高い杉の木を見付け、その梢に舞い降りる。吊り橋のこちら側には番小屋があつて、その前で雷火が何人かの男に押さえ付けられた上、殴られていた。あの馬鹿、あつさり見付かつちまうなんて、何やつてるんだい！

ああ、くそ、あのならず者どもだ。あたしたちのことを、番人に知らせに行つてたんだろう。雷火も運の悪いことだよ。あ、痛っ！ また殴られた。うう、見ていられないよ。

闇鷲が翼を広げ、甲高い声で大きく一声鳴く。ならず者どもがぎくりとして、こちらを振り仰いだ。ようし、よく見ておいで。

枝を蹴り、滑るように舞い降りる。引っ掻き、つつき、髪と一緒に頭の皮をむしり取る。そら、こつちだよ！

おっと危ない。男の手をかわして、空高く飛び去る。用心、用心。ちらつと坊やの様子を見ると、騒ぎに紛れて上手く忍び寄っていた。なかなかやるじゃないの。

と、闇鷲の意識があたしを押しつけるようにして、強引に頭を別の方へ向けた。直後、首をかすめて矢が飛び去る。しまった、こいつらは弓矢も持つてたんだった！

慌てて飛び立ち、また襲いかかる。矢に狙われないよう、せわしなく動きを変えて。

今度は翼をかすめて矢が飛んで行く。闇鷲がこの場を離れたがつているのが分かった。もうちよつと、もうちよつと頑張っておくれ。もうちよつと……

「――！」

衝撃と、焼けるような痛みが肩に牙を立てた。視界がぐるっと回

る。駄目だよ、このまま落ちちゃあいけない！

無理に言うことをきかせ、危ういところで羽ばたいて再び舞い上がる。けれど、もう高くは飛べなかった。ならず者どもの目から隠れられそうな茂みを目がけて、落ちて行く。

ばたばたと人間の足音がそこいらに迫る。仕方ない、闇鷲に出来るのはここまでか。

あたしが闇鷲を帰らせようと口を開きかけた、その時だった。

闇鷲を通して、ものすごい悪寒が伝わってきた。闇鷲の羽という羽が全部逆立ち、体がぶわっと膨れるのを感じる。あたし自身も、鳥肌が立っていた。

なんだいこれは！

ならず者どもも、それに気付いたようだった。足音が止まり、ためらって、それからそろそろと遠ざかっていく。

闇鷲が首を伸ばし、様子を窺った。

木々の間を通して、かろうじて吊り橋と番小屋が見える。番小屋の前では雷火がならず者の一人に、地面に押さえ付けられている。

その顔が恐怖にひきつっていた。あいつもこの悪寒を感じたんだね。

その正体は……吊り橋の向こうにわだかまる、黒い影。

「お逃げ！」

あたしは叫んでいた。それは闇鷲の口を通すと、金物を引っ掻くような凄まじい警告の声に変わった。近くの鳥たちが皆、いっせいに飛び立って逃げ去る。警告の通じないならず者どもは、むしろ逆に、刀を構えて番小屋の方に集まっていた。馬鹿な奴ら！

ああ、坊やはどうしたろう。早く雷火を助けないと、あのまま倒れていたんじゃない、影に吞まれてしまう。

吊り橋の上を、暗い影がじわりじわりと進んでくる。闇鷲の恐れがあたしにも伝わってきた。ならず者の一人が、雄叫びを上げて無謀にも斬りかかっていく。けれどももちろん、何にもなりはしなかった。男が闇の中に呑み込まれ、見えなくなる。そのまま、出てこない。やがて、暗がりを通り過ぎた後ろでぐらりと人影が傾ぎ、谷底

へ落ちて行つた。

いけない。あれは良くないものだ。

妖じゃない。もっと暗くて力の強い……恐ろしいもの。

齒の根が合わずにカチカチ鳴り始める。

ならず者どもも、自分たちが何を目に行っているのか、ようやくと悟つたらしい。じりじりと後ずさり、次いで我先に逃げ出した。

けれど、影は素早かった。まるで鞭のような細い影がしなり、飛びかかつて、男たちを引きずり倒す。狂つたような悲鳴が次々に上がつては、ぷつりと途切れた。

ああ、雷火はどこだろう？ 坊やは、あの二人は無事なんだろうか？

ここからじゃ見えない。助けに行かないと。闇鷲がよろよろと立ち上がる。と、その目に、雷火の背中が飛び込んできた。

良かった、無事だ！

雷火は吊り橋に向かって立ち、両手を前に突き出していた。

「我が名は雷火」

男たちの暴れる音や悲鳴が飛び交う中で、不思議とその声はよく通つた。

「雷は天地を貫くいかずちなり」

空気が奇妙に焦げ臭くなり、辺りでパチパチと小さな火花が散り始める。

「この名において命ずる、雷撃招来！ 落ちろこん畜生！」

やけっぱちな命令の直後、轟音と共に真っ白な光が輝いた。

闇鷲の目が眩む。ややあつて視力が戻った時には、目の前の光景はすっかり様変わりしていた。

あの影は跡形もなく消え、吊り橋は完全に焼け落ち、番小屋も黒焦げになっていた。ならず者どもは、逃げた奴がいるのでなければ、全員のびちまっていた。単に落雷のせいで目を回したのか、それとも影に魂を食われちゃったのか、それはわからないけれど。

雷火がよろけて座り込んだところへ、坊やが飛び出して行くのが

見えた。

やれやれ、これで安心だ。あたしはふうつと息をつくつと、闇鷲を帰らせてやった。

しばらくして、あたしの所に二人が戻ってきた。雷火は坊やに肩を支えられて、よたよたしている。

「おやまあ、ぼろぼろだねえ」

あたしは思わず苦笑した。直に自分の目で見ると、ひどい様だつてことがよく分かる。顔は殴られて腫れ上がっているし、よくあれで法術を使えたもんだよ。うるせえ、と雷火は言い返したみたいだけど、その言葉はくぐもつて、よくわからなかった。

「二人とも、無事で良かったよ」

安心すると、不覚にも目頭が熱くなった。ああもう、嫌だよ、みつともない。

あたしは慌てて顔を背けたけれど、その寸前、雷火と坊やの驚いた顔がちらつと見えた。余計なことを言われない内に、あたしは急いで続けた。

「こんな所にあたし一人でおっぱり出されちゃ、行くも帰るも出来やしないからね。もつとも、そのざまじゃあ、荷物持ちも出来そうにないけどさ」

返事はない。かわりに、押し殺した笑いがこぼれる。嫌な奴ら！そっぽを向いて膨れているあたしには構わず、二人は荷物のところへ行つてこそこそやりだした。傷の手当をするんだろつ。

しょうがないねえ。あたしはむつつりしたまま、自分の荷物を引き寄せた。

「お待ち。巫師の薬はそんじよそこの物より、よく効くんだよ。あたしの足も湿布をしなきゃいけないし、ついでだから、あんたの手当もしてあげるよ。こんなすごいご面相のが連れだなんて、どうにも気が悪いからね」

「ほーう。ほりゃ、ろつも」

雷火が厭味っぽく返事をしたけれど、どうしたって滑稽にしか聞こえない。あたしは思わず盛大にふきだしてしまった。しゃべると傷に響くらしく、雷火はしかめっ面で頬つぺたを押さえている。痛いんなら黙ってりゃいいだろうに、馬鹿だねえ。

あたしが雷火の傷に薬を塗って包帯を巻く間に、坊やは雪白と黒鉄を犬の姿に戻し、さんざん舐めまくられていた。あたしは手を動かしながら、何げない口調で言った。

「闇鷲の目で見たんだけど、坊やにとり憑いてる影ってのは、あれだね。そう言やあんたたちと出会った晩にも、里の外に気配がしてたよ。あの時はそんなに恐ろしいもんだって感じはしなかったけどね」

「おまへ、なんれ知って」

雷火が言いかけ、痛みに顔をしかめる。仕方なく雷火は無言で、責めるように坊やを睨んだ。振り向いた坊やの顔は、暗くうち沈んでいた。

「うん。俺が話したんだ。……綾女さんには、あれが何なのか分かりませんでしたか」

「はつきりとは分からないね。でも、あれは『災い』じゃないよ。妖でもない。そんな感じとは違ったね。強いて言うなら、怨霊が近いかも知れないけど」

「誰かの祟りだったのか？」

ふがふが、と雷火がどうにか言った。あたしはちよつとこめかみを押さえて、あの時の感覚をじつくりと思い出してみた。闇鷲の目を通しているから、本当のところどうなのか、確信は持てないねえ。でも……

「あたしには、そんな風に見えたね。あれは……人が生み出したものだよ。海や山に元からいるもんじゃない」

あたしが言くと、坊やがさつと青ざめた。そのまま、誰も口をきかない。沈黙に耐えられないのか、サトリがこそこそ前に回って来た。

(黙つといで)

あたしはぴしゃりと先手を打ち、坊やの様子をじっと見つめる。きゅつと唇を噛んで、地面を睨みつけているその横顔を。

「分かっているんだろう？　ねえ、真理」

名前で呼びかけると、坊やはびくりとして顔を上げた。そして、ゆっくりうなずく。

「うん。あれは……俺自身の影なんだね」

「なんだって？」

雷火が素っ頓狂な声を上げた。あたしは片手を振ってそれを黙らせる。

「それだけでもないようだけどね。ただ、坊やの影の部分と深く結び付いてるのは確かだよ。あんたはあの時、あのろくでなしどもを全員、指先から一寸刻みにごりごりすり潰してやりたいと思ったんだろっ？」

「そこまでは考えてないよ」さすがに坊やは鼻白む。「死んでしまえとは思ったけど」

言うてから、自分の言葉に怯んだように息を飲んだ。坊やは少しためらい、記憶を辿るように視線を宙に向けて続けた。

「……そうしたら、何か……おなかの辺りで何かが動いたような感じがして、あの影が吊り橋の向こうに現れたんだ。俺が呼んだみたいに」

「おい、それじゃあ豊平での時もそうだったのか？」

雷火が口を挟んだ。どうやら、影が人を襲ったのは今回が初めてじゃあないらしいね。

「あの時は、今回ほどはつきりとは感じなかったけど。でも、ものすごく腹を立てたのは同じだよ。俺に力があつたら、こんな奴らみんなやつつけてやるのに、って。俺がちゃんとした神官戦士だったら、俺が……子供じゃなかったら」

つぶやくように言うてから、坊やは顔を上げて雷火を見た。

「あの時おじさんは『天罰だ』って言ったよね。本当にそうだった

らしいのに、って思ったよ。俺の願いを神々が聞き届けて下さったんだったら、ってね。でも、あの影は決していいものじゃない、つて、俺には分かった。なんだか分からないけど、あれは良くないもので……俺の願いが、あいつに力を与えてしまったんだ。きっとそうだよ」

そこまで言つて、坊やは黙り込む。あたしも、何をどう言ったらいいか分からなくて、こつそりため息をつくしかなかった。

暗い願いが、影に力を与えた。たぶん、そういう事なんだろう。あの影が坊やの心だけで作られているとは思えないから、何か本性があるんだろうけど、今、あの影を引き寄せているのは坊や自身だ。どうやったら追い払えるのか、清められるものなのかどうかも分からないんじゃないじゃあねえ……。

その時、雷火がふーつとため息をついた。

「んじゃまあ、もつと気合を入れて『しるし』を探さなきゃならねえな」

「……は？　なんでそうなるんだい」

あたしが変な顔を見ると、雷火はとぼけた表情で頭を掻いた。

「真理があゝの影に力を与えたってんなら、影から力を奪うにしろ、追っ払うにしろ、結局こいつが自分でやらなきゃなんねえってことさ。てことは、こいつが一人前になるのが一番の早道ってことじゃねえのかい」

「あ……」

坊やとあたしの口から、同時に声がもれた。ああ、なるほどね、そういう事かい。

「つつてもなあ、そこらを引っ掻き回して落ちてる銭を拾うのとはわけが違うからよ、いくら気張ったって見付からねえもんは見付からねえんだよなあ。『しるし』探しと並行して、神官戦士の修行かなんかも、いっぺんきちつとやり直した方がいいんじゃないじゃあねえか」

「そうだね」

坊やが少し、肩の力が抜けた様子でうなずいた。

「雷火、あんたそう簡単に言うけどね、『しるし』は坊や本人が見なきゃわからないんだろ？ 坊やが神殿に籠もって修行してる間、あたしらに代わりを探すってわけにもいかないんだから、両方いっぺんってのは無理な話じゃないのかい」

あたしだってこんな事、水を差すように言いたかないけど、でも無茶だよ。

そう思ったのだけど、坊やの方は随分と気が楽になったみたいだった。

「でも、とにかく目標は出来たよ。峠を越えたら、少し大きい神殿を探して行ってみる。そこでもう一度、初めからやり直してみるよ」
「そうかい。それじゃ、あたしは闇鷲を飛ばして、あんたの影にかかりそうな事を調べといてあげようかね。どうせ次の里でも占いをやるぐらいしかないので、暇だしさ」

「なんだよ、おまえがそこまでする義理はねえだろう」

雷火が嫌そうな顔をした。ああもう、いちいちこの男は！

「あんたがつべこべ言うことじゃないだろ、あたしの勝手さね。あんたこそ、坊やと別れたら一人で仕事が出来ないんじゃないのかい。おまんまの心配でもしてるんだね」

「なんだとお！？ おまえ、俺の法術を見てたくせに、よくも言えたな」

「あれじゃ何もかも黒焦げにしちまうだけじゃないか。大雑把なあんならしいよ」

「あのなあ！ くそ、言つとくがな、俺ア刀の腕だつてかなりのもんなんだぞ！」

「はいはい、魚が大根でも切ってるんだろ」

「大事な月華をそんな事に使えるか！ 今に見てる、目の前で大物を仕留めてやるからな、そんな時になつて吠え面なくなよ！」

と、言葉が切れたところで、坊やが「あのう」と口を挟んだ。揃って振り向いたあたしたちに、坊やは曖昧な顔をして言った。

「さっきから、サトリがけたけた笑い続けているんだけど」

「え？」

坊やが指さした方を見て、あたしは眉を寄せた。いつも肩の辺りに居座っているサトリが、手の届かない場所まで離れて、転がり回って笑いこけているじゃないか。

ちよつと、何をするつもりだい？

あたしの考えが読めたんだろ。サトリはくると体を回して起き上がり、にたつといやらしく笑った。耳まで裂けそうに広がったその口が放ったのは、まさかの一言。

「夫婦喧嘩は犬も食わない、とさ」

「……っ！」

顔が真っ赤になるのが分かった。

「サトリっ！」

あたしが叫び、雷火が飛び出した時には、もうサトリは茂みの中に逃げ込んでいる。雷火はサトリがいた場所を、腹立ち紛れにがすがす踏ん付けていた。

ああもう、ああもう！ だからサトリなんて！

お互い顔も合わせられずにいるあたしと雷火の後ろで、坊やが二匹の犬に向かつて話しかけるのが聞こえた。

「……今の、おまえたちの考えかい？」

お返事代わりに、黒鉄が楽しげに一声吠え、雪白はフーッとため息をついた。

（綾女之章・終）

一 噂の主

参 タスク 翼之章

—

しばらく前から、その噂は僕のいる神殿まで届いていました。

不吉な黒い影を連れて歩く少年がいる。みすばらしい神官服を着ているけれども、やる事は賞金稼ぎと同じ。しかも、時にはその恐ろしい影を操り、人を殺めるのだ、と。

里の人や神殿の先輩からその話を聞く度に、僕はぞっとして震え上がっていました。まさかその噂の主と出会うことがあるうなどとは、思ってもみませんでした。

——その日までは。

僕は裏参道の雪をかいていましたが、若い女の声を目に、ふと手を止めました。

「いいかい、ここも駄目だったら、諦めるんだよ。約束だからね」
それに続いて、柄の悪い男の声。

「おまえもしつこいな。こいつが目指してんのは、お偉い神官様なんだぞ。巫師なんぞに預けられるかよ」

巫師だって？ まさか、巫師が境内に入ろうとしているんだろうか。

僕はぎよつとなつて雪かきをその場に放り出すと、急いで階段を下りて行きました。参道が曲がるところまで来ると、僕は足を止めて木の陰に隠れました。

そこから、鳥居の下にいる怪しげな人影が見えました。大人の男女と、僕と同じぐらいの年頃の少年。それに、白と黒の……あれは、犬？ それとも妖？

「あのねえ、そうは言っても仕方ないじゃないか。その神殿の方が

坊やを追いつてんなら、神殿の世話なんか必要ないさね。あんたは巫師が嫌いだろうけど、少なくとも坊やを見捨てるほど薄情じゃないよ」

「俺は神官も巫師も大嫌いだ！ そうじゃなくて、俺は、こいつが巫師で食ってけるとは思えねえから、駄目だつてんだよ」

「二人ともそのぐらいにして、とりあえず行ってみようよ」

苦笑まじりに言ったのは、少年の声でした。大人ふたりは鼻白んだ様子で顔を見合わせ、それから男の人が「そうだな」とつぶやいて、荷物を背負い直しました。女の人は、肩から何かを払いのけるような仕草をして、やれやれと鳥居を見上げました。

どうしよう、やっぱり入って来る気だ。あの中の誰かが巫師なら、追いつた方がいいのかな。巫師は邪悪なものだって言うし……でも、本当に悪いものなら、招かれない限りは入って来られないはずだけど。

「ここは広いだけじゃなくて、随分と神気が強いし、ちょっとは期待してるんだけどね」

女の人が言いました。期待って、何を？ なんだか嫌な感じです。そうだ、とにかく明主様にお知らせしよう！

僕は急いで木陰を離れ、今しがた下りてきたばかりの参道を駆け上がりました。けれども、ところどころ雪で凍っている階段を、慌てて登るものではありません。

「あっ！」

しまった、と思った時には遅く、僕の体は宙を飛んでいました。足を滑らせて、後ろ向きに落ちてしまったのです。

もうだめだ！ 僕は思わずぎゅっと目を瞑りました。けれども、石段にガツンと頭をぶつけるかわりに、背中がドサツと何かに当たって止まりました。

「おい、大丈夫か？」

下の方から声がして、僕は恐る恐るまぶたを上げました。そして今度は、いっばいに目を見開いてしまいました。犬だ！ 二匹の犬

が、僕を支えてふんばってる！

「大丈夫なら、いつまでも乗っかってないで自分で起きろよ。わんころどもが潰れっちまうだろうが」

言葉と同時に、大きな手が僕の腕を引っ張り上げました。正直、こんなに汚なくて乱暴そうな人に触られたくなかったのですが、助けてもらったのに、そんな事は言えません。慌てて自分で立ち上がると、僕はドキドキしながら、彼らを見回しました。

「坊や、怪我はないかい」

女の人が言いました。近くで見ると、顔立ちはとても優しくそうな人でした。巫師とか何とか言っていたのは、僕の勘違いだったのかも知れません。

「は、はい。ありがとうございます」

僕が慌ててお礼を言つと、女の方は笑って首を振りしました。

「礼なら、雪白と黒鉄に言いなよ。あたしらじゃ、間に合わなかつたろうからね」

「あつ、はい……あの、ありがとうございます」

馬鹿みたいな気はしたけど、僕は言われた通り、二匹の犬に頭を下げました。二匹とも大きくて強そうで、でもやっぱりちよつと、僕を受け止めたのが痛かったのか、背中を気にしているようでした。僕は三人の顔をゆつくりと順に見ながら、急いで考えを巡らせました。

招かれなくても鳥居をくぐれたってことは、この人たちは、鬼や妖ではありません。でもやっぱり、境内のどこでもご自由にどうぞ、と言つのは、危ない気がします。

そこで僕は、精一杯、落ち着いた態度を装って言いました。

「僕は翼タスク、この神殿の書士見習いです。本当にありがとうございます。ここには医師もいますから、念のためにこの二匹を連れて行かれてはどうでしょう。その間に僕がご用の向きを伺って、明主様にお知らせします」

ふう、なんとかちゃんと言えた。三人は何事か相談するように顔

を見合わせましたが、その表情はどうやら、僕が怖がっているのを、ちゃんと分かっているようでした。

「それじゃあ、よろしく願います」

少年がきちんとした姿勢で、深く一礼しました。

「俺の名前は真理です。深谷の神殿で侍士の位を授かりました。『しるし』を探す旅に出されましたが、わけあって、この神殿で一から修行をやり直したく、お願いに上がりました。そのようにお伝え下さい」

侍士！？ まさか、こんなみすばらしいのが神官戦士の見習いだなんで！

この神殿にも侍士や戦士はいますが、ここまでなりが汚くて、荒んだ気配をまとった人はいません。いくら、僕ら書部の人間より荒っぽいと言っても、彼らだって神官なんですから。それに、付き合う人だって……。

そうは思ったけれど、僕はなるべく平気な顔で言いました。

「わかりました。それで、お連れの方々は？」

「俺は雷火。流れ者だよ。こいつとはちよつとした縁で道連れになつてね。ついでだから、刀を清めて貰いてえ」

そう言つて彼が腰の辺りを叩いたので、僕は初めて、相手が刀を帯びていることに気付きました。このまま通しても大丈夫かな？

不安が顔に出てしまったらしく、雷火さんは皮肉っぽく笑いました。

「心配なら、ここでこいつを預けてもいいぜ。まあ、さんざん妖を斬つて穢れが溜まつてるから、おまえさんは触りたかねえか知らないがね」

からかわれて、僕は顔がカツと火照るのを感じました。

悔しい！ どうして、こういう人たちはすぐ、僕らみたいな文筆の徒を馬鹿にするんでしょう。こつちを見下した、「どうだ、おまえには出来ないだろう」って態度が厭味だったらありやしない。

けれど実際、僕はその刀を持つ気にはなれませんでしたから、ム

ツとした顔でせいぜい冷たく言い返してやりました。

「いいえ、そのままお持ちになって結構です。大切な商売道具ですよ。」

反撃成功。厭味な賞金稼ぎは、渋い顔になって黙りました。横で女の人が苦笑し、優しい口調で言いました。

「余計な一言を付け足すからだよ、自業自得さね。ああ、あたしは綾女。占い師でね、成り行きで『しるし』探しに付き合ってるお節介さ。」

ああ、きつと放っておけなくて世話をしているんだろうなあ。いい人みたいだし……お気の毒に。僕はぺこりと頭だけ下げて、
「それでは、こちらへ」

三人を医寮へと案内して行きました。道すがら、僕の頭にあつたのは、前から何度も聞かされている、あの恐ろしい噂のことばかりでした。みすばらしい神官服を着た少年。賞金稼ぎ。これで、振り返ったら黒い影がついて来ていた……なんてことになったら大変だから、僕はずっと、後ろを見る事が出来ませんでした。

三人と二匹を医師に預けると、僕は肩の荷が下りたように感じてほつと息をつきました。それから、大急ぎで拝殿へ走り、ちょうど夕のお勤めが終わって出て来られた明部の人たちをつかまえました。明主様に火急のお話が、と言うと、僕の様子からただ事でないと判断されたのか、すぐに奥の院に通されました。ここは明主様をはじめ高位の方々の住まいで、僕のような見習いは、普段は立ち入ることが出来ません。

明主様はお部屋でくつろいでいらっしゃいましたが、僕がこの次第をお知らせすると、いつものゆったりとした口調で、けれども厳しくたしなめられました。

「翼、その方々はおまえを助けて下さったのだろう？ 身なりが汚いなどという理由で、そのように悪しざまに言うものではないよ。私からもお礼を申し上げたいし、何やら事情もありのようだから、犬の手当が済んだら茶寮にお通ししなさい」

「わかりました」

あまり気が進まなかったけど、ここへお通ししなさい、と言われなかっただけ、もしかかもしれません。あんな汚いなりでこの部屋に上がられたら、後が大変です。

僕が少々医寮に戻ると、三人は犬を囲んで待っていました。僕の顔を見て、あまりいい返事ではないと思ったらしく、彼らはさっと表情を曇らせました。

確かに、いい返事じゃありません。でもそれは、僕にとって、の話。

「明主様がお会いになるそうです」

そう伝えると、三人はびっくりした様子で目を丸くしました。

「本当かよ？」

「まさか、あたしたちもかい？」

信じられない様子の雷火さんと綾女さんに向かって、僕は「はい」とうなずきました。真理は何か覚悟を決めたように、きゅつと唇を引き結んで黙っています。

確かに、何か事情がありそうですが、とにかく明主様にお任せすれば、間違いはないでしょう。僕はただ身振りで「こちらです」と示して、歩きだしました。

茶寮はお客様をもてなす為の小さな庵で、僕たち神官の食堂と渡り廊下でつながっています。二匹の犬は誰にも命じられない内に、食堂の玄関脇に並んで行儀よく座りました。

僕が驚いていると、二匹の頭をなでていた真理が振り返って言いました。

「ここで待たせておいて、構いませんか」

「えっ？ あ、はい。もちろん」

僕はしどろもどろに答え、なんだか薄気味悪く思いながら二匹を見つめました。まるで、ここが神殿で、自分たちの居場所は決められていると分かっているみたいです。どうにもただの犬ではないように思われてきました。

ともあれ、明主様をお待たせするわけにはいきません。僕は三人を中へと案内しました。そろそろ夕餉の時刻でしたから、大勢の人とすれ違うことになりました。もちろん誰も、何だそいつらは、と言ったりはしません。けれども、不審げな、あるいは物珍しげなまなざしの痛いことと言ったら、走って逃げ出したくなるほどでした。幸い、明部の人が茶寮の前で待っていて、怪しいお客を引き受けてくれました。

「ご苦労様でした。翼、おまえはもういいから、皆と夕餉にしておいで。また御用があればお呼びになるだろう」

「わかりました。それでは、失礼します」

お役御免になり、僕は心底ホッとして頭を下げると、一目散に食堂へと退散しました。

配膳所で自分の食事を受け取って、いつもの席に座ると、隣にいた白露^{ハクロ} 先輩がぼそつと言いました。

「雪かき」

「あつ！」

そうだった！僕は慌てて、お椀を取り落としそうになりました。裏参道に雪かきをほうり出したままだ！

僕が腰を浮かせると、先輩は苦笑して座るように手で示しました。「片付けておいたよ。いつまで雪かきしてるつもりだろうと思って見に行ったら、いないんだからなあ。心配したぞ」

「ごめんなさい。階段から落ちて、客人の犬を下敷きにしてしまつて……それで、医寮に行ったり客人を案内したりしてたんです」

「ああ、見たよ。ちよつと不気味だねえ」

白露先輩はすけずけと言って、味噌汁をすすりました。

先輩はもう一人前の書士ですが、生まれは『貧乏役人の次男坊』なのだそうです。書士になったのも、『外聞が良くてそれなりに食べて行ける仕事だから』で……つまり、神官になりたかったわけではないのだ、と、自分で明言しています。

僕らにとって神殿の仕事は、それがどんなに些細な事でも、大切

なおつとめです。でも先輩は、神殿の仕事も役人の仕事も同じだ、などと放言して憚りません。そんなだから、先輩の事を好ましく思わない人も大勢いるのですが、先輩自身はやっぱりそんな事も、まるきり気にかけていないようでした。

僕は時々、そんな先輩が嫌になるのですが、でも、こんな風にはつきりものを言ってくれる所は、なんだかとても頼もしく思えます。だから僕は、思い切つてあの噂のことを言ってみました。

「先輩が言つてた、恐ろしい影を連れた少年……あれみたいに思えますね」

「なんだ、おまえさん、あれを本気にしてたのかい？」

「えっ？ う、嘘だったんですか？ でも、あの話は里の人もしてましたよ」

僕がうるたえると、先輩はすまし顔で答えました。

「噂なんて、八割は嘘に決まってるだろう。人から人へ伝わるうちに、どんどん尾ヒレがついていく。いい加減で無責任なものさ。もし今日のお客人が噂の正体だとしたら、合ってるのは『神官服を来た子供がさすらっている』って所だけだよ」

そう……かなあ？ 僕にはなんだかすごく怖く思えたんだけど……。

でも、そう言ったらきつと先輩は、噂が頭にあつたから怖く思えたただけだ、と言うでしょう。だって先輩は、直接あの人たちと言葉を交わしたわけじゃないから。

僕が黙り込んでいると、先輩は独り言のようにつぶやきました。

「しかし、何者なんだろうね。前にいた神殿を追い出されでもしたのかな」

「あつ、そう言えば、そんな事を言っていましたよ！ 神殿の方が追い出すなら仕方ない、とか何とかって。きつと、神域を穢したとか……」

勢い込んで言いかけた矢先、先輩が僕の鼻に指を突き付けたので、僕はぐくんと言葉を飲み込んでしまいました。

「ほら、そうやって勝手に思い込みで話を作るだろう。だから、噂は信用できない、って言ってるんだよ」

「……すみません」

ちえつ。僕はなんだか馬鹿にされた気がして、その後はもう、むつつり黙って食べることに専念しました。

それにしても、本当に、彼らはいったい何者なんだろう？ 綾女さんは悪い人じゃなさそうだったけれど、でもやっぱり、占い師なんてのはちよつと胡散臭いし……。

あれこれ考えながら食事を終えてお膳を片付け、いつもと同じく書部寮に戻ってその日の仕事をまとめて。そうしている内に、僕はいつの間にか怪しい客のことを忘れてしまいました。昨日も一昨日もその前も、ずっと同じ場所で同じように、帳面をつけたり、書状を書いたり取りまとめたり、お金の勘定をしたりしているので、何も変わったことなど起きなかったような気になっていたのです。

おかげで僕は、その夜はいつものように、ぐっすり眠ることができました。明日から、そうはいかなくなる——なんて、夢にも見ずに。

二 少年ふたり（１）

二

翌日、僕がいつものように白露先輩のところへ行くと、先輩はまるきり仕事にかかる準備をしていませんでした。

「お、翼^{タスク}、来たか。それじゃあ見に行こう」

「は？ 見に行くって、何を」

「いいから、こっちこっち。明部のお堅い連中以外は、みんな見物に行ってるし、おまえさんも行かなきゃ乗り遅れるぞ。ほらほら」

「あの、さっぱり話が見えないんですけど」

おたおたする僕にお構いなく、先輩は僕の腕を引つ張って行きま
す。僕は仕方なく、小走りになって先輩の歩調に合わせました。ど
つちみち、僕は見習いなので、先輩がいなかったら、たいして仕事
は出来ません。

「昨日の客人だよ」

白露先輩はようやっと僕の腕を離して言いました。

「腕試しをするらしい。修行をやり直したいって言ったって、どの
程度のことを修めたのか見ないことには、ってんでね」

「そんなの、僕は別に見たくありません。先輩だって、昨日やり残
した仕事があったでしょう？ 遊んでる場合じゃ……」

「つべこべ言わないの。ほらもう着いた」

強引に連れ込まれたのは、法部の人たち、つまり神官戦士たちの
稽古場でした。板張りの、広くてがらんとしたお堂です。いつもは
大勢の戦士や侍士を、法主様や法師の方々が指導しているのですが、
今はつめかけた見物人でいっぱいです。

ざわめく人垣の中央で、真理が竹刀を手にして立っていました。
新しい服をあてがわれ、どうやら湯浴みまでさせてもらったようで、
昨日に比べると随分……なんというか、まっとうらしく見えました。

「緊張すんなよ、真理。適当に手抜きしてやりやいいんだ」

ふてぶてしい言葉で励ましたのは、案の定、雷火さんでした。こちらも小ぎれいになって、少なくとも見かけだけは、里にいる普通の若衆のようでした。その横から綾女さんも何か言っていました。僕のところまでは聞こえませんが。

二人に励まされた真理はにつこりしてうなずき、しっかりした足取りで進み出ると、法師の一人と向き合いました。

二人が一礼して竹刀を構えた途端、場内は水を打ったように静まり返りました。

しばらく二人は睨み合っていました。やがて法師の竹刀が揺れ、誘いをかけました。その後が続いて起こったことは、とても僕の前にはとらえきれませんでした。

打ち込み、払い、払われたようにみせかけて攻めに転ずる。

遠かったせいもありますが、動きが速くて、何がなんだか分かりませんでした。

ただ、法師を相手にこれだけまともに打ち合えるということは、侍士としては信じられないほどの腕前なんだ、ということは明らかでした。

結局は法師が勝ちましたが、誰もが驚かされた証拠に、終わった途端にわつとどよめきが上がりました。僕も興奮して、隣の白露先輩をがくがく揺さぶってしまいました。

「すごいですね！ あんなに強いのが侍士だなんて、嘘ですよ。あれなら立派に一人前の戦士じゃありませんか、ねえ？」

「はいはい、そんなに揺すらないの。袖がちぎれるだろう」

「あ、すみません、つい。それにしてもすごいなあ、僕とそんなに変わらない歳に見えるのに。いったいどこで……」

「どこで何をしてたんだろうね」

先輩がとばけた口調で、僕の言葉を引き取りました。それを考えると、また僕の胸に暗くて冷たいものがじわつと広がりました。

その後、剣術だけでなく、棒術や体術、それに肝心の法術なども

一通り試されましたが、どれもその腕前は、充分に一人前として通
用するように思えました。ただ、僕はもうそれを、単純に「すごい、
すごい」と喜んで見物することは出来ませんでした。

これで終わりだという合図に、法主様がパンパンと手を鳴らされ
たので、見物人はそろそろと退散し始めました。

「先輩、僕らも戻りましょう」

あまり長居したくなかったので、僕は白露先輩を急かしたのです
が、先輩は逆に、僕の肩を押して法主様の方へと歩きだしました。

「ちよつと、先輩、どこへ」

「逃げなさんな。俺はね、おまえさんを連れて来るように言われた
んだよ。さ、行こう」

「ええっ？」

嫌な予感がして、僕は悲鳴のような声を上げました。帰りがけの
見物人が、何人かきよんととして振り返りましたが、誰も助けては
くれません。白露先輩は人波に逆らって、僕をぐいぐい押して行き
ました。

法主様は真理と何事か話し合っておられました。僕の様子を見る
と、「ああ」とにつこりして手招きされました。

「翼や。明主様のお話では、そなたは昨日、彼に助けられたそうだ
ね」

「はい。正確には彼の犬に、ですけど」

僕が言うと、床に座っていた雷火さんが鼻を鳴らしました。僕が
むつとしてそちらを見ると、彼はぷいと明後日の方を向いてしま
いました。厭味な人だ！

法主様はまるで気にした様子もなく、話を続けられました。

「まあそれでも、恩があることに変わりはない。この神殿で歳が近
いのはそなただけであることだし、真理の相談に乗って、出来るこ
とは何でも、助けてやりなさい」

嫌です。——と、言えたらどんなにか良いでしょう。歳が近いっ
ていうだけで、誰でも友達になれるわけじゃありません。

けれども、僕には法主様の言い付けを拒むことなど出来ませんでした。そんなことをして神殿から追い出されでもしたら、両親に会わせる顔がありません。だから僕は「わかりました」とうなずきました。

僕の返事で安心したように、雷火さんが腰を上げました。

「それじゃあ、後は頼みますぜ、法主様。俺は月華を受け取ったら、ふもとの里に降りますんでね」

良かった！ このままこの人まで居座るつもりかと思ったけど、いくら賞金稼ぎでもそこまで図々しくはなかったみたいだ。

僕がほつとしたのと対照的に、真理は心細げな顔をしました。雷火さんが苦笑して、その頬を軽くぴたと叩きました。

「そんな顔すんなって、どこにも行きやしねえよ。出来るだけこまめに様子を見るから、誰かにいじめられたら言うんだぞ。俺がぶちのめしてやっからな」

「おじさんこそ、里で悶着を起こさないようにね。俺がここに居辛くなるからさ」

真理が憎まれ口を返したので、雷火さんは「この餓鬼」と真理の頭をくしゃくしゃにかき回しました。やめてよ、と言いながらも真理は嬉しそうに笑っています。そうしていると、なんだか普通の子供みたいで、ちっとも怖いところなんかないように見えました。

「心配しなくても、あたしがちゃんと見張つとくよ」

綾女さんも笑って言うつと、真理の肩にぽんと手を置きました。

「深谷から返事が来たら、すぐに知らせに来るからね。闇鷲アンシがいなからって、お勤めを怠けるんじゃないよ」

「ここには別のがいるかも」

真理は小声で、おどけて答えました。

何の話だろう？ 何がいるって？

僕が不安になってそらに目を走らせると、気が付いたらしく、綾女さんがごまかすように咳払いしました。

「それじゃ、あたしらはここで。また来るけど、あんたはあんたで、

頑張るんだよ」

「はい」

真理はうなずくと、姿勢を正して深々と頭を下げました。そのさまは清々しくて、ここに来るまでにどこで何をしていたにせよ、神殿で修めたことがしつかり身につけているのが分かります。……

それなのに、どうして僕は彼が怖いんだろう？

ともかく、二人が帰ってしまうと、真理はくるりと僕に向き直りました。

「早速だけど、頼みがあるんだ」

「なんですか？」

僕は嫌々ながら答え、それからちらつと後ろの白露先輩を見やりました。

「僕にも仕事があるので、何か用があるなら、先輩の了承を得てくださいね」

先輩も先輩だ。いつだって、僕が手伝わないと一日分の仕事が終わらないのに、その僕をこうもあつさり生け贄に差し出すなんて、ひどいや。

「ああ、俺の都合なんて気にしないでいいよ。翼、名前の通りに助けてやんなさい。そうそう、真理君とやら。良かったら俺も何か手伝うから、遠慮せずに言うように」

ああもう、先輩ときたら、またそんな安請け合いをして……。調子がいいんだから。

僕がため息をつくとき、真理はまるで同情するみたいに苦笑しました。僕の気持ちが分かるとでも言うんだろうか？ 冗談じゃない。ますます不機嫌になった僕を見て、真理は笑みを消してしまいました。

「……この神殿には、各地の神殿の建立に関する記録も残されているって聞いたんだけど、それを見せてほしいんだ。書部にあるんだろう？」

平坦な口調で言われて、僕はまたちょっと背筋が寒くなりました。

けれども、怖がっていると思われなくなかったので、こつちもせいぜい偉そうに言い返してやりました。

「もちろん、あります。この大楠の神殿は由緒正しい、歴史ある神殿ですから」

「そうらしいね」

真理はまるで感動した風もなく、ほとんど切って捨てるように言いました。僕が由緒の説明をするのを、先回りして止めたのかもしれない。神官のくせに。

「まあ、つまらない話は止して、書部寮に行こうか」

のんびり言ったのは、もちろん白露先輩です。神殿の由緒を『つまらない』なんて言う人は、ほかにいません。僕は面白くありませんでしたが、先輩には何を言っても無駄だとわかっていましたから、黙って、とびきり大きなため息をついてやりました。

この神殿は丘の上にあつて、見事なクスノキを祀っています。その昔、天子様が兵を率いてこの地に入られた時、このクスノキの精が現れて知恵を授けたので、天子様はこの地にいた妖や鬼どもをたやすく退治することが出来たのだそうです。

鬼に虐げられていた人々は、喜んで天子様をお迎えし、自分たちを救ってくれたクスノキを神として祀ることにしました。それ以来、ふもとの里は楠本という名になったとか。

僕も楠本の外れの生まれなので、この話は昔からよく聞かされています。

寮に着くと、先輩は真理を僕に押し付けて、自分は仕事があるからと、書斎にすたこら逃げ込んでしまいました。……時々僕は、本当に先輩が嫌いになります。

「記録はこちらです」

僕はまたため息をつきなくなるのを堪えて、古い記録ばかり集めた書庫へと向かいました。棚にびっしり並んだ帳面や書簡を見ると、さすがに真理も感心したようでした。

「すごいね。これ全部、この神殿の記録？」

「ほとんどがそうです。ここの神官名簿や祭事記録、それに里の人の生活に関する祭事の記録……過去帳とか。他の神殿に関する記録はこっちです」

僕が奥にある棚を示すと、真理はぎっしり詰まった背表紙をじつくり眺めてから、やおら振り向いて言いました。

「ありがとう。後は自分で調べるから、仕事に戻っていいよ」

「まさか」僕は呆れ声を上げました。「何を調べたいのか言って下さい。手伝います」

この部屋には大事な記録もあるらしいし、よそ者を一人で置き去りになんて、出来やしません。何かあったら僕の責任です。

僕の考えを読むように、真理はじつと僕を見つめました。黒い目は深い底無し井戸のようで、ことによると、本当に彼は人の心が見えるのかもしれませんが。やがてふいと視線を外して、彼は「そうだね」と冷ややかに言いました。

「お目付け役をおろすかには出来ない、か。それじゃあ、ただ見るのも退屈だろうから、手伝ってもらおうかな」

皮肉な言い方に、僕はカチンときたものの、言い返せずに沈黙しました。親切で手伝うと言ったわけじゃないのは、事実ですから。でも、それを指摘されるのがこんなに嫌なものだとは、思っていました。

「深谷に関する記録なら、どんな些細な事でもいいから見たいんだ。俺はこっちの端から順に調べるから、君はそっちから始めて」

「わかりました」

作業にかかってからも、しばらくは彼が帳面をめくる音が気になつて、目は文字の上を滑っていくばかりでした。けれどもやがて僕はどうにか、『深谷』の二文字を探すことだけに集中し、余計なことを頭から締め出しました。

深谷なんて、聞いたことがない土地です。でも確かに、昔の神殿一覧に小さくその名前が記されていました。建立されたのはかなり古いようですが、ほとんど記述のない扱いからして、規模は小さい

のでしょうか。僕はその場所に栞を挟んで、先へ進みました。

ところが、気が付くと僕はいつの間にか、全然関係のない記録を読みふけていました。文字を追っている内に、我を忘れてしまったのです。時間だけが徒に過ぎていました。

と、いきなり戸がカバリと開いて、白露先輩がひよいと顔を出しました。

「はいよ、そろそろお昼にしようか。昼餉が済んで一休みしたら、真理君は稽古場に行くようにね。諭佐ユサ 法師が待っているってさ。それじゃ、行こうか」

先輩に促され、僕は揃って食堂に向かいました。その間も真理は口をきかず、黙って自分一人の物思いに沈んでいるようでした。

ご飯と煮豆だけの簡単な食事をすませると、真理はぺこりと頭を下げて、すたすたと去って行きました。どこからか二匹の犬が主を見付け、その後を追って行きます。けれども他には誰も、真理に声をかけたりする様子はありませんでした。

「翼、おまえさん、あの子に何か言ったかい？」

先輩が訝るように言いました。僕は「まさか」と慌てて首を振りました。

「何も言つてませんよ。向こうだって、何も言わないんですから。必要なこと以外は」

「ふうん……手強そうだねえ。似たような年頃の相手なら、何か世間話でもするかと思っただが。まあ、ぼちぼちやることだね」

ぼちぼち、何を？　そう聞き返したかったのですが、答えはどうせろくでもない事でしょう。だから僕は何も言わず、肩を竦めるだけにしておきました。

そんな僕の心中が分かったのか、先輩は軽く僕の頭を小突いて言いました。

「それじゃ、今度は助手を奪われた可哀想な先輩の手伝いをしておくれよ」

「……気にしなくていい、って言ったくせに」

「何かおつしやいましたかね、翼君？」

「何も言つてません！」

——そんな調子で、二日、三日と過ぎて行きました。

相変わらず僕は、何を調べているのかも知らされないまま、ただ『深谷』の二文字を探し続け、真理は真理で、黙って帳面や書状の綴りを広げていました。

相手が何も言わないものだから、僕にはますます彼の事が不気味に思われてきました。夜な夜な夢に禍々しい影が出て来るようになり、真理の後ろ姿が見えたと思つたら、振り返つた顔が鬼だった、なんてこともしょっちゅうでした。

やっぱり、あの噂は本当なのかもしれない。今、僕の目の前にいるのは、人を大勢殺めた恐ろしい鬼なのかも。

そう思うと恐ろしくて、僕は彼と同じ部屋で黙って調べ物を続けるのが、だんだん辛くなつてきました。昼餉の時もご飯が喉に詰まるような感じがして、あまり食べられなくなつてしまいました。

一日も早く調べ物を終わらせたくて、僕は急いで読み進めました。が、焦るといつの間にか目がさまよつていたりして、結局なかなかはかどらないのでした。

二 少年ふたり（２）

そうこうして、七日ほど経った頃でした。

朝から雪が降っていたのですが、ふと部屋が明るくなったことに気付いて、僕は顔を上げました。いつの間かに雪が止んで、日が差しているのでしょうか。その照り返しで、障子が白く光っていました。真理はいつもと同じ場所で、相変わらず黙って帳面をめくっていました。辺りは静かで、ほとんど何の物音もしません。何か、とても穏やかな空気が満ちていました。

その時、どうしたはずみか、僕の口からふと言葉がこぼれました。「……影を連れた少年がいる、って」

びっくりしたように、真理がこちらを振り向きました。しまった、と思いました。が、いまさら出てしまった言葉を引つ込めることも出来ません。

「噂を、知ってますか」

どうにか僕がそう言つと、真理はまじまじと僕を見つめ、それから何とも言えない表情で目をそらしました。

長い沈黙があつて、彼がようやくぽつりと言ったのは、

「ここの明主様はいい人だね」

という、奇妙な返事でした。聞き返したものでどうか、僕が迷っている間に、彼は微かな苦笑を浮かべて続けました。

「もう噂が立っているのに、俺の頼みを聞いて下さった」

「……っ！ それじゃあ、やっぱり」

僕は息を飲み、手にしていた帳面を落としそうになりました。うるたえた僕に、真理はひどく大人びた目を向けて、いとも簡単にうなずきました。

「そうだよ。俺がその『影を連れた少年』なんだ。実際は連れ歩いているんじゃないくて、取り憑かれてるんだけどさ。噂は足が速いね、本人より先に着いてるなんて、驚きだ。そのせいで、瀬場からここ

まで来る間、どこの神殿でもあれこれ理由をつけて追い払われたよ。人を増やす余裕がないとか、指導できるほどの法師がいないから、とか」

「……………」

僕は絶句したきり、その場に立ち尽くしてしまいました。まさか本当に彼が噂の主で、しかもそれを自分で認めるなんて、とても信じられなくて。

「心配しなくても、影は神殿の境内には入って来られないよ。特にここは神気が強いからね。まあ、今までに寄った所では神気が弱くて、境内のすぐ際まで影が寄って来たりして、それもあつて断られたんだけど。俺はあの影をなんとかして追い払うか、退治するか、その方法を探しているんだ」

真理は淡々とそれだけ言うと、また帳面に目を落としました。

「俺自身が強くなることも大事だけど、綾女さんが、それ以外にも何かがあるはずだ、って言うからさ」

「…………へえ」

僕はぼかんとしたまま、間の抜けた相槌を打ちました。真理は小さくふきだして、揶揄するような目を僕に向けました。認めるとは思わなかったかい、とか、嘘だと思ってるだろう、とか、そんな感じの目を。でも、だからこそ逆に、彼が本当のことを言っているんだと分かりました。

同時に、僕の中でストーンと何かが収まったように、真理のことが理解できました。

彼が怖く思われたのは、彼が僕の疑いに気付いて、自分を守ろうと身構えたせいだったのでしょうか。僕は、自分自身の敵意の反射に怯えていただけだったのです。

こんな風にあつさり認められるのなら、もっと早くに訊いておくべきでした。真理は影を操る鬼なんかじゃなくて、むしろ影を退治する方法を探していたんだ、なんて。

そうと分かると、僕は急に、真理が気の毒に思えてきました。

時々見せる、今みたいな皮肉な態度も……まるであの賞金稼ぎみたいですが、きっと辛い現実から目をそらす為なんでしょう。まともに向き合ったら、怖くて挫折そうだから。

少なくとも、僕だったらおかしくなるだろうな。人を殺める恐ろしい影が、どこに行っても自分の後について来る、なんて、ぞつとする。

僕はぶるつと身震いして、それをごまかすように、首を竦めました。

「じゃあ……影が人を殺めるっていうのは、本当ですか」

途端に、真理の顔からさつと表情が消えました。

しまった。ここまで踏み込んだじゃいけなかったんだ。

僕が失敗を悟って身を固くしていると、真理は黙って小さくうなずきました。それから、何か言いかけて口を開きましたが、結局そのまま黙って窓の方を向いてしまいました。

しばらくして彼は、ぽつりとつぶやきました。

「……外。雪がやんだみたいだね」

「え、ああ、そうですね。また雪かきしないと」

僕も話を合わせて、そろつと障子を開けてみました。

うわあ、積もってる、積もってる。げんなりだ。

僕が思わずがくりとうなだれると、真理はちよつとだけ笑いしました。

「毎年こんなに積もるのかい？」

「いいえ。今年は特別です。最初は皆、雪遊びをしたりしましたけど、もう沢山ですね」

「ふうん……手伝おうか。雪かき」

思いがけない申し出に、僕は目をぱちくりさせて振り向きしました。

「でも、調べ物が。それに……一応、お客人ですから」

「俺の方がお世話になってるんだから、雪かきぐらいしなきゃ罰が当たるよ。部屋に籠もりつきりだと気分も暗くなるし、たまには外に行こう」

言いながら、もう真理は書状を片付けています。僕も慌てて、帳面に棊を挟んで閉じました。真理は書齋に顔を出して、雪かきしてきます、と白露先輩に言い置き、どんどん歩いて行きます。僕はその後を追いかけて、納戸の場所を教えました。

二人してたすきをかけて、雪かきを手にすると、なんだか少し元気が出てきました。いつもはうんざりする雪かきも、今日は少し違う感じがしてきます。

僕の受け持ちの裏参道へ向かうと、二匹の犬もやってきました。もちろん、犬に雪かきはできませんから、その辺で遊んでいるだけです。

「こっちは表参道よりも、急なんだね」

ざくざくと階段を掘り出しながら、真理が言いました。

「ええ。だから、滑らないように気を付けて下さいね」

そう言ってから、僕は自分でおかしくなって、ふきだしてしまいました。実際に滑って落ちたのは、僕の方なのに！ 真理も笑って、雪を脇の茂みに投げました。

その後も、いつまでも彼がくすくす笑い続けているので、僕はちよつと仕返しをしてやることにしました。失敗したふりで、わざと彼の方に雪を放り投げてやったのです。

「うわっ！」

見事、命中。僕は「あ、すみません」なんて白々しく謝りましたが、顔はどうしようもなくニヤニヤしていました。となると真理もわざとだと気付かないはずがありません。苦虫を噛み潰して雪を払い、それから素早く屈むと、真新しい雪をひとすくい、投げてきました。

「おっと！ あっ、しまった」

僕は顔に当たりそうになった雪の塊を避け、またわざとらしい『失敗』をしてやりました。今度は真理もサツとかわし、さつきよりも速く雪をひっかけてきました。

二匹の犬が、何をやっているのかと楽しげに駆け寄り、足元にま

とわりつきます。僕はすっかり愉快になって、どんどん雪を投げてやりました。

そうしてしばらく、僕らは夢中になって雪をぶつけ合っていました、

「ぶわッ！　ぺっぺっ、何しやがるこの餓鬼！」

いきなり割り込んだ下品な罵声が、終わりの合図になりました。

僕と真理は手を止め、裏参道を上がってきた不運な客を見下ろしました。

「あれえ、おじさん！」

雪まみれのまま、真理が頓狂な声を上げました。言うまでもなく、巻き添えを食ったのは、あの賞金稼ぎ……雷火さんでした。

少し下の方から、綾女さんもくつくつ笑って見上げています。

「おやまあ、水もしたたるいい男だこと。良かったねえ、雷火」

「綾女、おまえ、俺を盾にしやがったな？　なんでおまえは丸つきり無事なんだよ！」

「八つ当たりは止しとくれ。あたしはあんたと違って、用心深いだけさね。坊や、元気そうだね。仲良くやってるようで、安心したよ」

仲良く？　誰と誰が？

思わず僕と真理は顔を見合わせました。そしてお互い、言われて初めて自分たちが仲良くなっていた事に気が付いたみたいに、照れ臭くなつて笑つてしまいました。

雷火さんが、雪を払いながら怪訝そうに首を傾げました。真理はまだ笑いながら、

「なんでもないよ」

と首を振りました。そう、確かに、なんでもないことなのかも知れませんが——友達になるっていうのは。なにも、特別なことではなくて。

僕と真理はちらつと目を合わせて、またちよつと笑いました。

そんな僕らの様子に雷火さんも機嫌を直して苦笑すると、真理の頭に手を伸ばして、くつついたままの雪を払ってやりました。

「お楽しみのところ、すまねえがな。また明主様に話があるんだ。深谷から闇鷲が戻ったんだが……あんまり良くねえ知らせだ」

「えっ……」

真理の顔が曇りました。綾女さんは、いたわるように微笑んで言いました。

「それでちよいと、相談というか、お願いがあつてね。坊や、ええと……翼って言ったかね。悪いけど、また明主様に取り次いじやくれないかい」

「あつ、はい、もちろん。すぐに」

僕は慌てて答え、たすきをほどこしました。真理が黙って、雪かきを受け取ってくれたので、片付けは彼に任せて、僕は急いで階段を駆け上がって行きました。

なんだろう、良くない知らせって？

不安に胸がどきどきして、僕は焦るあまり何度も転びそうになりました。昨日までだったら、知らせがどうだろうと気にしなかったでしょう。けれども今の僕は、どうか絶望的な知らせではありませんせんように、と一心に祈っていました。

三 夜闇に浮かぶ(1)

三

真理たち三人は、今度は奥の院に通されました。僕も話が気になったのですが、明主様に下がるように言われてしまいました。思わず「でも」と口走りましたが、同席が許される雰囲気ではありません。

仕方なく僕が引き下がりがけたところで、真理が「待つて」と止めました。

「すみません、明主様。実は翼にも、事情を一部話してしまっただです。中途半端に知らせて放っておくより、きちんと知ってもらう方が、お互いのためじゃないでしょうか」

「ふうむ……。よろしい、翼、おいで。けれども、ここで知ったことは決して、口外してはならないよ」

明主様に手招きされ、僕はほっとしてお礼を述べ、急いで部屋の隅に座りました。

入れ替わりに明侍らしき人が外に出て、見張りのために座り、襖を閉めました。これは本当に重大な秘密なんだ——僕は緊張して身を固くしました。この場にいるのは、真理たち三人と明主様のほかは、諭佐法師と僕だけです。

まず口を開いたのは真理でした。

「先に、翼のために補足しておくよ。影は、僕が深谷を出た時からついて来たんだ。だから、影の正体や封じ方なんかの手掛かりが、深谷の神殿に残されていないかと思ってね。それで、綾女さんの……使いが、深谷へ行ってたんだ」

そこまで説明してから、彼は綾女さんに向き直りました。

「それで、良くない知らせって？」

問った声がわずかにかすれていました。綾女さんもすぐには答え

られず、深刻な表情で目を伏せていました。が、ややあつて、はつきりところ言いました。

「柳斎明師は、亡くなっていたよ」
リュウサイ

「——！」

真理は息を飲み、ぎくりと身をこわばらせました。綾女さんは一番難しいことを伝えてしまつて肩の荷が下りたのか、ふつと息を吐いて続けました。

「安心おし。祟りがあつたとか、村を襲つた災いが止まなかったとか、そういうわけじゃないから。あんたが出た後、確かに災いはおさまつたらしいよ。明師様が亡くなつたのはお齡のせいで、眠るよに逝かれた、って話だつた」

それを聞いて真理は緊張を解きましたが、静かな吐息をもらしただけで、何も言いませんでした。諭佐法師が、氣詰まりな空気を払おうとするように、先を促しました。

「それでは、神殿の者は？」

「それが、誰もいませんでねえ。亡くなられたのが最近だから、後任が来てないんでしょうよ。どっちにしろ、新任の神官が深谷の昔話を知っているとも思えませんからね」

そこまで言つと、綾女さんは、なぜかちらりと僕の方を見ました。そしてそのまま黙り込み、話を進めるのをためらうように、無意味に髪をいじっています。

そんな綾女さんに代わつて、雷火さんが無遠慮に言いました。

「そういうわけで、ものは相談なんですがね、明主さん。亡くなつた明師さんの御霊を、呼びてえんですよ。この神殿に」
みたま

「なんと」

さすがに明主様も驚きの声を上げられました。僕はというと、仰天して息を飲んだきり、声も出せずに綾女さんを凝視していました。神や御霊を己の体に降ろすことの出来る人なら、神殿の外にもいます。『のりわら』と呼ばれるそうした人の口を通して、神託を授かる祭礼もあります。でもそれは、何日もかけて心身を清め、神官

が儀式を執り行つて初めて可能なことで……自分勝手に御霊を呼び出せるのは、巫師だけです。

忌まわしく穢らわしい、妖使いの巫師。よりによって、綾女さんがその一人だなんて。

僕はそのことに衝撃を受けたのですが、明主様が驚かれたのは別のことでした。

「さほどの技をお持ちとは、よほど優れた師につかれたようですね。明主様は、綾女さんを嫌うどころか、感心した風におっしゃいました。それで僕はまたびっくりして、あんぐり口を開けてしまいました。」

綾女さんは苦笑しながら答えました。

「自分で選んだわけじゃあ、ありませんけどね。幸い、この神殿なら申し分なく清められているし、立派なご神木の助けも借りられますから、呼びやすいと思うんですよ。ただ、神殿の中で巫師に御霊降ろしをさせたなんて、人間が悪うございましょう?」

「確かに、昼日中に人前で、というのでは困りますな」

「ああ、それはもちろん、致しませんよ。お天道様がある間は、御霊も現れてくれませんか。夜中にこっそり、邪魔の入らないところでやらせてもらいます」

「それならば、今夜にでも」

「よろしゅうございますか」

とんとん拍子に話が進んで行くので、僕はうろたえて、目を白黒させるばかりでした。

そんな僕の様子に気付いて、諭佐法師が苦笑されました。

「翼、そう驚かずとも良い。巫師と言っても、すべてが邪なものではないのだ。我々神官とは異なる流儀で神々に接する人々だが、だからと言って、それが間違っているというわけではない。時には互いに力を合わせる事も、必要になるのだよ」

「でも、講義では……」

僕が弱々しく反論すると、諭佐法師は表情を改めておっしゃいま

した。

「確かに、巫師は邪悪であると教えている。それは、半端に力と技を身につけた者が、心の修養を怠って、『邪悪な巫師』のようになるのを防ぐためなのだ。則に従わずとも己の才覚でやっていける、と心得違いをした者は、もはや神官ではない。それは巫師だ。そして巫師であることは、極めて転落しやすい、細く険しい道を歩むことなのだよ」

だから、未熟な見習いたちを危ない道に近づかせまいとして、巫師を悪者に仕立てている、というのでしょうか。僕にはなんだか納得が行きませんでした。けれども、今は講義の時間ではありません。渋々「わかりました」とうなずくしかありませんでした。

それから、今夜もう一度ここに集まることが話し合われ、その場は解散になりました。

真理たちと一緒に外に出ると、いつも見慣れたはずの境内が、なんだか違う場所のように思われました。実際、僕にとっての神殿という存在が、これまでとは違ってしまったのかもしれませんが。

僕はぼんやり立ち尽くしたまま、真理たちが話しているのを背中で聞いていました。

「で、真理、おまえの方は何か成果があったか？」

「あんまり。でも、少しは深谷について分かったこともあるよ」

そう言って真理が説明した内容は、僕と二人がかりであちこちから拾い集めた断片を、つなぎあわせたものでした。

深谷はもともと、川で砂金の採れる土地だったそうです。それを独り占めしていた一族がいましたが、朝廷の兵が彼らを討ち取り、その時に神殿が建てられました。これからは砂金をきちんと土地神様に奉納した上で、村人皆で富を分かち合おう、という約束のしるしとして。

けれどもいつしか砂金が採れなくなり、村人は生計の道を求めて谷から一人、また一人と去って行きました。そして、もう何十年もさびれたままになっているのです。

確かに、深谷の歴史についてはそれだけのことが分かっていました。でも、これまでのところ、真理の『影』に関係がありそうな話はひとつも見付かっていません。

ところが、話を聞いた雷火さんは小さく唸って言いました。

「砂金ねえ。臭いな」

「え？ 何が」

真理が聞き返すのと同時に、僕も振り返っていました。砂金と『影』にどんなつながりがあるって言うんだらう？

僕は不思議に思っただけで返事を待ちましたが、雷火さんは、こっちを見て肩を竦めました。

「ここで話すのは、ちよいと都合が悪い。まあ今晚、綾女が失敗しなきゃ分かるさ」

その言葉に、僕と真理の視線が隣へ移りました。綾女さんはムツとした様子で雷火さんを睨んでいましたが、すぐに気を取り直して、僕の方を向きました。

「はいはい、失敗しなきゃいいんでしょう。坊や、手間を取らせて悪いけど、ご神木のところへ連れてっておくれでないかい。力を借りる前に、挨拶をしておかないとね」

「拝殿じゃなくて、クスノキの所ですか？ それなら、見えていますよ。あそこです」

「そう言わずに、案内しておくれよ。ここの神官が誰かについていてくれた方が、怪しまれなくていいだろう？」

両手を合わせて拝まれたのでは、断れませんか。僕はまだもやもやした気分でしたが、三人をクスノキのところへ連れて行きました。

注連縄をかけたクスノキは、いつ見ても堂々として威厳があり、その近くに立つだけで、すうっと心が澄んでいくようでした。最後まであれこれ考えていたのが、何もかも瑣末でどうでもいい事のようになってしまう。

「はあ、これは大したものだねえ」

綾女さんも感嘆の声をもらして、冬の今も葉の生い茂る梢を見上

げました。

「立派でしょう？ 樹齡は三百年とも、四百年とも言われています」
僕が得意げに説明している間に、綾女さんは木に歩み寄り、幹にそつと両手を当てました。さすがに僕はぎよつとなりましたが、それきり綾女さんは何をするでもなく、目を閉じて、じつと何かに耳を澄ませているようでした。

これが諭佐法師の言われた、『違う流儀で神々と接する』ということなのでしょう。

僕は内心、誰かが通りがかって咎められやしないか、とやきもきしていましたが、幸いそんなこともなく、じきに綾女さんは手を離して、僕らの所へ戻って来ました。

「……どうですか？」

なんとなく僕がそう訊くと、綾女さんはにっこり微笑みました。

「それは、今晚にね」

三 夜闇に浮かぶ(2)

夜中に宿舎を抜け出すのは、それほど難しいことではありませんでした。皆が寝静まった後で厠かたやへ行く人もいますからです。僕もそんな一人のふりをして、寒さに肩をすばめながら何食わぬ顔で部屋を出ると、そのまま青白い月光の下を、奥の院へと急ぎました。

実を言えば、僕が行く必要などなかったのですが、こうなったらもう乗りかかった船です。雷火さんが言っていたことも気にかかるし、いまさら知らんふりは出来ません。

明主様のお部屋には、もう他の皆が揃っていました。

卓の上にはクスノキの小枝を挟んで蠟燭が灯され、香が焚かれていました。僕が部屋の隅に座ると、綾女さんが「始めます」と一言ささやいて、胸の前で印を結びました。

その唇からこぼれた声は小さくてよく聞こえませんでした。言葉につれて空気が変わっていくのが分かりました。

やがて、ふう……つ、と、誰かが吐息をもらしたように感じました。同時に、襟や袖に冷氣が入って来たので、僕はぞつとして我が身を抱きしめました。

何が始まるんだろう——そう思って目を上げた時には、部屋の中奥に空けておいた場所に、ぼうつと白い影が浮き上がっていました。僕は危うく飛び上がりそうになりましたが、かろうじて声は飲み込みました。ここで悲鳴を上げたりしたら、ひんしゆくをかうどころか、すべてぶち壊してしまうかもしれません。僕はカタカタ震える手を膝にぎゅっと押し付けて、じつと堪えていました。

「明師様」

かすれ声で呼びかけたのは、真理でした。それに応じて白い影がゆっくり向きを変え、ようやく僕の目にも、それが一人の老人だと分かりました。

「そこにいるのは……真理……かい？」

隙間風のような声がささやきました。御霊が話しているのではなく、天井の隅か、その向こうから響いているように聞こえます。

「柳斎さん」綾女さんが呼びかけました。「あなたはもう亡くなりました。現世のしがらみは切れています。おわかりですか？」

柳斎明師の御霊は、声を出さずにこっくりとうなずきました。

「お尋ねします。真理に憑いている影の正体、ご存じならばお教え下さい」

しばし応えはなく、沈黙が続きました。誰もが固唾を飲んで、御霊の返事を待ち受けていました。不安の色が皆の顔に見え始めた頃、ようやくと声が返りました。

「……^{アシオレコ}葦生彦。深谷の長だった者じゃ。朝廷に討たれ、首は村外れに埋められた。守り石などと言うが、元は首塚じゃ……それが倒れ、御霊が……解き放たれた」

「なぜ、真理に憑いたのですか」

今度は前よりも長い沈黙でした。綾女さんが、答えを促さなければならぬほどに。

「お教えください。あなたを脅かすものは、もうありません」

「葦生彦は……真理の……先祖なのだ。血のつながりを使い……結びつけた。わしが」

か細い声がささやきました。僕が思わず真理を見ると、彼は目をみはり、薄く開いた唇を震わせて、御霊を凝視していました。

「許しておくれ。わしは……そなたを、守れなんだ。犬たちを共に行かせたは、せめてもの……償いの、つもりじゃった。しかし、これほどの重荷を……」

「いいえ、明師様は俺を助けて下さいました」

真理は今にも泣き出しそうな顔で、どうにかそれだけ言いました。御霊の手が、慰めようとするようにちよつと上がり……また、だらりと下がりました。

「じゃが……今、そなたと、葦生彦を結んでいるものは……血だけではなかつた」

御霊の言葉に、真理はうなだれて「はい」と小さくつぶやきました。御霊は痛ましげな表情を見せ、ゆっくりと語り続けました。

「影を呼んではならぬ。憎しみが募ろうとも、自ら影を招いてはならぬぞ。……出来るならば、許すことじゃ。罪人であるわしが……

……言つて良いことではないがな。そうでなくとも、幼いそなたには辛かろう」

「俺はもう、子供じゃありません」

真理は顔を上げ、悲しげに微笑んで言いました。確かに、十五歳ほどにもなれば、もう幼子ではありません。それに真理は、僕と同じ年頃に見えるとは言え、内面は随分と大人びているようです。それは多分、深谷を出てから多くの事を見聞きし、辛い思いもたくさんしてきたからなのでしょう。

柳斉明師の御霊は何を思つたのか、小さく首を振りました。いいや、まだまだ子供だ、と言いたかつたのか……それとも、その通りだ、もう昔と同じ幼子ではないぞ、と思われたのか。いずれかは分かりません。御霊はそのことについては何も言わず、ずっと手を上げてひとつの方向を示しました。

「北を目指すのじゃ。フシらの御霊が集う場所……そこならば……」
不意に声が遠くなり、白い影が薄れ始めたので、僕と真理は思わず身を乗り出し、雷火さんは綾女さんの方を振り向きました。ほとんど同時に、何の前触れもなく、御霊はフツとかき消えてしまいました。

「明師様！」

真理が叫び、御霊のいた場所に飛び出しました。でももちろん、それでどうなるわけでもありません。彼はその場に呆然と立ち尽くし、それからがくりと膝をついて、両手に顔を埋めました。

僕はかける言葉もなく、その背中を見つめるばかりでした。

ややあつて、雷火さんが大きなため息をついて、うんと伸びをしました。その仕草で、それまでの空気がすっかり消え、いつもの……御霊や神や妖とは離れた、日常が戻ってきたように感じられまし

た。

「さて、どうするかね」

雷火さんの言葉で、真理が顔を上げて涙を拭きました。目はまだ潤んでいましたが、もう泣くまいと決めたように、唇はきゅっと引き結ばれています。雷火さんは、ちよつと頭を掻いて、何事もなかったような調子で話を続けました。

「巫師の御霊が集う場所、とか言ってたが……綾女、聞いたことがあるか？」

「あいにく、そんな話は知らないねえ」

綾女さんは香炉を片付けながら、首をひねっています。

「まあ、巫師のつてを頼れば、何か分かるかもしれないけど」

「気が進まねえ、ってか？」

「昼間その法師さんがおっしゃったように、巫師にも色々いるからね」

綾女さんはそう言いましたが、真理と目を合わせると、すぐに笑ってうなずきました。

「でもまあ、坊やのためだ。一肌脱ごうじゃないの。ああ、礼なんていいよ。ただのお節介だ、って何度も言ってるじゃないか」

「そうやって油断させておいて、頭からぱっくり食っちゃうつもりだろう」

雷火さんがからかい、綾女さんは拳を振り上げました。僕と真理は同時にふきだしてしまい、顔を見合わせてくすくす笑いだしました。

「それでは」とおっしゃった明主様まで、楽しそうなお声でした。「巫師の霊場については、綾女殿にお願い致しましょう。しかし、いずれにせよ出立は雪解けまで待たれた方がよろしい。ここより北はさらに山深い土地。峠も雪で閉ざされておりましょうからな。それまでの間、真理はこの神殿で修養を積むが良い。この土地ならば、大楠の神気が怨霊を遠ざけて下さるゆえ、里の者にも禍はあるまい」
はい、と真理が答え、綾女さんと雷火さんが立ち上がりました。

僕も、急に眠気が差ってきて、あくびをかみ殺しながら急いで部屋を出ました。早く戻らないと、誰かに見付かったら面倒なことになります。

外に出たところで、不意に袖をつかまれました。びっくりして振り返ると、真理が奇妙な表情で立っていました。何か言いたいのに、なかなか言い出せずにいるようです。

僕が首を傾げると、真理は小さな声で、つぶやくように言いました。

「……翼、ありがとう」

「え？」

僕は目をぱちくりさせました。ありがとう、って、何が？僕は何も、お礼を言われるような事はしていません。ただ部屋の隅っこで、じっと見物していただけです。

綾女さんや明主様にお礼を言うのなら、わかります。でもどうして僕に？

きょんとしている僕に、真理はちよつと笑うと、

「いいんだ、気にしないで」

勝手にそんな事を言っ、手を離しました。……何だったんだろう？

困惑しながら僕が宿舎に戻ると、隣の布団で白露先輩がもぞもぞ動きました。

「なんだ……翼、廁か？」

むにやむにやと寝ぼけ声で言われ、僕は慌てて謝りました。

「あつ、はい。すみません」

んー、とかなんとか、唸り声の返事。完全に目を覚まされたわけではないようです。僕はホッとして、すっかり冷えきった布団にもぐりこみました。

早く眠ろうと思ってまぶたを閉じましたが、さっきの真理の言葉が気になってなかなか寝付けません。僕はしばらくじっと我慢していましたが、結局、ごそごそと横を向いて、うんと小声でささやき

ました。

「白露先輩」

「んー？」

寝言と区別がつかないほどの声でしたが、返事がありました。

「あの……何もしてないのにお礼を言われるって、どういう事だと思えますか」

すぐには反応がありませんでした。やっぱり寝ちゃったのかな、と諦めかけた頃になって、先輩はごろんと寝返りを打って、こちらを向きました。

「何もしてないつもりで何かをしていたか、あるいは、ただそこに
いるだけでありがたいと思われたか、どっちかだろうね。ちなみに
俺は今、おまえさんが何もしないで、俺を静かに寝かせといってくれ
たらとってもありがたいのになー、と思っている」

「す、すみません。おやすみなさい」

僕はまた謝ると、もう寝ます、というふりで仰向けになって、目を
瞑りました。じきに先輩がすやすや寝息を立て始めたので、僕は
またぱっちりと目を開けて、天井を見つめながらあれこれと思いふ
けりました。

そこにいるだけでありがたい——って、思われたんだろうか。僕
が？ 僕は何もしてないけれど、真理にとっては……僕があの中
にいるだけで、何かの助けになったんだろうか。それならいいんだ
けど。

僕は今まで、そんな風に誰かをありがたいと感じたことはありません。
せん。何もしないのなら、いようといまいと関係ないじゃないか、
と思うぐらいです。でも。

でも、もし、本当にそう感じることもあるのだとしたら。それは、
僕がまだ体験していない辛さを、真理が知っているからではないで
しょうか。

そう考えると、なんだか切なくなっ、ひとりでに涙が浮かんで
くるのでした。

三 夜闇に浮かぶ(3)

翌日もまた、今までと同じように真理が調べ物にやって来ました。書庫に入ると、僕はふと、妙におかしくなっていました。昨日までは、ここに来るのが嫌で嫌で仕方なかったなんて、自分でも信じられません。僕は気付かずに変な顔をしていたらしく、真理が怪しむように「どうかした？」と訊いてきました。

「いえ、何でも。あの……昨日、結局どういうことだったんですか？」

僕が言つと、真理はちょっと困ったような、恥ずかしそうな顔をしました。

あれ？ あつ、そうか。お礼の事じゃなくて……

「深谷の守り石がどうか。僕、なんだかぼうつとしていたみたいで、事情がよく分からなかったんですけど」

「ああ、その話」

真理はホツとしたように苦笑して、簡単にまとめてくれました。

「俺に憑いている影の正体は、ずっと昔、朝廷に討ち取られた葦生彦の怨霊だった、ってことだよ。綾女さんが言うには、首塚を守り石として祀って祟りを鎮めていたのが、砂金が採れなくなつて神殿がさびれたせいでおそろかにされて、怨霊が力を増したんじゃないか、って」

「でもそれなら、深谷の神殿に祟りをなすはずで、人に憑いてこんな所まで出てくるのはおかしくありませんか？」

「それは……ああそうか、まだ言つてなかったつけ。実際、祟りはあったんだよ。長雨で色々ね。それで俺が人柱にされる所だったんだけど、明師様が皆を説得して、俺を村から追い出すことで手を打ったんだ。先祖の霊を、子孫の俺にくつつけて、ね」

真理は苦笑して、肩を竦めました。その笑い方はまた、雷火さんのような皮肉なものになっていました。——多分、もうひとつの理

由を言わずにごまかすための笑い方。

血だけではない、と昨夜の御霊は言いました。そして、憎まずに許せ、とも。

つまり、深谷の人々に対する憎しみが、二人の結びつきを強めてしまったのでしょう。真理を人柱にしようとした人々、葦生彦の祀りを怠った人々に対する、怒りと憎しみが。

僕が黙っていると、真理は笑みを消して、淡々と続けました。

「おじ……雷火さんの話だと、各地の神殿には、天子様が倒した妖や鬼を鎮めるために建てた、って由来が多いんだってさ。要するに、『先住民をぶつ殺して土地を奪った上に、死んだ後も祟るなっつて靈魂まで神殿の下敷きにしちまう』ってことだけだ」

「……！」

なんて不遜な！

僕は驚きのあまり、がくんと顎を落としてしまいました。そんな僕に、真理は辛辣な笑みを見せました。

「深谷だって、きっと葦生彦だけじゃなくて大勢殺されたと思うよ。だから、今の深谷の住人は、先祖を辿ればほとんどが『よそ者』で……葦生彦が祟るのも無理ないよね」

「だ……だけど、でも、そんな」

僕は動揺のあまり、わけのわからない事を口走りました。混乱して、何がなんだかよく分かりません。

真理の言うことが本当なら、ひどい話です。この神殿だって、あのクスノキの根元に、もしかしたら葦生彦のような人が埋められているかもしれません。

しばらくかかって、僕はようやく、言葉を押し出しました。

「あなたは平気なんですか。そんな事を言って」

真理だって、神官なのに。僕と同じように、神殿で学んだはずなのに。

僕の問いかけに、真理はふいと目をそらしました。

「平気なわけないよ。でも、納得が行くからね。それに、全部が何

かを踏みつけにして建てられたってわけじゃないし、どつちにしろ昔の話だ。今ではどこの神殿も、妖から里を守り、神々を祀って豊饒をもたらす、大事なつとめを果たしているんだから」

「それは……そうですね」

僕はもぐもぐ言つて、それきり黙り込みました。

そんな風に割り切つてしまえたら、どんなに楽なことか。神官であることに後ろめたさを感じなくてもすむし、今まで通り、偉い人に従つておつとめを果たしていける。

でもそうしたら、かつて踏みつけにされた人たちは、どうなるんだろう？

僕があれこれ考えていると、真理が口調を明るく変えて言い出した。

「ともかく、相手が怨霊なら、鎮める方法がないわけじゃないだろうからさ。昔の深谷でどんな風に祀っていたのか、とか、ほかの神殿で似たような場合の記録がないか、調べてみることにしたんだ。それと念のため、『巫師の霊場』の手掛かりもね。綾女さんに頼りっぱなしじゃ、申し訳ないから」

「えっ……ってことは、もしかして、もう一度最初から調べ直し……？」

僕が愕然として問い返すと、真理はにやにや笑いました。

「そうなるね。今までに読んだ内容を全部覚えているのなら、やり直す必要はないけど」

「そんな無茶な」

思わず泣きそうな声を上げ、僕はげんなりして机に突っ伏してしまいました。今までの苦労はいったい、何だったんだ……。

人の気も知らずに、真理はほんと僕の背中を叩きました。

「そう悲観しなくてもいいよ、ほら、時間はたっぷりあるんだからさ」

「……………」

ひと冬丸々、調べ物に付き合えって言っただろうか？ もういつ

そ僕の方こそ、真理を恨みたくなくて来ました……。

ともあれそんなわけで、その後もずっと、午前中は書庫にこもって過ごす日が続きました。何しろ前と違って、すべての内容を細部まできちんと読んでいかなければならないのですから、本当に大変でした。

ただそれも、毎日必ず、というわけではありませんでした。

神殿では冬でも、鎮魂祭や晦大祓など大事な儀式があつて、書部たましすめのまつりこもりのおおはらえや法部もそれぞれ受け持ちの仕事が出てきますから、そういう時期は書庫に籠もっている暇がありません。

時には真理が、法部の皆と一緒に何日も楔をすることもありました。書庫に来はしても、前日の疲れが抜けておらず、ほとんど何もせずにぐっすり眠り込んでしまったりもしましたし、二人でこっそり抜け出して、二匹の犬と一緒に遊びに出かける事もありました。

雷火さんと綾女さんは、時々様子を見に来ましたが、巫師の霊場については、なかなか進展がないようでした。よその巫師と文をやりとりするにしても、雪のせいで日数がかかるのでしょう。

そうする内に年も明け、寒さもいくぶん和らいで、梅の蕾が膨らんできたのでした。

四 北へ（１）

四

書齋で白露先輩と並んで帳簿の検算をしていた時のこと。僕はふと、祈祷代の項に目を留めました。前日に綾女さんが来たので、巫師の仕事がどんなものかなど、色々と話をしたのですが、その時に綾女さんが「巫師の方が安上がりだし、気軽に頼みやすい」というようなことを言っていたと思い出したのです。

それであれこれ考えている内に、僕はひとつの疑問に突き当たりました。

「先輩、巫師ってやっぱり、普通の人とは違うんですね？ それって、亡くなつて靈魂になつた後もそうなんですか？」

「いきなり何なんだい。変なことを訊くね」

白露先輩は妙な顔をしました。これがほかの神官だったら、うかつに巫師の話なんてできないところですが、先輩はそういう事は気にしない人なので、たまには助かります。

「ちよつと思いついたんですけど。巫師の靈は僕たちとは違って、特別な場所に行ったりするんでしょうか」

普通、人は亡くなれば靈となつて黄泉の国へ行き、やがて祖靈となり神となつて子孫の家に宿り、見守ってくれるものです。里の近くに神の宿る山があれば、その元に靈が集つとも言われますが、一族と何の関係もない所に去つてしまふ、ということはありません。

「さて、どうかねえ」うーん、と先輩は頭をひねりました。「そもそも昨今は皆、御靈もただの靈魂も一緒くたにしてるからややこしいんだが、おまえさんが言ってるのは、靈魂の話だね？ どうかなあ。巫師は靈力が強いし、悪行を重ねる者や、そのせいで殺される場合もあるから、死後にただの靈魂でなく御靈となつて祟りをなしたりする例は、確かに多いんだがね」

「でもそういう場合は、その土地に憑きますよね。あるいは、自分を殺めた一族とか」

「それだって、普通の人間もひどい死に様だったりした場合は、あり得ることだしなあ。巫師だから特別にどうこう、ってことはないと思うぞ」

「はあ……」

はて。そういう事なら、『巫師の霊場』なんてものがそもそもあるのかどうか、怪しくなるわけで……何かの間違いなんだろうか？ 僕が考え込んでいると、白露先輩が独り言のようにつぶやきました。

「フシ違いなら、そういう話も聞いたことがあるけどな」

「えっ？」

びつくりして僕が顔を上げると、先輩はじつとこちらを見つめていました。まるで、どうして僕がそんな事を気にするのか、読み取るうとするみたいに。

「そもそもが巫師っていうのは、山野に『伏す』者、って意味にも通じているんだよ。その昔、朝廷に逆らった連中のことさ」

「——！」

危うく叫びそうになって、僕は慌てて声を飲み込みました。

それだ！ 『伏し』たちの霊が集う場所があるのなら、そこに連れて行けば葦生彦の怨霊も真理から離れてくれるかもしれない。そういう意味だったんだ！

巫師が『伏し』の流儀を受け継ぐ人々をも意味するのであれば、神殿と対立するのもうなずけます。神殿は決して朝廷の手先ではありませんが、朝廷の勢力と共に広まっていったのですから。

そういう、神殿の流儀を嫌う人々が、自分たちの先祖を自分たちで祀り鎮めるために、特別な場所を設えているとしても、不思議ではありません。

僕は興奮を隠せずに、身を乗り出して訊きました。

「でもそんなのは随分と昔の話でしょう？ 今でも、そういう人々

が隠れている山とか、霊場とか、残っているんですか」

「さてねえ。奥山深く分け入って蟻の子を探すようなもんだろ、どこかにはあるだろうさ。翼、まさかおまえさん、神殿から逃げ出す算段をしてるんじゃないだろうね？」

「ええ？ まさか。逃げ出す理由なんかありませんよ。それはまあ、たまに先輩から逃げたくなる時はありますけど」

僕はとぼけて言い返しましたが、先輩はなおも追及してきました。「それならなんだって、妙なことを気にするんだい」

「別に、気にしちやいせんよ」

僕は肩を竦めて答えをはぐらかし、黙って仕事の続きに戻りました。それきり僕がこの話を忘れたようなふりをしてしていると、しばらくして先輩も諦めて筆を手に取りましたが、毛先を墨につけながら首を振って感心したように言いました。

「大人になつたねえ、翼君も」

「それ、皮肉ですか」

「いやいや。ちょっと前までなら、巫師なんて口にするのも嫌そうな顔をしたのにな、と思つてさ」

さらりと言われ、僕はぎくつとしました。先輩は、いったいどこまで事情を知っているんでしょう？

「僕だつて少しは成長しますよ」

言い返しはしたものの、僕の声には勢いがありませんでした。

その後はひたすら、夕餉の時間を待ちわびていました。刻を知らせる鐘が鳴ると、僕はすぐさま机の上を片付けました。そのあまりの素早さに、先輩がまた妙な顔をしました。

「そんなに腹がへつてるのかい？」

「ええ、背中とくつつきそうなんです」

僕は振り向きもせず答え、礼儀を無視して「お先に」と書斎を飛び出しました。

食堂の外で待っていると、もうすっかり馴染みになった、二匹の犬を連れた姿がやってきました。ほんの二月ばかりの間に、背が伸

びて遅しくなつたように見えます。小柄な僕としては、いささか妬ましいことでした。

僕を見付けると、真理は意外そんな顔をしましたが、すぐに急ぎ足でやって来ました。

「やあ、翼。何かあったのかい？」

「フシ違いだつて」

「……え？」

「先輩がぼろつと話してくれたんです」

僕は小声で早口に説明しました。中でこんなことを話したら、誰に聞かれるか知れたものではありません。

話を聞くと、真理は難しい顔で唸りました。

「それなら、綾女さんにも伝えておかないと。見当違いの所をつついているだけならまだしも、知らずに本物の『伏し』と接触したら、役人に捕まるかもしれない」

「まさか。朝廷が今も落人狩りおちうしをしているなんて、聞いたことありませんよ」

いくらなんでも心配し過ぎだ、と僕は笑ってしまったのですが、真理はあっさり「当たり前さ」といなしました。

「そんな噂が立つようじゃ、隠れている人も警戒して出て来やしないよ。確かに、今でも落人狩りが続いているかどうかは、俺も知らない。でも狩りをするなら、ネズミ穴の前で待ち続ける猫みたいに、静かに気配を殺しているはずだよ」

「……うーん」

僕は言い返せずにもぐもぐつぶやきました。正論ですが、そこまですり深いのもどうだろう、と思えたのです。真理は雷火さんたちと一緒に荒んだ生活をしてきたから、世の中に不信を抱いているのかもしれません。

真理は僕に構わず、二匹の犬を連れて建物の裏手に回りました。何をするつもりかと訝っていると、彼は短く一言、「人成れ」と言いました。

次の瞬間、そこには犬でなく、二人の若い男がひざまずいていました。

「えっ？ あ、あれ？」

僕はびっくりして、何度も目をこすりました。でもどうやら、まぼろしではないようです。着物は白と黒の違いこそあれ、共に立派な神官戦士の装束でした。

「雪白、今の話を綾女さんに伝えるんだ。黒鉄、おまえはおじさんの所に」

二人は同時に、はっ、と低く答えて、素早く木立の中へと消えました。僕はただ、ぽかんとして立ち尽くしているばかりでした。

「そんなに大口開けてると、虫が飛び込んでも知らないよ」

真理が笑ってからかったので、僕は慌てて口を閉じました。

「今の、いったい何ですか？」

「あの二匹の先祖はね、今は神として祀られているんだってさ。深谷の神殿に連れて来られた母犬には何も変わつたところはないんだけど、あの二匹は特別。飯の姿を取らせることが出来るんだ」

「え……つと、じゃあ、正体は、犬神のお使いなんですね？ 妖じやなくて」

「妖だつたらこの境内には入れないよ。それより早く食堂に行こう」

急かされて僕は我に返り、走りだしました。腹ぺこだと言って飛び出してきたのに、食堂にいなかったら先輩に怪しまれてしまいます。

幸いなことに先輩はまだ席についておらず、僕は言い訳を捻り出さずにすみしました。片付けに手間取っているのかもしれないと思うと、少し後ろめたくはありましたが。

しばらくして着席した先輩は、奇妙なことに何も言いませんでした。皮肉のひとつも来るだろうと身構えていた僕は、かえって落ち着きませんでした。

四 北へ(2)

その翌日、書庫にやってきた真理は、もう調べることはないから、
と言って出しつ放しの帳面などを片付け始めました。

僕も少し迷った後で、それになりました。

「そうですね。ここにあるのは神殿の記録だけだから……『伏し』
については、何も書かれていないだろうし。そういうのは、役所に
でも行かないと駄目かな」

「何があるとしても、見せて貰えるとは思えないよ」真理が頭を振
りました。「ここから北ってことは分かっているんだし、あとは行
く先々で噂を集めるしかないと思う。神官の装束は脱いで行った方
がいいだろうなあ」

せっかく新調して貰ったけど、とつぶやいて、真理は白い着物を
名残惜しげに見下ろしました。

「ここに来たばかりの頃みたいに汚くなってたら、信用して貰える
でしょうけどね。雪解けの沢で転がり回ったら、いいかもしれませ
んよ」

僕がにやにや笑ってからかかと、真理は渋面を向け、それから苦
笑をこぼしました。

「ああ、いざとなったら、そのぐらいしなくちゃいけないかもしれ
ない。あまり汚いのも疑われるけど、身ぎれいにしすぎてもいけな
いなんて、不便だね」

そんな事を言っていると、もう今にも「それじゃあ、これで」と
真理が出て行ってしまふような気がしました。僕は自分の考えに怯
み、小さく息を飲みました。

行ってしまう。そうだ、彼はここから出て行くんだ。

分かっていたことなのに、いまさらながら、その予想は僕の胸を
刺しました。雪が解けたら……それはもう遠くないことですが、真
理は北へと去るのです。僕はここに残って、今までと同じ日を送る

だけ。

これまで僕は、神殿での暮らしに不満や疑問を感じたことはありませんでした。真理がいなくなれば、そんな以前の日々が戻ってくるだけです。そのはずです。なのに、急にそれが耐え難いことのように思われて、僕はうつむいてしまいました。

真理は僕の態度には気付かない様子で、棚を元通りにきちんと整理しています。僕も、のろのろと帳面を取って、棚に戻しました。

黙って作業を続けていると、不意に真理が言いました。

「翼も一人前になったら、どこかの神殿に派遣されるのかな」

いきなり何を言い出すんだろう？　僕は面食らいながら、返事をしました。

「さあ……でも多分、そうなると思います。この神殿には白露先輩も、書管主様もいらっしやいますし、楠本から毎年何人かは見習いが入って来ますから。あまり遠い神殿に送られなければいいんですけど」

「そうか、翼は楠本の生まれなんだ」

「ええ。百姓ですけど、土地は兄二人が継ぐし、姉や妹もいるから婚礼の費用もかかるし、っていうんで、僕は神殿に入れられたんです」

「ふうん。それじゃあ、ここから離れたくないだろうね」

そう言った真理の口調は、どうにも曖昧なものでした。

……もしかして？　いや、でも、まさかね。ありえない。

一緒に来ないか、なんて。

期待と不安がないままになって、僕は口がきけませんでした。何か言えば、砂粒ほどの可能性を潰してしまう……そんな気がして。でも、どっちみち現実には現実でした。真理は小さく頭を振って、独り言のように、こちらを見ずに続けました。

「俺も『しるし』を見付けて、ちゃんとした戦士になれたら、どこかの神殿に迎えて貰えるかな。深谷に帰るのは無理だろうし、身寄りもないから、どこでもいいんだけど」

ああ、そうか。そういう意味か。

僕はがっかりしながらも、自分を慰めるように微笑みました。

「同じ神殿に行けたらいいですね」

頭では、そっちの方が到底ありえないことは、分かっていました。僕が神殿を飛び出して一緒に行く方が、まだしもです。

でも、今の僕が彼にとって何の役に立つでしょう？ この先、真理に必要なのは、雷火さんのような処世に長けた人や、綾女さんのようにすぐれた技と力を備えた人です。そばにいるだけしか出来ない僕の、出る幕ではありません。

——本当に、僕は無力だ。

生まれて初めて、しみじみとそう思いました。

僕がいなければ先輩は仕事が終わらないんだ、とか、書部だからって法部の人に馬鹿にされるいわれはない、とか。そんな風に自信満々に、まるで自分がひとかどの人物みたいに思い込んでいられたなんて、どれだけ僕は無知だったことが。

そうと気付いてしまうと、僕はただ、言葉もなくうなだれるばかりでした。

それから間もなく梅がほころび、出立の日がやってきました。

諭佐法師や法部の人たち、それに僕と白露先輩が、表参道を下って鳥居のところまで見送りに行きました。明主様や法主様とは、ゆうべのうちに挨拶をすませたようでした。

「長らくお世話になりました」

真理が頭を下げると、迎えに来た雷火さんと綾女さんも、僕らに向かってお辞儀をしました。法部の人たちがてんでに、気をつけてとか、元気でな、とか言いながら、真理の肩や背中を叩きます。それから諭佐法師が進み出て、真理に旅の安全を祈念する印を切ると、ささやくようにおっしゃいました。

「そなたはもう、『しるし』を得ているよ」

「えっ——」

真理が驚きに目をみはると、諭佐法師はにっこり笑みを返しました。

「早く気付いてやりなさい。そなた自身のためにも」

思いがけない饒別の言葉に、真理はぽかんとしながらも、はい、とうなずきました。

それから彼は僕の方を向いて、何か言いたそうに口を開きかけ、また閉じました。僕も、何をどう言えばいいのか分からなくて、石になったように突っ立っているだけでした。

ようやく真理が、ぎこちない笑みを見せました。

「それじゃあ、翼……元気で」

「真理も」応じた僕の声は、喉にひっかかってしまいました。「目的を果たしたら、またここに寄ってください。まだ……いるかも知れないから」

「うん」

真理はうなずくと、さよならのしるしに手を上げて、未練を振り切るように踵を返しました。雷火さんが横に並び、二匹の犬がそれ続きます。綾女さんも、

「それじゃまたいつか、お会いしましょう」

と言い残して背を向けました。そのまま三人とも、振り返らずに遠ざかっていきます。やがて一人、二人と見送りの者が参道を上がり、境内に戻って行きました。けれども僕は最後までその場に残り、三人の姿が街道を北へと折れるまで、見送っていました。

ようやく僕が境内に戻ると、それを待っていたかのように、明主様が外へ出て来られました。

「無事に発たれたかね？」

明主様に問われ、僕は「はい」とうなずきました。それから、ほかに誰も聞いていないことを確かめ、思い切って言いました。

「明主様、あの……僕、これからでも明部に入れますか」

いきなりそんな事を言い出したのに、明主様は驚いた様子もなく、いつもの穏和な口調で「もちろんだとも」とおっしゃいました。そ

れも、まるで僕がそう言い出すのを知ってらしたかのような表情で。実際、予想されていたのかもしれませんが。

葦生彦の話は、僕にとっては衝撃でした。神殿に対する気持ちも今までとは変わりましたし、神々を祀るにしても、単に豊饒や安全を祈願するだけでなく、何かほかの大事なこともあるんじゃないかと考えるようになりました。

だから、今からでも明師になりたい。書部の仕事を軽んずるわけではないけれど、祭礼を行う力と知識も身につけたい。どこかでまた、真理のような不運な人を生み出すことのないようにしたいから。僕はそんな決意を、あまりうまくは言えませんでした。ぽつぽつと拙い言葉で申し上げました。明主様は何度もうなずいて、最後に僕の頭をぼんとなでて下さいました。

「では、白露にもそう言っておいで。書管主殿には、私から話しておこう」

「ありがとうございます！」

僕は勢いよくお礼を言うと、書部寮へと駆け込みました。ところが。

「先輩？ 白露先輩！」

どうしたことが、先輩の姿が見当たりませんでした。慌ててあちこち探し回り、見付けたのは結局、参道の脇道、ほとんど人の通らない所でした。

先輩の後ろ姿を見付けて声をかけようとした矢先、木の陰になっていた誰かが、さっと動きました。僕がびつくりしている間に、人影は脇道を下り、つないであった馬に飛び乗ると、風のように走り去ってしまいました。

「……先輩？」

僕がおずおずと声をかけると、先輩がゆっくり振り向いて、おや、とおどけた声をもらしました。

「今の、誰ですか」

「見られちゃったかね。おまえさんが気にすることじゃないよ」

「でも……」

なぜだか、ひどく嫌な予感がして、僕はその場に立ち尽くしました。

馬に乗れる人は、そう多くありません。ある程度のお金持ちとか、貴族とか役人……

役人？ まさか。

僕はまじまじと先輩の顔を見つめました。いつもと同じはずのその顔が、まるで山猫のように思えてきたのは、真理の言葉を思い出したせいかもしれません。

（ネズミ穴の前で待ち続ける猫のように、静かに気配を殺しているはずだよ）

ああ、まさかそんな。

気付かぬうちに、僕はゆるゆると首を振っていました。白露先輩は哀れむような苦笑を浮かべて、言い訳のように肩を竦めました。

「だから、前から何度も言ってるだろう？ 役人の仕事も神官の仕事も同じだ、って」

「……っ！」

それ以上は耐えられませんでした。

ぱっと身を翻し、表参道を駆け降りて、鳥居の下をくぐって。道に飛び出すと、どんどん駆けて行きました。息が上がり、脇腹が燃えるように痛んで、涙があふれて。それでもまだ、僕は走り続けました。

けれどもとうとう足がもつれ、僕は危うく倒れそうになって、立ち止まりました。

それだけ走ったのに、真理たちの姿はもう、どこにも見えません。北へ向かう道は細く曲がりくねり、暗い山の奥へと消えています。

僕は肩で大きく息をつきながら、道の真ん中にへなへなと座り込んでしまいました。

どうか、どうか無事で――

祈ることしか出来ない自分が悔しくて悲しくて、いつまでも涙が

止まりませんでした。

（翼之章・終）

閑話・雪白の嘆息（前書き）

翼之章の途中で変化の真言がいきなり短くなったことの理由。
最終章前の息抜きです。

閑話・雪白の嘆息

吾は犬である。

主は真理殿、弱冠十五にして歴戦の戦士にも匹敵する實力を持つ侍士であり、いたわしい生い立ちのゆえに、並の大人よりも数段深い思慮を備えるに至った、人間にしては稀なる逸材である。

この主に、畏れ多くも犬神様の使いに名を連ねる身として、吾が同胞の弟と共にお仕えしている次第。

お仕えする、と言つても所詮は犬の身とて、何が出来るかと問われればあまり胸を張つて応じられるものではない。主と共に妖と戦い、主がおやすみの間は妖や獣の近寄らぬよう見張り、求められれば人の姿にも成る。

この変化のわざ、実は主が長い真言を唱えずとも可能なのだが、それは伏せてある。吾らは主の命に従うものであり、手前勝手に動くようでは役目を果たせぬからだ。とりわけ吾が弟などは、いささか箍が緩みがちゆえ、命なくして変化せずと約束させておかねば、人成りて盗み食いでもしかねない。

…… もっとも、施しを受けるには人の姿よりも、このままの方が良いようだ。

今も弟は、機嫌よく尻尾を振り振り、何ぞくわえて戻ってきた様子。まったく、主が御堂にて厳しい修練に励んでおいでだというのに、そのしもべともあろう身が、厨で残り物をねだるなど、嘆かわしい。

と、そこへ主の匂いと足音が近付いてきた。弟は分捕り品を自慢しようと、あるいは吾にも分けてやろうとしてか、口から出しかけていたが、慌ててくわえ直すとそのまま飲み込んだ。

「あれ、黒鉄、また何かいいもの貰ったんだね。しょうがないなあ」

苦笑しながら主が鷹揚におっしゃる。まったく、主といいあの男
といいこの神殿の者らといい、総じて人間は犬に甘すぎる。吾が弟
が、尻尾を振って鼻をくんくん鳴らせばお叱りを受けぬと、心得違
いをしてしまうのもやむなしだ。

だが今の弟は、何やらそれどころではない様子だった。ふが、と
妙な声があるので見てみれば、顎をぱくぱくさせ、前肢で必死に口
の周りを掻いている。

「黒鉄！？ どうしたんだい、ちよっ……じつとして、見せるんだ
！」

慌てて主が駆け寄り、顎に手をかける。だがその心遣いすら、愚
弟の恐慌をひどくさせるばかりだった。悲しいかな、神の使いと申
せど吾らはやはり犬なのだ。ヒンヒンと情けない声を上げて弟はも
がき暴れ、四肢で宙を掻く。

「どうしよう、誰か」

主はすっかり青ざめ、助けを求めて周囲を見回したものの、生憎、
辺りには一人も姿が見えぬ。

——が、それがかえって幸いした。

キャン、と一声吠えて、とうとう吾が愚弟は自力で変化してしま
ったのだ。

主が目我真ん丸に見開かれ、絶句されている前で、吾が……ああ
認めたくないものだ、これが弟とは！……吾が愚弟は、便利な人の
手指を口に突っ込み、

「ああ、苦しかった」

上顎に貼りついた菜っ葉を剥がした。

身も消え入る思いとは、まさにこのこと。

穴があつたら入りたい、否、むしろ穴を掘って愚弟を埋めてしま
いたい。吾が前足の間に顔を埋めて恥じ入っている間に、流石は主、
しゃんと気を取り直して厳しくおっしゃった。

「黒鉄、ちよつとそこにお座り。……自分で変化が出来ることを黙っていたのは、いいんだよ。そんなことは怒ってないし、おまえたちが勝手に変化して悪さをしていないことは、俺も分かっているからね。そうじゃなくて、黒鉄、おまえは犬なんだから、食べていいものといけなものの区別はつけなきゃ駄目だろう」

こんこんと諭され、人形のまま愚弟は正座してしゅんとうなだれる。

しばらくお説教を頂戴し、哀れな愚弟は本来の姿に戻った後も、痺れた後ろ肢を引きずって情けない格好を晒していた。むろん、同情する気は起きないが。

「厨の人に言っておかなきゃ。喉を詰まらせそうなものとか、何でもかんでも上げないでください、って」

やれやれと主はため息をつき、それから吾らを振り返って、少し気の毒そうにおっしゃった。

「……黒鉄、もう大丈夫かい？」

萎れていた弟は、途端に嬉しそうに顔を上げて、わふっ、と一声。それを見るともう主は怒ることも出来なくなった様子で、優しく微笑まれた。

ああまったく、なぜにこうも人間は、愚かな犬に甘いのか。

「雪白、おまえは賢いね」

主は苦笑しながら吾の頭を撫でられたが、ちつとも誇らしくなかった。

やれやれ。

（閑話・終）

閑話・雪白の嘆息（後書き）

犬に海苔とか危険ですよという話でした（笑）。

一 隠れ里（1）

春陽之章

—

山深く、世の中から忘れ去られた土地とても、季節の移ろいはやってくる。

雪は日陰に小さくなり、梅が散って、桃がほころび。日当たりの良いところでは、気の早い桜が蕾を紅に染めている。沢に戻ってきた水鳥たちは巣作りに忙しい。

そうした春を目にすると、心が晴れていくと同時に、何やら胸の奥がざわついて落ち着かなくなる。虫や獣たちが動き始め、草木は芽吹き花開くというのに、私だけは季節を知らぬかのように、何ひとつ変わらぬ毎日。岩にへばりつく苔になった気分だ。

そんな事を考えると、ため息がこぼれた。

憂鬱になるのは、この深い霧のせいだろう。薄暗い番小屋の中でじつとうずくまり、小さな節穴から白一色の外を見ているだけでは、誰でも気が滅入る。

だいたい、こんな日によそ者が来ることなど……

……？ 何か、物音が聞こえたような。

そうだ、気のせいではない。足音が近づいている。走っているのか？ この霧の中を、足元も怪しかろうに。

足音は二、三人。何か獣もいるようだ。小屋のそばにある椎の木に気が付いたらしい。道を外れて土手を降り、木の背後に回り込むのが分かる。誰かに追われて、身を隠そうとしているのだろうか。私はじつと耳を澄ませた。

「ったく、しつこい奴だ。融通のきかねえ小役人が、鬱陶しいったらありやしねえ」

「まだついて来てる？」

「ああ。いまいいことにな。大楠の連中め、覚えてやがれ。だから神官って奴は嫌いだ。それ以上に朝廷の連中は反吐が出るほど大嫌いだ。くそつたれ！」

ふむ？ 役人に追われているのか。ならば、罪人だろうか。

「おじさんが好きなものって、この世にあるの？」

「うるせえな」

「うるさいのはあんただよ、お黙り。見付かつちまうじゃないか」

女も一緒なのか。はて、妙な取り合わせの罪人どもだな。しかし朝廷の敵なら、助けてやらずばなるまい。

私は吹き矢を用意して、外の様子を窺った。番小屋、と言ったが、実はこの小屋、つくりは水神の社を装っている。扉の下方にはひとつふたつ節穴が空いており、腹ばいになればちょうど、訪れる者の足が見えるというわけだ。

追われる者たちが息をひそめ、辺りにじつとりと重い静寂が降りる。やがて、不安げな足音が二組、こそこそと近づいてきた。

「ええい、見失ったか。この先は行き止まりだし、どこかそこいらに身を潜めておるに相違ないが、この霧ではうかつに道を外れることも出来ん。くそいまましい」

「霧に紛れて我々をやりすごし、元来た方へ戻ったということも考えられるぞ」

「嫌なことを言うな。足跡は確かにこちらへ続いていた。ちえつ、まったく、なんて霧だ。水神なんぞお天道様の力で干からびちまえ」
ぶつくさ言いながら、二人の役人はそこいらを及び腰で調べている。さもありません、社の向かいの沢は落ちて濡れるだけですむが、こちら側は急な土手、しかも下は沼地だ。足を踏み外せば、ただではすまない。

だから早々に帰るが良いぞ、役人ども。

私は吹き矢に小さな棘を込めて構え、狙いを定めた。そして、フツと一息。

「いてえッ！」

口の悪い方が飛び上がった。いい気味だ。

「どうした？」

「何かに刺された。畜生」

「この辺りはムカデや蛇が多いからな。大事になつてはいかん。ここは諦めて戻ろう」

「仕方あるまい。まったく、なんて厄日だ」

毒づきながらも足が心配らしく、役人はそそくさと帰って行った。よしよし。

用心のため、しばらく待つてから私は身を起こした。同時に、外でもごそごそと身動きする気配がする。

「やれやれ、助かった。水神様々だぜ」

男が言った。私は思わず笑いそうになつて、唇を引き結ぶ。調子のいい奴だ。

私はそつと床板を外し、地べたに下りた。出入りする姿を見られぬよう、社の足元は板で完全に囲まれている。その隙間に目を当て、外を覗いた。霧の中にぼんやりと三つの人影が見える。獣と思つたのは犬らしい。こちらにはまだ気付いておらぬようだが……。

私は声色を使い、ささやくように呼びかけた。

「なんじら、朝廷に仇なす者どもか」

途端に三人とも、ぎよつとなつてこちらを振り返つた。二匹の犬が前に躍り出て、用心深くこちらを覗む。あれはちと手強そうだ。正体を確かめるまで、今しばらく待つべきだったかも知れん。

三人は顔を見合わせ、何やらこそこそと相談をした。三人？ いや、もうひとつ妙な気配がしたようだが、犬のほかにも何ぞ連れておるのだろうか。

ややあつて女が答えた。

「あたしはそのつもりはないんだけど、向こうが勝手に追つて来るのさ。なるたけ誰にも迷惑はかけたくないんだけどねえ」

「何ゆえに追われておるのだ？」

「ちょっとわけありでね、古い巫師の技を受け継ぐ隠れ里を探しているのさ。それで役人どもは、あたしらがやましいことをたくらんでいるんじゃないか、って疑心暗鬼になっているんだらうよ。何てことはない、ごく身内の用件なんだけどね」

女はすらすらと話した。なぜこうも簡単にしゃべるのだらう？

私の声を本当に水神だと思っている風でもないし、嘘を並べてこの場を逃れようとしているのだらうか。

私が訝っていると、女は苦笑をこぼして言った。

「そんなわけなんだけど、良かったら案内しておくでないかい、お嬢さん」

「……！」

なんと。向こうは私の姿が見えているのか？ 思わず私は隙間から目を離し、ぐるりを確かめた。いや、どの板も外れてはいない。

「あんたたちに仇なすつもりはないし、用が済んだらすぐにも出て行くよ。駄目かねえ」

女が頼み込む。いかにも怪しい連中だが、しかし、このままここに隠れていたとて、諦めて去ってくれるかどうか。えい、ままよ。私は腹をくくると、板をずらして外に出た。

「なぜ私が見えた？」

「見えちゃあいないよ。あたしには便利な相棒がいるもんでね。あそつそう、あたしは綾女、巫師だよ。こっちは流れ者の雷火、それと…… あんたたちに用があるのはこの子。真理って名前さね」

順に紹介され、私は彼らを初めてじっくり眺めた。

綾女という女は、巫師というのが本当なら、信用出来るだらう。

真理は生真面目そうな少年で、表情に思慮深さが見て取れる。雷火という男も、皮肉っぽい人相ではあるが、人を騙そうとする小狡さを感じられない。

私はうなずくと、「ついて来い」とだけ言って歩きだした。土手に刻まれた小道は、ほとんど所在が分からないほど細い。いつまでも立ち話をしている場所ではないし、万一あの役人どもが戻っ

てきたら厄介だ。

「見失うでないぞ。道しるべなどないし、沼に落ちたら助けようがないからな」

土手を降り、生い茂る葦をかきわけ、崖の下に出る。水を含んだ苔に覆われた岩が、腰高のあたりで深くえぐれているが、その中へ潜り込めば、実は岩陰に細い抜け道がある。

横這いになって岩と岩の間を抜けると、ようやく少し開けた木立に出るが、やはり取り立てて目印になるものはない。里の者しか知らない、道なき道だ。

「ここからは目隠しをしる。互いに手をつないでおれば、足を踏み外して沼地に落ちたりする心配はないからな。そら、これを使え」
袂に入れておいた細い手拭を渡すと、三人は不安そうではあったものの、素直に従った。

「用意がいいんだな」

雷火が手拭を結びながら言った。答える必要は感じなかったので黙っていたが、これも見張り番の役目だ。万一、何者かを里に入れる必要があれば、目隠しをさせて案内せねばならない。……犬はまあ、仕方あるまいが。

三人が手をつないだのを確かめると、私は真理の手を引いて、ゆっくり歩きだした。

木々の間を縫って斜面を登り、岩を越え、窪地を横切って別の崖に突き当たる。そこまで来て私は立ち止まり、振り向いた。

「目隠しを取って良いぞ。しかしこの崖は、犬には越えられぬな。どうする」

愕然と頭をのけぞらせた三人から、すぐには応えがなかった。やあつて雷火が、嘘だろう、と言いたげに情けない声を出した。

「おいおい……まさか、ここを登るのかよ」

「案ずるな。見えにくいが、手掛かり足掛かりはあるのだ。しかし犬の足ではな。誰か背負うて登るか？」

「……………」

雷火と真理は顔を見合わせ、やれやれと頭を振った。

「仕方ない。雪白、黒鉄。人成れ」

真理が命じた途端、二匹の犬はその姿を変えた。……なんとまあ。しかもただの人ではない、神官戦士の装束ではないか。

「おぬし、さては法師か」

私が驚いてただと、真理は首を振った。

「厳密には法師じゃない。位を授かっていないから」

そこで彼は顔を上げ、まっすぐに私を見据えた。

「神官か、という意味で訊いたのなら、確かにその通りだよ。でも、巫師に対して敵意はないし、朝廷の手先でもない。一身上の理由で、力を借りたいんだ」

ふむ。嘘を言っておるようには見えぬが、このまま連れて行っても良いものかどうか。二匹の犬は、元のままでも手強そうだったが、人の姿をとった今では、相当な手練であろうと見える。里を荒らすつもりであれば、この二匹だけで事足りるかも知れん。

「嘘じゃないよ」

考えを読んだように、綾女が口を挟んだ。私が問うまなざしを向けると、綾女は少しためらってから、思い切って言った。

「里の人たちには当面、内証にしてほしいんだけどね。この子にはちと、厄介な御霊が憑いているのさ。神殿のやり方では清められないようなんで、あんたたちの霊場でお弔いをしたいんだよ」

「そのようには見えぬが」

私は真理に目を戻し、小首を傾げた。見たところ、御霊の姿が肩の後ろに揺らいでいるでもないし、憑き物の悪い気配も感じられない。私にはあまり霊力はないが、しかしそれほど厄介な御霊ともなれば、なにがしか感じ取れそうなものだ。

疑いの目を向けた私に、真理は「今のところはね」と答えた。

「後からやって来るんだよ。つかず離れず、姿も見えたり見えなかつたりだね。でも、俺が……我を忘れるほど怒ったりすると、あつと言つ間にすぐそばに現れて、禍をなすんだ。君たちが朝廷の敵な

ら、恐れる必要はないかも知れないけど」

なるほどな。かつて朝廷に討たれた者の御霊が憑いたわけか。

「首塚でも壊したか？」

何げなく言うたのが、凶星だったらしい。真理はびっくりと身を震わせ、綾女と雷火が顔をこわばらせた。うむ、失言だったか。

「ああ、すまぬ。何しろよそ者と話をすることなど、久しくなかったものでな。口のきき方がよう分かんのだ。ともあれ、そういう事情であれば致し方あるまいな。ついて来い。手掛かりをよく見ておけ」

それだけ言うと、私は崖を登り始めた。慣れた者にはさしたる苦勞もないが、後から来る者らは難儀しているようだ。てっぺんから見下ろすと、崖の下で綾女が雪白と何やら相談している——と見るや、雪白はひょいと綾女を背負い、軽々と跳躍した。

とん、とん、と数回、岩を蹴っただけで、もう上に到着する。綾女は雪白の背から降りると、ご苦勞さん、などと労った。開いた口がふさがらぬ、とはこの事だ。

後からえっちらおっちら登ってきた雷火が陰悪に唸ったのも、無理はない。

「こんの……てめ、一人だけ、楽しやがって」

「何をお言いだい、了見の狭い男だね。か弱い女にこの崖を登れつてのかい？」

「この小娘は登ったじゃねえか」

「不躰なこと言うもんじゃないよ、年頃のお嬢さんをつかまえて小娘なんぞと……そう言えば、あんたの名前を聞いていなかったね」

いきなり話を振られて驚き、私はぼろりと答えてしまった。

「ハルヒ。春の太陽だ」

「いい名前だね」

綾女はにつこり笑ったが、どちらかと言うと、男どもの方が自然な反応だろう。何とも言い難い顔で、どう思う、と相談するかのよう目配せを交わしている。

「世辞は良い。この名が似合わぬのは自分で良く分かっておる。どうせ私は愛想がない。単に、春に生まれたというだけのことだ」

亡き母にも、耳にたこが出来るほど言われたものだ。女は愛嬌がなくてはいけない、笑顔が福を呼ぶのだ、と。しかし、持って生まれた性分というのは、仕方がない。

「自分をそんな風に言うもんじゃないよ」綾女が言った。「女は皆、その身に花を宿しているのさ。あんただって、今はまだ眠っているだけで、時が来ればその名の通りに春爛漫となるさね」

「そんな事はどうでも良い」
まったく、なぜよそ者にまで、要らぬお節介を焼かれねばならんのだ。

私は真理と雷火の息が落ち着いたのを見計らい、さっさと歩きだした。

一 隠れ里（2）

里に入ると、何はともあれ、長である佐伯^{サエキ}の本家へ三人を連れて行った。

道々、里の者がことごとく振り返ってこちらを見つめた。じきに噂が飛び交って皆に知れるだろう。よそ者が里に入るのは、私が物心ついて以来初めてのことだから、皆が珍しがるのも当然だ。

「豊かな里だね。いい場所だ」

真理が辺りを見回してそんな感想を述べた。その面に浮かぶ微笑が懐かしそうに見えたのは、気のせいだろうか。

「我々はここを新聞^{あいま}と呼んでいる。山奥の谷ではあるが、ここを拓いたご先祖たちの苦勞の甲斐あって、暮らし向きは豊かだ」

簡単に説明して、私も改めて里を眺めた。谷間ではあるが、田を作るに良い平地もいくらかあるし、斜面には田畑が棚のように連なり、一部には果樹が植えられている。梅や桃はまだ花盛りだ。低地には細い川が流れ、日を照り返して白銀のようにきらめいている。

変化のない退屈な土地ではあるが、やはりこうして見ると愛着を感じるものだ。

もともと、霧が立ち込めた時などは、ご先祖の恨みつらみが澱んでいるようで、息苦しくもなるのだが……。

その、先祖代々受け継がれてきた重苦しさは、本家の屋敷が源であるかに思われた。立派な構えの屋敷は古めかしいだけでなく、門をくぐると空気がねっとりと重くなったような、何とも言えない気分が襲われる。毎度のことながら、眉をひそめずにはいられない。

三人のよそ者もそれを感じ取ったらしく、不安げにそこらを見回した。

「歓迎されるとは思えねえが、こっちとしても早々に退散してえ雰囲気だな」

ぼそりと雷火がつぶやいた。真理はまるで吐き気を堪えているか

のような顔で、苦しげにうめく。

「なんだか……いっぱいいるね。大きいのもいるけど……細かいのが集まって、区別がつかなくなっている感じだ。全体の気配は『あれ』に似てる……」

庭にいた下男が来客を告げたらしく、すぐに佐伯の若様みずから迎えに出てこられた。いつ見ても青白いお顔に、癪の強そうな微笑を浮かべておいでだ。

「春陽殿、ようこそ参られた」

背後でこそこそと、「気取ってやがる」とかなんとかささやき交わすのが聞こえ、若様が目付きを険しくした。私は振り返り、きつい口調で咎めた。

「おぬしら外の者には分からぬだろうが、この方はそもそものはじめに谷を拓いた佐伯家の裔^{すえ}、谷の者にとっては大事な御方だ。無礼を申すでない」

既に旦那様もなく、奥方様も臥せりがちの今では、ただ一人の跡取りでいらっしゃるのだ。しかしそうと言っても、よそ者にはありがたみが分からぬらしかった。

「こりや、どうも失敬」

雷火がおどけてひよこりと頭を下げる。真理と綾女は、それよりは真面目に、きちんと腰を折ってお辞儀をしたが、若様の機嫌は直らなかった。

「客人方。よほどの事情があればこそ、春陽殿が案内されたのであらうが、この里においては我らに従^{かまち}ってもらうぞ。参れ」

尊大に命じて、こちらが上がり框^{かまち}に足を乗せもせぬ間に奥へ入る。やれやれ。

私が三人を連れて客間へ行くと、既に朱香様^{シユコウ}がお待ちかねだった。若様の祖母君で、実質的に里の事々を仕切っているのは、この方だ。里には他にも何人かの巫師がいるが、祭事を執り行えるのは、今のところ朱香様おひとり。

「おお、春陽殿、息災で何よりじゃの。案内ご苦労であった。そな

たは下がって、休んでおるが良い。あまり外の者にかかり合つて、間違いがあつてはいかんでな」

穏やかな話しぶりだが、朱香様の言葉には力がある。逆らえず、私は頭を下げて退出するよりほか、なかった。しかし休んでいると言われたからには、後でまたお召しがあるに違いない。いつも通り茶の間へ行くと、女中が麦湯を用意してくれた。

さて、あのよそ者らは何と言つて朱香様を説くつもりだろう。事情を伏せておつたのでは話も進まぬであろうし、代償に差し出す金品でも隠し持つておるのだろうか。

それにしても、彼らが役人に追われていたということは、いまだ朝廷が我らを探しているわけか。これは驚いた。

里の年寄りたちは皆、口を揃えて言う。我らは虐げられた者、故郷を追われた者なのだ、と。

しかし私にとっては、ここが生まれ故郷だ。彼らとて同じであるに、よくも見知らぬ土地を恋しがつていられるものだと思つていたが……朝廷の方でも、我らを忘れておらなんだとはな。

つらつらとあれこれ思い巡らせていると、存外早くに、お召しがあつた。

「春陽殿、使い立てして申し訳ないが、客人が里を見て回りたいとおっしゃるのでな。一通り案内して、夕餉までには離れにお戻り頂くようにしておくれ」

朱香様は相変わらずにこにこしていらした。どういつ話になつたのかは分からぬが、三人のよそ者は客人として迎えられることになつたようだ。

言われた通り、三人を連れて外へ出ると、肩の荷が降りたようにほつと息がもれた。雷火は安堵を隠しもせず、盛大に伸びをする。

「上首尾だつたようだな」

私が漠然と問いかけると、雷火は口をひん曲げた。

「恐れ入ったぜ。あの婆さん、一目見るなり真理に憑いてる奴の正体まで言い当てやがつた。まあ、おかげでくだくだ説明せずにすん

だわけだが、ひやつとしたぜ」

「なんという不敬な物言いだ。いかによそ者とは言え、度が過ぎるぞ。おぬしの性分であろうが、それでは里の者の反感を買っただけだ。少しは控えよ」

「ご助言、いたみりまする」

厭味たらしく答えて、雷火はフンと鼻を鳴らした。まったく、何なのだこの男は。

私がため息をつく、横で真理が苦笑した。

「朱香様が温厚で助かったよ。でも結局、うまくごまかされたな。本当に御霊を鎮めて貰えるのかどうか言質を取れなかったし、霊場もただ『お山』としか教えて貰えなかった。まあ、いきなりは無理だろうと思ったけど」

「そりゃあね」綾女が相槌を打った。「葬儀なんて、おいそれとよそ者が割り込めるもんじゃあないし、霊場だって、いつでも誰でもほいほい入れるわけじゃないだろうよ。ぼちぼち信用を得て、里の衆がお山に入る時にでも招いて貰うしかないさね」

「誰か人死にがおりや、手っ取り早いぜ」

雷火の言葉に、私だけでなく真理と綾女までが、揃って顔をしかめた。はからずも同じ気分を共有してしまい、私はなんとなくばつが悪くなつて、咳払いをする。

「おぬしら、よくこの男に我慢しておるな」

「まあ、これも縁だしね」

綾女が諦めた風情で言い、それからころりと笑顔になつて振り向いた。

「縁と言えば、お春ちゃん、あの若様の許婚なんだって？」

……『お春ちゃん』？

胡散臭げな半眼になつた私には構わず、綾女はにこにこしている。げに恐るべし、よそ者の鈍感さ。いや、それとも、こんな事にいちいち戸惑うこちらが、土臭い田舎者ということなのだろうか。私は自分にため息をついてから、やれやれと返事をした。

「朱香様は、そんな事まで話されたのか」

「ちよつとした話の流れでね」

何を思い出したのか、綾女はくすくす笑っている。横で真理が顔を赤らめた。何なのだ、いったい？ 私が不審げにしていると、雷火がにやけた顔で言った。

「あの若様、真理に許婚を取られやしねえかとピリピリしてやがったのさ。まあ奴さんの気持ちも分かるね。あの青瓢箪よりや、真理の方がよっぽどか男前だからな。心配しなくても真理はまだ若すぎる、って言ってやったが、しかし最後まで、おっかねえ顔で睨んでやがったなあ」

ぶるる、とふざけて身震いし、雷火は無遠慮にげらげら笑った。

「……若様が？」

今度は私が赤面する番だった。気恥ずかしいと言うよりは、困惑のゆえに、だった。若様はあまり情をあらわす方ではないから、許婚とは言っても、これまで特に大切にされたというようなことはない。だが……。

「おやおや、可愛らしいこと」

綾女にからかわれ、私はムツとしてしかめ面を作った。

「よそ者があれこれクチバシを挟むでない」

「おや、ごめんよ。そんなに照れなくてもいいじゃないか。でもねえ、お春ちゃん、ここだけの話……」

と、綾女は声をぐつとひそめ、耳打ちした。

「女同士だから言うんだけど、あんたはあの若様でいいのかい？ あんまり丈夫じゃなさそうだし、癪の強そうな様子じゃないか」

「おぬしはつくづくお節介だな」

私は呆れてそう応じた。里の者でもなかるうに、他人の事情を嗅ぎ回って、何のつもりやら。だいたい、良いも悪いもあったものではない。この里では朱香様の言葉がすべて。本家の血筋を残すために、分家の私を嫁に迎えよと仰せられたのなら、それで決まりだ。

「私に取り入っても、里の秘密を明かしはせぬぞ」

「誰がそんな姑息なこと、たくらむもんかね。あたしはただ……」
綾女は憤慨したが、不意に言葉を切った。そして、むつつりと不機嫌に黙り込む。その肩で何かが動いたように見えたが、見定められぬ間に消えた。

なんとなく気詰まりな雰囲気のまま、私は彼らを連れて里へと出た。

見るほどのものなど何もなく思うのだが、真理はそれでも嬉しいらしく、足取りが軽やかだ。その横顔に浮かぶ笑みの優しさに、気付けば私は何度もそちらへ目をやってしまっていた。

里の衆も同じらしく、最初は警戒してこちらを睨んだり、じつとりしたまなざしを向けたりするのだが、じきにぼかんとした無防備な顔になっていく。

しかしそれは、雷火が言うように真理が『男前』だから、というわけではないだろう。田畑や山や小道や、我々にとつてはありきたりのものに、真理は温かなまなざしを注いでいる。よそ者であるにもかかわらず。そのことが驚きであり、同時にまた……喜ばしい誉れのように思われたのだ。

いつの間にか私の歩みは遅れ、二匹の犬と真理が先頭に立っていた。だが、不思議とそれを奇妙には思わなかった。なぜかは知らないが、真理はこの谷を愛でている。その邪魔をする気にはなれず、私は黙って、彼の足の向くままに従って行った。

一通り里を端から端まで歩くと、ようやく真理は足を止めた。

「この里が気に入ったか？」

私が声をかけると、真理はハッと夢から覚めたように振り返った。そして、少し気恥ずかしそうにうなずいた。

「うん。俺が生まれ育った深谷とよく似てるんだ」
なるほど。ふるさと、というわけか。

「私はここを離れたことがない。だから郷愁というものはよく分か
らぬのだが、やはり故郷は恋しいものか」

「そうだね。懐かしいばかりでもないけど、やっぱり、自分の一部

だから」

伏し目がちにそう言って、真理は寂しげに微笑んだ。

自分の一部、か。してみると私にも、この新聞の里そのものが、すっかり染み込んでいるのかも知れない。どこに行こうとも、捨てたり逃げたり出来るものではないのだろう。

そんな事を考えていると、後ろで雷火がつぶやいた。

「生まれ故郷つてもんは、たとえ二度と戻れなくても、自分の中では消えねえもんだ。たまに厄介でもあるが……だからこそ、どこに行っても生きていけるのかもな」

おや、存外まともな事を言うものだ。私は振り向いて顔を見てやりたくなつたが、思い直してあらぬ方を見やった。

外の世界をさすらつてきたこの者らには、それぞれに事情も、複雑な思いもあるのだろう。私にはそれを想像することも難しいが。

私たちはそのまましばらく、三者三様の沈黙の中で佇んでいた。

二 侵入者（１）

二

三人のよそ者は、性急に目的を達しようとはせず、まずは綾女が言うところの『信用を得る』ことを第一と決めたようだった。

綾女は巫師であるから、朱香様の教えを請う形で、村人のために働いた。病や怪我を癒したり、新しい鋤や鍬が長持ちするようまじないをかけたり、といったことだ。不思議とよく当たる占いで、村人の相談にも乗った。そうして綾女は順調に村人の心をつかみながらも、朱香様の威光をないがしろにすることのないよう、気を遣っているようだった。

一方で雷火は、悪さをする妖があらぬから、仕方なく力仕事全般に手を貸した。最初はぶつぶつ不平を言っていたが、やってみると性に合ったらしく、壊れた水車を直したり、田畑を耕したりと、存外まめに働いた。

真理も雷火と共に細々した仕事をこなしたが、二匹の犬がいることから、里の周縁を見回ることが多かった。畑の作物を狙う獣を寄せ付けなためだ。神官であることを知られぬよう、法術は決して使わなかった。

里の者は彼らの目的や身の上について、朱香様から何も聞かされず、好き勝手にあれこれと憶測していた。私に真偽をただしに来る者もいたが、もちろん、明かしはしなかった。

何日かすると、朱香様は私を呼んで、真理から目を離さぬよう仰せになった。

「あの者が里に仇なすとお考えですか？」

さすがに私は訝って問うた。それならば、早々に追い出してしまえば良いようなものを。

だが朱香様は、鷹揚に笑っておっしゃった。

「そうではないよ。ただ、早々に里を去る気を起こされては困るのじゃ。あの者らになるだけ長く留め置き、役立つことはすべて、学び取らねばならぬのだな」

「あ……なるほど」

閉ざされたこの里にあつては、外の世界の動向や技術を知る機会がほとんどない。時には外の者から新たな知識と技を得なければ、いかに天険に守られた里とは言え、危難を防ぐことは難しい。

「それで、あの者らを歓迎なさったのですね」

納得した私に、朱香様は満足げにうなずかれた。

「さよう。そなたならば歳も近いし、何より女子ゆえ、真理も気を許すじやろう。あの者が我らに進んで協力する気になるよう、せいぜい親しゅうなることじゃ。良いな？」

「……はい」

その仰りようにいささか引つかりはしたものの、朱香様直々のお言葉とあらば、おろそかにはできない。以来私は、畑仕事の合間を縫って真理について回ることにした。真理が他の村人と共にいる間は良いが、里の外れに出る時は、必ず後を追った。

しかし数日経つと、さすがに真理も、私の振る舞いを不自然だと感じたらしい。苦笑まじりに言った。

「迷子になると心配されているのかな、それとも出て行って朝廷の兵を手引きすると思われているのかな」

後ろめたさがなかったわけではない。だが、正直に話すなどというのは論外だった。私はあれこれと言いつつ諷を考えたが、真理は返事を求めているわけではなかったようで、いつもと変わらず見回りを始めた。

後についてしばらく歩き、私は不意に答えを見つけた。朱香様より仰せつかったから、だけではない。私自身、このつとめを進んで果たしたいと思っていたのだ。

「……私は外の世界を知りたいのだ」

つぶやきはごく小声だったが、真理は耳聡く聞き付け、足を止め

て振り返った。二匹の犬は少し先を嗅ぎ回っている。辺りには人の姿もない。

私はまっすぐに真理の目を見て、静かに、しかしはっきりと言った。

「私はこの里で生まれ、育った。外の世界のことは、代々の口伝でしか知らない。朝廷という敵のことや、神殿の暴虐、見たこともないはるかな故郷のこと。だがそれらは……私にとっては、真偽の定かでない又聞きの話にすぎない。だから、おぬしの口から——直に外の世界を旅してきた者の口から、本当の話を聞きたいのだ」

しゃべり出すと、止まらなかった。こんな事を言うべきではない、不埒な考えだ、と頭の片隅で警告が瞬くのだが、まるで堰を切ったように言葉があふれ続ける。

「先祖たちの恨みを通さば、歪んだ世界しか見られぬ。私は水神の社で見張りをすることが多いが、あの社に時折やつてくる外の村人は、実に素朴だ。我らの存在など夢にも思わぬだろうし、恨みつらみとは無縁に見えて、それが時々羨ましゅうてならぬ」

意図せず、涙がこぼれた。そうだ、私はあの者らが羨ましかった。何も知らず、社へ祭りの赤飯や芋団子などを供えに来て、手を合わせて祈る姿。そこには、敵を滅ぼしてくれとの願いも、いつか仇を討てるようにとの怨念もない。私もあちら側に生まれたかった、と望みさえ——。

これ以上まくし立てては、言うてはならぬことまで言うてしまいそうで、私は唇をぎゅっと噛んで堪えた。どうにか嗚咽をおさえこみ、私は涙を拭いて言った。

「……すまない。呆れただろうな、会って間もないよそ者に、こんなことを」

真理は驚いた様子ではあったが、私の言葉に笑みをこぼした。

「会って間もないよそ者だからこそ、言える事もあるよ」

「そうか。それも道理だな」

それだけ言つて、私はまた、目頭を押さえた。

私が落ち着くまで、真理はじつと待っていてくれた。それから、私がおもう言いたいだけ言ってしまったと判断したらしく、何げない風情で口を開いた。

「外の世界と言っても、君が思うほど羨ましいものじゃないよ。俺が生まれ育った谷も、ここほどじゃないけどやっぱり閉鎖的で……なんていうか、凝り固まるところはあったし。ちよつと大きな里や町に出ると、大勢の人の欲ばかりが渦巻いているように感じられて、息苦しいところが多かった。そりゃ、人が多いところには善い人も当然いるんだろうけど、小さな星明りみたいなもので……町が賑やかに華やかになるほど、その眩しさにかき消されてしまうんだ。そうでなければ、強欲な人間の吐き出す黒い雲が、空を覆ってしまうし」

「そして道に迷う者がますます増える、というわけか。外の世界も、住み良いところばかりではないのだな」

「うん。俺自身もいろんな『雲』に巻き込まれたよ。間違った方法に頼り、よそ者の命を奪ってでも、豊かな暮らしを守ろうとする村とか。不正を働き大勢の人を欺いてまで、お金にしがみつく人もいた。そんな人に取り入って甘い汁を吸おうとする、ならず者たちもその度につくづく嫌になって、憎しみや失望が背中にずっしりのかかる気分がした。それこそ、背後の怨霊みたいだね」

「……………」

「それでもたまには善い人に出会えるから、望みを持てるし、俺も……誰かの希望になれるようにと思うんだ」

「おぬしは強いのだな」

思いがけず厳しい世界のありようを聞かされ、私はうつむいてしまった。

「私などでは、そんなところで生きては行けまいな」

「そこまで悲観しなくてもいいよ」真理が笑った。「俺が特別、運が悪いのかも知れないし、穏やかで平和な暮らしを営んでいる村も、きつとあるはずだよ」

そう言ってから、彼はふいにおどけた顔を見せた。

「もつとも、その言葉遣いをなんとかしないと、奇異の目で見られるかもしれないけど。君の話し方は特別なんだね。実を言うと最初、この里の人は皆そうなのかと思って、身構えてたんだ」

真理が笑い、私もつられて苦笑した。

「そうではない。佐伯の一族だけだ。私は分家だが、それでも里の中では特別な立場なのだと教え込まれて育った」

「ふうん……ちょっと妙だね」

小首を傾げ、真理は興味深げにつぶやいた。何が、と私が目顔で問うと、彼は屋敷の方をちらつと見て、続けた。

「ここに来る前、大楠の神殿でいろいろ調べ物をしたんだけど、その時に『佐伯』に関する記述も見かけたんだ。そもそもが『佐伯』ってというのは、朝廷側から見た言葉なんだよ。元々の意味は『騒ぐこと』で、山野に住んで盗賊まがいの生活をする者たちを、佐伯とか国巢くすとか呼んだ。今はもう使わない言葉だけどね。君たちの先祖がいつ、どこから、この谷に逃げ込むことになったのか知らないけど、最初から佐伯姓だったとしたら、妙な感じだと思ってさ」

「ふむ、それは初耳だ」私は驚いて目をしばたいた。「確かに妙だな。朝廷側から勝手に佐伯などと呼ばれたのなら、首長の一族がそんな姓を用いるはずはない。となれば……朝廷の目をくらすために、本来の姓を隠して自ら佐伯と称したのではないか？ 分家の我が家にも言い伝えられている姓があるが、決してそれを名乗ることはせぬぞ」

「そうかな」

真理は、まだ何かが引つ掛かる、という風情で眉を寄せていたが、じきに頭を振って歩きだした。

「まあいいや。ところで、春陽は例のお山には登ったことがあるのかい？」

「無論だ。しかし教えぬぞ。朱香様の許しがなくてはな」

「分かつてるよ」真理は笑った。「それに教えてもらったとしても、

案内なしで登るほど向こう見ずじゃない。作法やしきたりを無視して、御霊の怒りを買いたくないからね。この辺りの山はどれも強い力が感じられるし、被いに来て逆に祟られちゃ、お笑い草だ」

「分別があるのだな。ならば障りのないことだけでも話してやろう。この辺りには、霊場である八千穂岳のほかにも神の宿る山が多い。たとえば、月夜に頂へ登れば変若水（をぢみず）が汲める、という山もある」

「ヲチミズって……月の神が持っているっていう、若返りの霊水？」
「そうだ。一口飲めばどんな傷も病もたちどころに癒え、老いた者は若返る」

私は真面目に言ったのだが、真理は冗談だと思っただけ。愉快げに問うてきた。

「誰か飲んだ人がいるのかい」

「言い伝えだがな。我らの先祖がここにたどり着いた時、誰もが数多の傷を負い、疲れ果てていた。ちょうど煌々と明るい月夜であったが、小さな山の頂にひときわ明るい光がひとすじ、降りていたそう。うだ。どうにか歩ける男が二人、互いを支え合いつつ登ってみると光の下に泉が湧いていた。あまりにその水が美味そうなので、掌にすくって飲んでみると、たちまち体に力が満ちてきたという」

話す内に、真理は笑いをひっこめ、真剣に聞き入ってきた。そこで私は、母から聞いた話を思い出しながら、より詳しく語った。

「二人の内の一人は、皆にも飲ませようと両手で水をすくった。だがもう一人は欲を出し、泉に顔を突っ込んで腹いっぱい飲んだ。そのあさましさに月神がお怒りになり、泉は消えてしまったそう。罰当たりな男は飲んだ分だけどんどん若返っていき、幼子から赤ん坊にまでなって、とうとう最後には一滴の露と化した。残された男は、両手に水を湛えたまま、急いで山を駆け降りた。不思議なことに、その水は決して手からこぼれず、皆が一口ずつ飲むまで尽きることがなかったそう」

「……その男が、佐伯のご先祖ってわけだ」

「さよう。だから、里の者は皆、佐伯の一族に恩がある。元々皆を

率いてきたのも、佐伯の者だというしな。泉があつた場所には、祠を建てて月神を祀つてある。見事な桜の樹があつて、花の季節には良いものだぞ」

「へえ。それは見てみたいな」

真理の声が無邪気だったので、私は思わず「良いとも」と応じそうになり、慌てて言葉を飲み込んだ。

「うん、まあ、あの山ならよそ者が入つても支障はあるまいが……朱香様におたずねしてからだな。お許しがあれば、案内しよう」
「楽しみにしてるよ。さて、そろそろ戻ろう。雪白、黒鉄！」

真理が呼んだが、二匹の犬はなぜか、戻つてこなかった。それどころか、里の外れへと続く道を、どんどん遠ざかつていく。

「雪白、黒鉄！ 戻れ！」

困惑し、真理が大声を上げる。二匹は立ち止まり、くるりとこちらを向いたが、その場に踏ん張つて動こうとしない。

「おかしいな、どうしたんだろう」

「何か見付けたのではないか？」

二人して首をひねっていると、背後から羽ばたきの音が近づき、真つ黒な鳥がバサツと頭の上を飛び越えていった。あれは何だ？ 鴉にしては大きすぎる。

「闇鷲だ」首を反らせて真理が言った。「綾女さんが何か……」

言いかけたところで、当の本人が駆けてきた。雷火も一緒だ。

「何かあつたの？」

真理が顔色を変えて問う。返事は「さあ」という、何とも頼りないものだつた。

「闇鷲が何か見付けたみたいでね。あたしを呼びに来たんだよ。里の外には出て行かないように命じてあるから、ぎりぎり境の辺りなんじゃないかね」

「まさか、役人がここを見付けたんじゃないよね」

「だったら警鐘が打ち鳴らされるはずだ」

私は即座に否定した。番小屋にも、ここに至るまでの道筋にも、

朱香様の目となり耳となる妖らが潜んでいる。変事があればすぐにも知らせが行き渡るはずだ。

「ごちゃごちゃ言ってねえで、様子を見に行くぞ」

雷火がじれったそうに言って、一足先に駆け出した。私も慌てて走りだす。

人間たちがやって来るのを待つて、二匹の犬も走りだした。耳は立っているし、鼻面に皺も寄っていない。何を嗅ぎつけたにせよ、脅威というわけではなさそうだ。だから朱香様も、まだお気づきでないのだろうか？

田畑の間の細い道を走り、木々の茂る小高い丘を登り詰めると、例の断崖の上に出る。

黒い鳥がそこまで飛んで姿を消し、二匹の犬は崖っぷちから下を覗き込んで、ゆっくり尾を揺らしていた。息を切らせながらも、真理が用心深く身を乗り出す。そして、あつ、と短い声を上げた。

「誰か倒れてるよ」

「なんだ？ 里の奴が崖で足を滑らせて落っこちたのか」

雷火が拍子抜けしたように言い、ひょいと首をのばした。私も崖の縁に近寄り、下を見る。真理の言った通り、見慣れぬ若者が崖下で伸びていた。

「里の者ではないな。どうやって朱香様に気付かれず、ここまで来られたのだろうか？」

「ああもう、揃いも揃って薄情な連中だね！ まず息があるかどうか、確かめるのが先だろう？ 正体だの何だの、そんな事は後回しでいいじゃないか」

綾女は憤慨するや否や、崖を降り始めた。

「おい待て、危ねえぞ！ 待てたら、この馬鹿！」

雷火が慌てて後を追う。私と真理は顔を見合わせ、何とも言い難い表情になった。人間、慌てるとまっとうな考えが浮かばぬものらしい。やれやれといった風情で、真理が二匹の犬に命じた。

「雪白、黒鉄、人成れ。綾女さんたちが落ちないように助けるんだ。

それと、下にいる人が息をされていて、動かしても支障ないようであれば、ここまで運んで来い。……頼むよ」

若い男の姿になった黒鉄は、笑いを堪えて「承知」とうなずき、雪白は主の代わりとばかりに深いため息をついて、無言で崖を飛び降りた。

上から見守っていると、綾女が黒鉄の手を借りて地面に降り立ち、よそ者に駆け寄って傍らに膝をついた。脈を取ったり、傷を確かめたりしているようだ。

「生きてる？」

真理が声をかけると、綾女はこちらを見上げてうなずいた。

「頭にこぶが出来てるね。あとは擦り傷と打ち身が山ほど。でも、大事なようだよ。役人の格好とは違うけど、そこらの百姓じゃないね。どうするかい？」

問いかけられ、真理が私を見た。どう、と言われても……放っておいて、のこのこ帰らせるわけにゆかぬことは明白だろうに。

「朱香様の元へ連れて行き、詮議にかける。それよりほかにあるまい」

「詮議ねえ。怪我人なんだから、お手柔らかに頼むよ」

綾女が言った時、雷火もようやく崖を降りて駆けつけた。そしていきなりぎょつとして棒立ちになる。まるで死人でも見たかのように。

どうかしたのか、と誰に問われるよりも早く、雷火は何事かつぶやいた。綾女が「何だって」と聞き返す。だが雷火は答えず、ふらふらとよそ者に近寄り、膝をついて、その顔を確かめた。

「おじさん！ まさか、知ってる人？」

真理が叫ぶ。うつむいたままの雷火の頭が、こっくりとうなずいた。

「弟だ」

二 侵入者（2）

その者は、雷火の弟にしては随分若く、顔立ちもあまり似ていなかった。

「間違いない。弟の晴晶だ。^{セイショウ}なんでこんなところに……」

里に戻る道すがら、雷火はずっと呆然としていた。

崖の上まで晴晶を運び上げたところで、屋敷の下男が荷車を引いてやって来たので、それに乗せて行くことになったのだ。下男は朱香様に遣わされたに違いないが、朱香様はいつから、このよそ者に気付いておられたのだろうか？

不審に思っていると、綾女がそつと耳打ちした。

「崖下に雲隠れのお札が落ちていたよ。破れちまってたけど、どうやら効き目は確かだったみたいだね。こいつを身に着けて、朱香様の目を逃れていたんだろうよ」

私は息を飲み、気を失ったままの若者を見下ろした。では、里の在処のみならず、そこには無数の目が光っていることも承知だというわけか。いったい何者なのだ？

目を覚ます前に、ひと思いに殺めてしまった方が良いのではなからうか。

そんな考えがちらと胸をよぎったが、傷ついて血の気の失せた顔を見ると、己の卑怯さが恥ずかしくなった。

「しかし、本当にあんたの弟なのかい？ あんまり似てないし、第一もう何年も会ってないんだろう。確かにそうだと言える証でもあるのかい」

綾女が雷火に尋ねた。私と真理も、答えを聞こうと目を向ける。

「晴晶とは腹違いなんだ。俺のお袋は早くに死にしまったんでな。もう……かれこれ十年は会ってねえが、この顔を忘れるわけはねえよ。小っこいくせに、いつも俺の後を追っかけて来やがって。いつ

たい何度、危ねえ目に遭ったことか」

懐かしそうに苦笑し、雷火は弟の頭にそつと手をかけて横を向かせた。

「ここんところに傷痕があるだろう。これも、俺の真似して木登りして、落つこちた時のもんだよ。懲りない奴だ、十年経つても同じことしてやがる」

その笑みにつられて、綾女と真理が小さく笑った。私は複雑な気分で目をそらし、行く手の屋敷を見やった。

朱香様は、この若者をどうされるだろう。行方知れずの兄を追つて来ただけならば……いや、それだけの理由でこの里へ忍び込もうとするなど、到底考えられぬ以上、やはり生かして帰されまい。となれば雷火は黙ってしまいし、真理も刀を抜くだろう。

そうなつたら、我々は戦えるのだろうか？ いつ来るとも知れぬ敵に備え、武芸の真似事を受け継いできただけの我々は。

暗澹とした気分で屋敷の門をくぐると、いつもより尚のこと、空気が重く感じられた。

庭に出ていらした若様が、陰にこもった表情で私たちを迎えられた。

「その者は離れに運び、手当をしてやるが良い。だが、逃がそうなどとは考えぬことだ。春陽殿は母屋へ参られよ。朱香様がお待ちだ」
「畏まりました」

私は頭を下げ、若様の顔を見ないようにして、その前を通り過ぎた。怪我人の容態が気にはなつたが、綾女がついておるのであれば、間違いはあるまい。それよりも、これから聞かされるであろう言葉の方が恐ろしい。

しかし朱香様は、今日ばかりはさすがに厳しいお顔であろうと予想したにもかかわらず、いつもと同じくにこやかな笑みを湛えておいでだった。私が面喰らっていると、朱香様はさらに当惑する言葉をかけられた。

「春陽殿、今日も親しゅう話しておったようじゃが、真理の様子は

どうだえ。少しはこの里に馴染んで来たかの」

「は？……はあ、この里が気に入った様子ではありますが」

齒切れ悪く答えた私に向かって、朱香様は満足げに何度もうなずかれた。

「良いことじゃ、良いことじゃ」

「あの……差し出たことを申しますが、今は真理のことよりも、晴晶とかいう者の方が問題ではありませんか」

「ほう、あの者は晴晶というのかえ」

「雷火の弟だそうです。何の目的で里に近付いたのか、ほかにもここを知る者がいるのではないか、と懸念しているのです」

今さら言うまでもないことをくだくだ述べているようで、私は自分が馬鹿になった気がした。そんな私を見て、朱香様は赤子をなだめるような口調で仰せられた。

「心配には及ばぬよ。あの者が何をたくらんでいようと、今は我らの側に分がある。真理がここまで連れて参ったのは、葦生彦の御霊じゃ。深谷の葦生彦といえ、最後まで果敢に戦い抜き、天子にさえ血を流させた武勇の者と伝え聞く。お祀りして、里の新たな守り神になって頂けたならば、恐るるものなどありはせぬよ」

「……………」

誓って言うが、いまだかつて私は、朱香様のお言葉に異を唱えたことはなかった。御前であんぐり口を開けて絶句するような、はしたない真似をしたこともない。

だが、今回ばかりはどうしようもなかった。

「お、お待ち下さい。その御霊は真理に憑いているのでしょうか？」

里の守り神になって頂くには、彼を生涯留め置くか……里の族に迎え入れねばなりません」

つまり、里の誰かを妻めあわせるということだ。それも、誰でも良いとはゆかぬ。相応の家柄の者でなければ。しかし、佐伯の本家には若様お一人。分家も女は私しか……

啞然としている私の前で、朱香様はホホホと小さく笑われた。ま

さか、いくらなんでもそんなはずがない。私は若様の許婚ではないか。

「そう急がずとも良い。晴晶とやらについては当面、里に留め置けば良からう。始末しようとして、真理を敵に回しとうないからの」

「朱香様、私は若様の」

「良い良い」

言いかけた私を、朱香様は手の一振りですら黙らせてしまわれた。その面には相変わらず笑みがあつたが、それはもう、何の温もりもない冷ややかなものになっていた。

「あれにはまた、別の嫁を見繕えば良い。新しい血を入れる潮時じやろつて。真理の方が、力も分別も備えておるし、良い婿になるじやろつ」

「朱香様……」

「おお、そのように恐ろしげな顔をするものでない。何も今日明日に祝言を上げよとは言つておらぬ。そなたも真理もまだ若いのじやからな。さ、もう下がるが良い。離れに行つて、怪我人の手当を助けてやるのじや」

私は無言で頭を下げながら、込み上げる吐き気と懸命に戦つていた。

なんという事だろう。最初から朱香様はそのおつもりだったのか。真理から目を離さぬようにいつつけられた時、親しゅうなれと言われたのは、そのためだったのか。

いったい、若様のお立場はどうなるのだ。本家の嫡男でありながら、かようにないがしろにされるとは、信じられない。真理に至つては所詮よそ者、朱香様のお言葉に従う義務などなからうに。彼が拒めば、どうされるのか。考えるとぞつとする。

おぞましい。

初めて私はそう感じた。この本家の屋敷が、ここに渦巻く空気が、朱香様が、おぞましい。それらを当たり前として受け入れ、崇め奉る里のすべてが、おぞましく厭わしい。私自身さえも――。

私は身震いすると、夢中で離れへと走った。一刻も早く母屋から出たかったのだ。

真理たちの姿を見ると、我知らずホツとした。よそ者の三人が揃っているこの部屋は、空気が違う。綾女が振り返り、目を丸くした。「ちよつと、大丈夫かい？ 真っ青じゃないか。ほら、お白湯を飲んで」

綾女は慌てて火鉢から薬缶を取った。差し出された湯飲みを両手で包むと、温もりがじんわりと身の内側まで染みてくる。

真理が不安げに振り向き、小声で問うた。

「晴晶さんのことで何か言われたのかい」

私は黙って首を振った。あんな話は、とても説明する気になれない。私は白湯をぐつと飲んで気を落ち着かせてから、口を開いた。

「その点は今のところ、心配ない。何者であろうと、ひとまずは里に留めておけば、外の者に知られることはなからうと仰せられた。既にこの者が吹聴してまわってれば、また別であろうがな」

横たわった晴晶の顔を見ると、何やら哀れに思われてきた。何のつもりかは知らぬが、このような呪わしい谷に踏み込むなど、不運としか言いようがない。真理たちも同じだ。早く外へ帰らせてやらねば。

「ねえお春ちゃん、何があつたんだい？」綾女が遠慮がちに問うてきた。「随分と思ひ詰めた顔をしてるじゃないか。あたしらじゃあ、力になれないかい」

「何でも言ってみるよ」

雷火までがそんな事を言い出したもので、私は思わず顔をしかめてしまった。お節介の綾女だけならまだしも、こ奴までがどういうつもりだ？

私の渋い顔を見て、雷火はにやりと笑った。

「恩を売れる時に売っておかねえとな。真理の頼み事もまだだつてのに、晴晶のことまで加わっちゃ、立場が弱まる一方だ」

「呆れた奴だな」

思わず言ってから、私は堪えきれずに失笑した。ふざけた男だが、人の心を軽くする術を心得ている、ということかも知れぬ。

と、話し声で気付いたのか、晴晶が小さくうめいて身じろぎした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558y/>

昏い道連れ

2012年1月9日19時50分発行